

著者自伝： 天命啓示の封印と受諾

著者も知りたい
空不動とはいったい何者なのか

Ver. X I

空不動が、修行によって導き出した世界観と、救われの原理を説く。
及び、空不動が示す宗教自身の救われの原理と、人類恒久平和への道が
示される。それは既に40年前に啓示されていたことだった。

独り、普遍の真理を求めて半世紀、人跡未踏の地に至る。
封印した天命の啓示は、40年ぶりに開封され、空不動の天命が明らかになる。

著者 空不動

【はじめに】

私は、本名岩根和郎ですが、「空不動」という修行名で、40年以上に亘って、普遍の真理を求めて修行をしてきました。私は子供の頃から、宇宙と人間を知りたくて、それをライフワークとして、今に至ります。

現在71才（2014年9月の講演会の時点）で、IT企業の創業者で経営者です。元々は学術研究者であり、大学で物理学を学んだ後、国立大学の研究機関で医学と工学の境界領域の基礎研究に十数年間従事しました。その後、退官して企業を興し、現在は画像処理と人工知能の研究をしています。振り返ってみれば、私は人間と宇宙を、物理の面から、医学の面から、工学の面から、社会の面から、そして「空」に至る精神宇宙の面から研究してきたと言えます。

いつ時、五井先生の指導の下で修行をし、五井先生から多くを学びました。この時に私の運命は方向づけられたと思っています。私にとって、気負いの全くない自然体の五井先生はとても魅力的でしたし、五井先生の教えは私の知る限り最も納得できるモノでした。しかしそれが宗教組織となると、どうしても独善的になり、排他的で、他の方法を受け入れないところがありました。私はその中にいて、普遍性を欠いた部分が気になってきて、ついにはどうしてもついて行けず、結果として五井先生からも離れなければならなくなっていくます。私の求める真理としては、まだまだ不足していたということになります。

振り返れば、私は、子供の頃から宇宙と人間との関係と、それを支配するであろう真理の絶対性と普遍性を求め続けてきて、やがて導かれるように五井先生と出会い、ある時点からは直接守護の神霊からの指導を受ける運命を授かります。「空不動」とはその時に、守護の神霊から頂いた修行名です。

やがて私は一人で修行をする道を選択し、五井先生から離れ、単独で守護の神霊に向かい合い、自らの修行を深めていくこととなります。形の上では五井先生と一切の関係を絶って、単独で独自の修行を続けていきます。

修行の過程で、歴史ある世界の宗教や新興の宗教についても勉強してみますが、どれもこれも普遍性が完全に欠如していて、これらは例外なく「世界一偉い人達」の集団であり、ととてもとても、ついて行けないものばかりでした。

そこでどこまでも普遍性を求める私としては、「もはや、宗教の中に真理は無い」と見切りを付けて、ついに私は、五井先生からも離れて、宗教の世界の外側に真理を求めることを決断し、後は迷い無く独自に普遍の真理を求めていきます。尊敬する五井先生からも離れて、単独で修行をしていくと決断したこの時点が、私にとっての大きな転換点

となりました。

私からは世界の全ての宗教はそれ自身が迷っていて、独善を振りかざして、「宗教こそが、救われるべきである」、と見たのです。

その後、私は単独で行に徹底すること40年、宗教の外側に、遂に人跡未踏の独自の世界に到達し、独善の無い、普遍性を回復した真理を確立し、それを自ら実践しつつ、道を説くことになっていきます。

私は昔、物理学が好きでしたから、その必然として唯物論に徹しましたが、その後の多くの修行体験によって、実在としての「空」の世界を確信するに至りました。さらに、真理は宗教の外側に有ると見定めて、霊的な修行をも体験しつつ、実社会を通じての実践的「行」を積んできました。

拙著【人間やりなおし】(平成5年初版/献文舎)、の中で述べたように、私は守護の神霊に導かれ、しかも実社会の中で、霊修行を積んでいくこととなります。そしてその中で、幾つかの天命啓示を受けることとなります。

その中でも、44年前(1970年)から十年間に亘って、主たる四つの天命啓示を授かっています。

しかし、元々学者としての論理思考を持つ私が、これをそのまま信じて、そのように行動する等とは到底不可能なことでした。これらの天命啓示には一つ一つ誠実に接しましたが、実証不可能なことを、しかも独善を徹底的に嫌うこの私が、これをどのようにして受け入れていくのかは、自分自身のこととしても興味のあることでした。

そして遂に、この天命啓示を自ら納得して受け入れる事になった、その合理的理由については、最後まで読んで戴くと、「なるほど」と納得戴ける筈です。

これら天命啓示の一つ一つの詳細は謎であったため、具体的な意味は不明のままでした。また、五井先生が亡くなった直後に、私の所に突然出現した五井先生からの伝言は、驚くべき内容で、その意味は具体的であったものの、あまりに非現実的な内容であったために、私としては長期間封印せざるをえなかったのです。

それが、最近ふとしたきっかけで、謎だった第一、第二の天命啓示は、この五井先生からの伝言がカギとなっていたことを発見し、これらが一連の啓示であったことが分かり、44年ぶりに謎が一気に連続して解けたのです。

このことにより、私の天命が明らかになっていきます。その経緯と、天命を知った著者の決意が、この書で明らかにされます。

特に、読者の関心が集まると思われるところは、昭和55年8月17日、以前の師であった五井先生が亡くなられた、正にその数時間後に、数百km離れた私の前に突然復活して出現される場面でしょう。それは聖書で語られるイエスキリストの復活の場面そのものです。この五井先生の復活によって、一瞬でわだかまりは解けて、私と完全和解に至ります。そしてその場面で五井先生は、この私に将来を託す、重い伝言を授けることとなります。

ここは思い出す事が出来る限り、詳細に、そして可能な限り正確に描写しました。ここは書いた本人にとっても、その時が思い出される、圧巻の場面です。この伝言は多くの謎を含んでいたのですが、この書では、この時の伝言の、真の意味が明らかにされます。

本書は五井先生を知っている人でも、知らない人でも理解できるように纏めました。五井先生を知っている人であっても、「復活の五井先生」を知る人は少ないと思います。私はこの書で、自らに課した封印を解き、五井先生の復活の事実を正式に公表することになりました。

岩根先生を理解しようとする人に対してだけではなく、五井先生を知っている人に対して、「復活の五井先生」が語られた伝言と、それにまつわる出来事をお伝えするのが、直接メッセージを受けた私の義務と考えて、ここに公表することにしたのです。

私はこれまで、五井先生と私との関係を明らかにせずに、それを語ることを封印してきたため、五井先生のことや白光のことを話すのは今回が初めてです。

私は、五井先生が亡くなる2年以上前に、五井先生の下を離れ、形の上では完全に独立して、単独で修行を続け、守護の神霊の指導の下で、誰の助けも無く、人跡未踏の世界に独りで踏み込んで行きます。自ら独力で普遍性を追求しつつ、遂に絶対普遍の価値体系を体得し、その後30年以上の時間をかけて、体得した真理を実践的に実証することになります。

復活の五井先生によって、私が受けた天命啓示の謎が解けることになります。

しかしながら、今なお、第三の天命啓示は将来に託されています。

これらの事について、最近の私の講演内容を基にして、ここに纏めておきたいと思えます。

以下は、著者が主宰する大構想推進会議における第16回洞爺研修会の講演内容を基にして、それに多少手を加えて補足し、纏めたものです。

他の著書と合わせて読まれることをお薦めします。

大構想推進会議主催

第16回洞爺研修会 岩根和郎 講演集より抜粋編集

平成26年9月6日・7日・8日

洞爺湖湖畔にて

第一章 天命啓示の謎と五井先生の復活

●天命啓示を受け入れる日がきた

私には、実はすべきことを、未だそのままにしていることがあるのですよ。

放置している仕事があるのです。いつまでも放置は出来ないと思って、春のセミナーでは、「こんな重大問題が、未だ放置したままになって居るぞ！」と、自分に言い聞かせておいたのです。それは皆さんはご存じですね。

皆さんは『人間やりなおし』を読んでいるから、何のことかわかると思うのです。私自身のこととして、自分に問題提起しておいたわけです。

「こんな重要な事を放置していいのか。いくらなんでも、これはもう放置はできないぞ！」と自分に言い聞かせたわけですね。

そんなとき、ほんの数日前ですが、『人間やりなおし』の朗読版を聴いて、「あ！、そうだ。ここのことだ、そういうことだったのか！」と閃いたことがあるのです。それは例の天命啓示の部分ですよ。

そして今日、ここは公式の場ですから、この公式の場で、きちりと言っておきたいことがあります。

それはつまり、私は過去にいくつかの天命啓示を受けているわけですが、それに関して、一つの結論が出たと言うことなのです。

第一の天命啓示から12年後に出版した『人間やりなおし』を見ると、私が受けた天命啓示がちゃんと纏めて書いてあるんですよ。でも、それでもこれは、いろいろ受けた啓示の一部なんです。最初の天命啓示から『人間やりなおし』の執筆までの12年の時間のフィルターにすくい上げられた啓示だけが、ここに残っているのですね。細かいことはもう忘れていますが、でも重要なことは今もきちり、思い出せるようになっているのです。当時から見て、未来のいつの日か、天命啓示を受け取る場面では、それがちゃんと思い出せるようになっているのですね。

そして、天命啓示を受諾する準備が整い、そのまま数日前までに至るのですね。

●第一の天命啓示

第一の天命啓示としては、あれは私が27才（昭和45年（1970年））の時に受け

た啓示です。その時に、はじめて天命啓示を受けたのですね。

私は今でも、『人間やりなおし』を読めばそれをキッチリと思い出せるのですね。

その一つはこういうことです。あの時は愛車クラウンに乗っていた時代です。車を運転していて、突然光に打たれたような感じになって、それは丁度ハッカを食べたような感じで、背筋がスーッとできて光に包まれた感じになったのです。このまま運転していたら危ないな、と思ったので、車を路肩に寄せて、そこで暫く瞑想していて、それが過ぎ去るのを待っていたのです。その時に何があったかということは、自分が書いた本を読むと、色々とかかなりの部分を思い出せるのですね。

「汝の天命は、人類のこの危機的時期にあつて、釈迦やイエスにもできなかった偉大な仕事を成し遂げることにある。」と守護神から言い渡されたのです。

思い出してみれば、それは確かにそうだった。それは直ぐに思い出せることでした。「そうだそうだ、そんなことがあった」と思い出せたのですね。まあ44年前の事ですからね、それは。キッチリと書いておいて本当によかったのです。もし書いてなかったら、ここまで詳しくは思い出せなかったと思うのだけど。キッチリ書いてあったので、良く思い出せるのです。

でも、その啓示があった時は、言葉の意味よりも、光が体の中にバーンと入ってきたショックの方が大きく、黙って過ぎ去るのを待っていたんですね。

数分の後に、体が元に戻って、その啓示の言葉を噛みしめて、「すごい言葉を頂いたものだ」と感動しながら、身が引き締まる思いと、これからいったい、どんな修行が始まるのだろうと期待しつつ、多少の不安もあって、これから展開するであろう自分の人生に思いを至らせ、覚悟と共に心底感謝していましたね。この第一の天命啓示は、すばらしい人生を予感させる、記憶に残る出来事でした。

この時の感動は、これから始まるであろう、さまざまな困難や試練に立ち向かうための勇気を与えてくれましたね。

27歳のこの時から、私の人生をかけた本格的な修行が始まりました。拙著「人間やりなおし」で詳しく書いたように、様々な体験を通して、今に至ります。そして、七十歳を過ぎた今でも、修行は続いています。

「釈迦やイエスにもできなかったこと」というのは・・・、これって、すごい内容の掲示だけれども、44年経った今から考えると、もう既に結果が出ていて、ハッキリしていることですよ。

しかし、この時点では、その具体的な意味は、まだ分からなかったのですよ。分からないからこそ、本に書いてあるように、必死で、否定しようとか、騙されまいとか、傲慢になるまいとか、していたことも事実ですね。今思えば、もっと素直に受け取れば良かったのに、と思いますね。

その結果とは、その後の様々な修行と、幾つかの関門を乗り越えて確立した「絶対普

遍の価値体系」を得たことですよ。つまり、「独善を排し、普遍性を回復する理論と、そこへ至るための自明行を中心とした実践的方法論」のことですよ。そういうことなんだらうと、今ははっきり思いますね。

これが釈迦やイエスにも到達できなかった、そして私だけが到達することができた絶対調和の世界なのです。

大きなことを言っているように思う人も居るかも知れませんが、私の説いた内容を良く理解してもらえれば、事の重大さは十分理解出来ると思いますよ。

●第二の天命啓示

それから第二の天命啓示としては、それは朝方のことでした。眠ってはいないのだけど、目覚める時に起きたことなんです。それは守護神からの啓示なのですが、「救世の大霊団というのがあって、今、この人類の危機を救うために活動していて、この世界に遣わされた4人の使者がいるのだ。・・・」とのこと。そして「そのうちの3人目の使徒があなたなのだ・・・」という啓示があったんです。

この啓示は今でも完璧に憶えています。何で私が4人のうちの3人目なんだ？。1人目ではなく、そして最後でもないのか。とか、あともう一人後ろにいるのか？、とか、何かその人数の設定と順番を不思議に思った記憶が強かったので、今でもよく憶えているのです。

さらにその時、将来の場面を象徴的に戯画化して見せられました。将来の成果を「弓で矢を射ること」として、そしてその結果としての「的」として戯画化され、1人目、2人目はそれなりの業績は残したものの、「的」の中心を大きく外し、最終目標を達成することには失敗します。そして3人目である私は前者から多くを学び、その失敗をも良く研究し、宗教から一旦離れて、徹底して普遍の真理を追究し、見事にその目標となる「的」の真ん中を射貫く事が出来たのでした。ここで私が成功したために、私の隣にいた4人目の出番が無くなるのでした。そして持っていた弓を地面に投げ捨てて、出番がなくなったことをとても残念がっていたのが、何とも人間的で、印象的でしたね。

このような表現法で、私だけが成功するというストーリーを知らされたのです。これが第二の天命啓示ですね。

当時、1人目、2人目、とは誰のことかと、少しは考えてはみましたね。第一の天命啓示と時間的には近かったので、釈迦が1人目、イエスが2人目かな？とか。それから谷口先生が1人目で、五井先生が2人目かな？という流れも、確かに思いつきましたね。

しかし、どう考えてみても、何の根拠も無いし、それが特に大きな意味を持つとも思っていないのでしたから、特に重大視はせず、単にそれだけのことでしたね。

これは、ドラマ的でおもしろいと言うだけで、特に重要とは思えない内容でした。ただ、そういう大きな働きの中に自分はきっと居るのだらうな一、という程度で、特に否定するでもなく、肯定するでもなく受け取っていました。

●第三の天命啓示

それから天命啓示とは、さらに第三と第四があって、第四というのは、五井先生が亡

くなった時のことなんです。それは後ほど詳しく話します。

ところで第三というのとは何かというと、これも朝方の天命啓示なんだけど、大地に響き渡るような、エコーが掛かったような威厳のある声で、「汝ソロモンの子、ダヴィデの子、ヘロデの子。」といわれたんですね。

思い出してみても、ヘロデと入ることで、これはユダヤ系ということだということがわかります。キリスト教系ではないということの意味しています。

イエスと同時代のヘロデがここに入ることで、この啓示はキリスト教系ではなく、ユダヤ系という意味になり、驚いています。私はキリスト教に関しては身近に書物も沢山あって、いろいろ読んで、親しくしていて、基本的なことはわかっているつもりですが、ユダヤやユダヤ教に関しては、雑学的知識しかありませんが、その雑学的知識であっても、この啓示は、なかなか重い啓示であることは理解できます。それ故に、ここでの解説は差し控えておきたいと思います。

これはいずれ、とてつもなく大きな意味をもつのだろう、と感じていますが、今はこれは私にとってもまったく未知数ですね。そういう啓示があったという事実だけを皆さんに伝えておきます。今回はこのことについては触れません。

今すぐこれに対応する必要は無いと思っていますし、現時点で、これに直接係わるようなことは何も発生していませんからね。

●第四の天命啓示

そこで第四の天命啓示の話をして。実は、五井先生が亡くなられた日の出来事の意味というのは私にとって、長い間の謎であって、良く理解出来なかった部分が多かったのですが、最近やっと謎が解けて、その全体像がわかったんですよ。

それは昭和55年（1980年）8月17日の出来事ですから、私が37才の時ですね。五井先生が亡くなったその数時間後、500km以上離れた私の所に、それはそれは、ものすごいパワーの光りにつつまれた五井先生が突然現れて、その五井先生から直接「私の後継ぎはあなたです。」「あなたが、これから人類を救うために、大きく働くのです。」ということをお伝えされたんですね。

でもその時の私は、五井先生が私の前に現れて頂いたことが有難く、とてももったいないことだ、と思いつつも、一方で「今そんな、後継ぎと言われても・・・実際問題、そんなこと不可能と思うけれどなあ・・・」という困惑の中にいましたね。

「今はもう白光真宏会（以後、白光と記述することがある）を離れているのに、宗教とは肌が合わないし、もう宗教には係わりたくない、と強く思っているのに・・・、今更私が後継ぎだなんて・・・、それはとても無理ですよ。常識的に考えて有り得ないことですよ。」と、ブツブツ言っていた状況でした。

しかし、この伝言は、こちらの話も聞いて、こちらの同意を求めるという感じではなく、五井先生からの強烈な一方的な通達でした。暫くして五井先生は霊界に帰っちゃったんですね。私はその余韻の中で、暫くボーッと、五井先生から言われた後継ぎ

の意味を色々考えていて、自分の気持ちはさておいても「とても、重い内容だけれど、これはどう考えても非現実的だよなー。」と、とても困惑していたのです。

ここでは、四つの天命啓示の中の一つとして、この五井先生復活の経緯をここに簡単に話していますが、午後からは五井先生の復活に限定して、もっと詳しくお話しすることにしますね。

復活された五井先生からの依頼は、あまりに現実とのギャップが大きすぎるし、突飛すぎて、どう考えても、あらゆる面で条件が整っていないと、私には思われました。

そこで、一週間ほどいろいろ考えて、私は「今はどう考えても現実的ではないと思いますが、「いずれ、条件が整った時が来て、自分で合格点をあげられるようになった時には、それを受けますから、」みたいなことを返答して、私の中では、強制的に終わりにしたのです。

この五井先生からの依頼を、この時点では「今直ぐはとても受諾出来ない」と判断して、意志力で強引に断ち切らざるを得なかったのです。この難題を、今後いつまでも引きずりたくない判断したのです。そして30年以上に亘って封印し続けたのです。

でも私は、もう71歳ですからね。ここにきて、まだ「無理です」とは言えないよなあ！、と、思っていてね。いくら何でも、もうこれは、キツチリと解決しないとだめだ、と思うようになりました。

●第二の天命啓示は、第四の天命啓示がカギとなっていた

おそらく第一、第二の天命啓示は同一の時期（昭和45年（1970年））に受けた啓示で、その後突然受けた、第四の天命啓示（昭和55年（1980年8月17日））との関係性に、当時はまったく気づかなかったのです。まあ、気づかないと言うよりは、そのようなストーリーは考えついても、それをリアリティーをもってその気になることが出来なかったというのが正直なところです。

今になって思い出せば、救世の大霊団のことを五井先生は講演の中でよく仰っていました。救世の大霊団とは、私が守護神から第二の天命啓示で言われた言葉ですが、五井先生は救世の大光明と仰っていたと思います。それはその主旨からして、まったく同じモノを指すと考えて問題は無いと思います。この言葉のちょっとした違いもあり、これまでは、証拠もないあまり霊的な出来事の判断に陥りたくないという警戒心もあり、何故か両者を関係づけない出来たわけです。

あれから30年以上経ち（平成26年（2014年9月））、ここに並べて見てみると、見事に見えてくることがあるのです。まあ、その時機が来たので、気づかされたと言うことが出来ます。

それは、第二の天命啓示、救世の大霊団の4人の使徒のうちの3人目の**使徒**という話と、第四の天命啓示で、五井先生が以前語られていた救世の大光明の地上の受け皿であるとのことと、今回の五井先生からの「後継ぎ」の啓示とが、リアリティーのあるスト

ーリーとして、見事につながってきたわけですね。

私はこれまでは全く、これら10年も間があるバラバラに受けた啓示が、一連の啓示として、重要に考えることは出来なかったのだけれど、今になって並べて読んでみることで、「あ、そういうことだったのか、」と閃いたのです。

驚くことに、第二の天命啓示は、それ自体では、ドラマ的で面白く印象深かったけれども、具体的な意味が無いと思っていたのですが、この第四の天命啓示が、第二の天命啓示を解くカギになっていたのです。それが数日前にやっとリアリティーをもって、理解出来てきたのですね。

今になって『人間やりなおし』を読んでわかってくることは、救世の大霊団から遣わされた一人というのは五井先生のことなんですよ。何もこの時初めて知った事実関係ではないのですが、当然予想の範囲ではあったのですが、それが今まで、どうにも話が飛びすぎていて、直接的にはリアリティーをもって関連付かなかったのですね。

何故今まで関連付かなかったのか、それが私にとっても不思議なことなのですが、その理由を考えてみれば、次のように説明出来ます。

五井先生にとっての、救世の大光明としての働きが最も重要なことだったということに私はなかなか気づかなかったからですね。

よく考えてみれば、それはそうですよ。救世の大光明というのは目に見えないし、時々五井先生の話に登場しましたが、なかなかそれが五井先生の天命であり、最大の使命ということに、気づかなかったと言えますね。白光の教祖と救世の大光明の地上の受け皿という、この二つの立場を切り離すことが出来て、やっと謎がキレイに解けたわけです。

目に見える五井先生と言えば白光の教祖様という感じでしたから、後継ぎを頼むと言われれば、当然白光の後継ぎの意味と違ってしまって、その時点での私の中では、白光を離れた救世の大霊団という発想はまったく無かったと言うわけです。

ここでやっと私は、後継ぎの意味を救世の大霊団の後継者として受け取り、そこでの五井先生からのメッセージは第五章で詳しく述べますが、1972年時点での五井先生の言葉からは、救世の大光明の後継者と白光の後継者とは区別せずに、同一としてお話しされていたように思います。その時は未だ五井先生ご存命中ですから、それで矛盾は無いと思います。

ところで、五井先生は「私は救世の大光明から遣わされた」とか、「救世の大光明の中から来た」とか、良く仰っていたのですね。ご自身は救世の大霊団の地上の受け皿だ、と何度も仰っていましたね。「救世の大光明の中には、過去の多くの聖者の方々のみならず、歴史上の様々な人々や、嘗ての悪役も含めて、多くの方々が参加している」とお聞きしたことがあります。五井先生からお聞きしたことを思い出してみれば、救世の大光明の中には、仏陀、イエス、老子をはじめ、秦の始皇帝も居られるとか聞いた記憶があります。

そのことと、自分のことがこれまでリアリティーをもってつながらなかったのだけ

ど、地上の受け皿として地上での担当者は、五井先生がご存命中は五井先生だったことを思い出したのですよね。そう解釈すると、全ての辻褄が合って理解できるのですよ。五井先生ご存命中は五井先生の天命である救世の大霊団の**使徒**であることと、白光の教祖で有ることとは一致していたのですが、亡くなられてからは、その二つの立場は分離し、救世の大霊団の**使徒**と、白光の組織の後継者は別々に後継されると考えることは決して無理な考えではないことが分かります。

ですから、亡くなられてからは、第一に五井先生は白光真宏会の教祖ではなく、救世の大霊団から遣わされた**使徒**の後継者を私に委ねたということになりますね。一言で言うなら、五井先生の伝言での、後継者の意味は、第一に救世の大霊団の地上の受け皿の後継者を意味していることになりますね。

つまり、後継者という意味は、白光真宏会の後継者の意味ではなくても、話の辻褄は合うのです。いやいや、そうでなければならぬことに気づいたのです。

何故、長い間、その二つの立場に気づかずに居たのだ、と疑問に思われる方も多いと思いますが……。確かに、ここに並べて書いてみれば、それが当然で、この帰結は必然なのですが、第二の天命啓示は神話みたいな、日常とは次元の違う話で、一つの楽しいお話として、現実とは切り離れた、不思議な話ですからね。そして一方の教団の教祖というのは現実の立場であって、それが同列、或いはそれ以上の立場とはなかなか思っていなかったということですね。

もし、救世の大光明というのが、ホントにあるのかどうか、曖昧のままであっても、教えの内容が変わるわけではないから、特に重要視していなかったのだということなのです。そして、救世の大霊団に関しても、それが有ってもなくても、私の活動に何ら影響はないので、それまでは、それを重要視しなくても、特に問題は無かったのです。

さて、私はそれを受け入れました。「救世の大霊団の地上での受け皿の後継ぎはお前だぞ。受け皿として、五井先生の後を継ぐのはお前だぞ。」と言われたんだと気づいたのですね。それがやっとわかったんですよ。ああ、そういうことなのかと。それで私は4人のうちの3人目だから、五井先生は2人目ということになる。そういうことだった、と納得できたわけですね。

それでやっと私は、非現実的な、白光真宏会の後継ぎという、無言の束縛からやっと解放されたと思ったのですね。そうであれば五井先生からの伝言の意味は明確に理解できたことになるのです。これだけの時間をかけて、やっとわかったわけですね。そしてそのためには、五井先生の教えと私の教えを矛盾無く結合して、一連の流れをと豆無ければならぬことになりました。もちろんそれは私の中では既に出来ていることであって、外向けにもその道を示しておく必要が出てきたということです。

このことが理解出来たことで、封印は解けると判断し、これまで放置してきたけれど、これで私の天命啓示の受諾は、これ以上は先に延ばせないだろう、ということもわかっ

たのです。

そこで、これからこの場で、重大宣言をします。

『この場を通して、私は、五井先生の後継者としての天命啓示を受け入れ、同時に私は救世の大霊団が地上に遣わした3人目の使徒である。と、ここにはっきり明言します。』

ここは公式な場ですから、その場にふさわしいのです。ここには沢山の神様が降りてきているわけですから。こういう場において後継者として、それを受けますと明言するにはとてもふさわしいことです。私は、これまで引き延ばしてきたけれども、もうこれ以上は引き延ばさないことにします。その理由もなくなりました。そこでやっとこのように宣言することになったのですね。

振り返ってみて、やはり真理の普遍性を追求するためにこそ、私はずっと修行してきたのだと言い切れます。そして特記すべきは、その真理の追求の中で般若心経と出会ったことです。そして、般若心経の暗号を解読し、空が決して「実体が無い空」ではなく、超実体・超人格であることを示すことに成ります。般若心経の解読によって、私は絶対普遍の真理を確立したと思っています。

般若心経の応援はものすごいですよ。だから般若心経というものを一つの普遍性の象徴として、位置付けたいと思っています。だからこそこんなに力を貫っているんだと私は思いますね。[未完成だった般若心経／献文社／岩根和郎]、[仏教再生としての／般若心経／岩根和郎／YOUTUBE]を参照のこと。

まずは、私として、一番気がかりだったこと。つまり、「復活の五井先生」がそこまで言ってお下さっているのに、私はそれを、「今はとても無理です、無理です」と言って、延ばしてきたということを、とても申し訳なく思っていたのだけれど、やっとその時が来たのだと思いましたね。でも、やっぱりあの時は、今になって考えてみても、受け入れられなかったでしょうね。私はまだ修行中だったし。とてもそんな自信も無いし。何よりもその時点では後継ぎは後継ぎでも、白光の後継ぎと思っていたからね。

そして今なら、五井先生の天命は白光の教祖ではなく、救世の大霊団の地上の受け皿であると分かりますし、今や、私が救世の大霊団の後継者となることに何の躊躇もなく、障害となるモノもなく、その使命を受諾できるのですよ。まさに今だからこそなのですね、それは。しかしながら、その行動方針については、今は全くの白紙です。私、一人では何事もなしえませんが。救世の大霊団の受け皿として、一体私に何が出来るのか、これから瞑想の中で考えることになります。

宇宙の中での救世の大霊団の働きの存在とその重要性にやっと気づいた、今だからこそ、それを受け入れる時なのだと思います。そこに至るまで私は修行をして、その資格があると自分でも思えて、堂々と受け入れる自信がついたということなのでしょう。そうなのだと思います。

さて、今の私としては、普遍性の追求ということの基本的なことはほぼ済んでいます。これでもって世界の恒久平和の理論というものがきっちりできたと思っています。これを世に知らしめることから始めることになりますね。そうする中で、救世の大霊団からの、次の司令を待つことにします。

ところで、4人目がいたのでしたよね。戯画化された啓示の中では、3人目が完璧に絶対普遍の真理に到達したことで、4人目の出番は無くなるのでした。

この場面をよくよく読み解いてみると、「3人目で救世の大霊団の受け皿は私で決定し、その後に出てくることはない。」という意味になるのだと思います。「もう、同じ目的で矢を射る人は居ない。」と言うことであり、「3人目の**使徒**によって、救世の大霊団のプロジェクトは実行される。」と言う意味になるのだと思います。

そこで、3人目の**使徒**としての私の願いを言わせてもらえば・・・、そして私の願いが救世の大霊団の方針と一致していることを前提に言えば、この後私の説いた道を横に展開するために、私の開拓した普遍の真理を体得した複数の使徒が出てきて、私の業績をより具体化することで引き継いでくれることを期待したいと思います。これは、救世の大霊団のプロジェクトに含まれていると思います。それは決して1人ではなく、複数です。それはかなりの人数でなければなりません。

この救世の大霊団のプロジェクトは、私が救世の大霊団から受け取ったメッセージをさらにかみ砕き、さらに各分野に、各宗教に説き変えて、或いは人類に対して直接説く新たな道として、実践的に示すという大きな作業が残っています。救世の大霊団の方針としては、そういう風になるのだと思いますね。私が救世の大霊団から受け取ったメッセージとは「仏教再生としての般若心経」に説かれた内容であります。それらの役割を持つ賢者達は、3人目の**使徒**の下に位置づけられますが、その役目を明らかにするための何らかの制約と資格は必要です。これについては後に、第六章で詳しく話します。

そこで私は私につながって、私の示した道を歩み、私の示した修行を成就した人達と共に、その準備をすることになります。皆さんのことですよ。

これまで私は、普遍性、普遍性ですっと通して、自分の絶対性を特に主張しないできたけれど、もちろん絶対性を主張する場面は、これからは出てくるんだと思います。

ちょっと楽しみですね。忙しくなりそうですね。楽しい話になりそうですね。皆さん大丈夫ですか？ 先生の弟子なんですからね！。

振り返ってみれば、私はここまでちゃんとあの時に、霊修行を前にして誓ったこと、こうやろうと思ったことは全部やったことになるな、と思うのですよ。私はそれをちゃんとやってきたのです。その一つの成果が般若心経の暗号解読に反映しているし、自分の体験した絶対普遍性というものが、般若心経というものに見事に集約できて、表現できましたからね。ここまでで、十分に般若心経はそういうものだということが世の中に

伝わったしね。むしろこれからは般若心経を簡単に分かりやすく書く事が残っているね。

しかし、反発が意外と無いのですよね。これが不思議だね。出版後に、かなり反発があるんじゃないかと、それなりの準備をしてたんだけど。

やっとなら、天命啓示を受諾する環境は整ったな、と思ったわけです。

つまり、4人のうちの3人目ということは、五井先生は2人目だということ。そしてそれなら1人目とは誰かを知りたくなりますが、私はわからないとしておきます。系統をたどれば、それらしき人はいるけれど、それは私が決めることではないからです。

ですから、ここでは限定はしないで置きます。そこは不明としていいんじゃないでしょうか。

申し訳ないけれど、白光真宏会の後継ぎと言われたと思った時、「いや、私は宗教から離れて、普遍性を追求しようとしているのに、今さら宗教はやりたくないんだよなあ、」とかね。すごい否定的な思いが出たんですよ。申し訳ないと思いながら「私は宗教にうんざりしていて、宗教から離れてやろうとしているのに、今さら宗教には係わりたくないなあ」、とか、「普遍的にやろうとしているのに、白光真宏会に戻ったら、又独善の中からはじめるのか」とか、「いやいや、これは困ったな、自分が進もうとしていることとは逆だなあ。」とか、そんな否定的な事ばかり思っていたのですね。

●五井先生との関係を曖昧にしておけない

天命啓示を受け入れるとした今日、ここに至るには、それなりの準備ときっかけがあったのです。それはたまたま、この間の5月の講演会で、五井先生との関係についての質問が出たんですよ。熱心に、「何か、岩根先生は五井先生と関係あるんでしょ？」とか、聞かれるのですよね。私は、それに応えられずに、知らん顔してたんだけど、「確かに、誰もが私をそう思うんだなあ。」と、今の置かれた立場を知らされました。5月の段階では、まだ納得して受け入れようとは、して居ませんでしたから、その質問に「実は、私が五井先生の後継者ですよ」、とは、とてとても、言える段階ではなかったですからね。

そして何よりも私には、師であった五井先生の伝言に、素直に従いたいという気持ちの一方で、宗教に深入りすることは避けたいという相反する気持ちがあったまま、ここまで来てしまったという自覚があったのです。

私はこれまでに、幾つもの醜い宗教の分裂劇を見てきましたから、そのようなことには強い拒否反応を持っていましたね。私としては、その時は未だ五井先生との関係を明確に言える段階には至っていませんでしたが、見苦しいことだけは、絶対にしたくないと強く思っていたのです。

私は、私自身を、どこまでも普遍性を追求する1人の修行者であると自覚しています。その修行者の身で有りながら、人を指導することは十分に慎重でなければならないと考えていました。ですから、自らの役割が与えられることがあるとしても、つまり、五井先生の伝言を受け入れる時が来るのであれば、普遍性に反しないように、それを自ら実証しようとしていましたね。

そこでここに、「普遍性に、反しないように」ということに関して、その意味を分かりやすく説明しましょう。

それは、宇宙の中で自らの立場を謙虚に位置づけて、宇宙の中の一つの働きに徹する事です。一つの部分の役割とすることです。その中に絶対性と普遍性を表現することです。ですから、もし宇宙の中心に自らを置き、或いは全体を自分として位置づけたとしても、悟りを得たのであればそこまでは可能です。しかし、この先、もし自らの働きを部分とせず、全体として、自らは決して間違いを犯さない人間として、他を否定したり、配下に置くことで、自らを肯定しようとするれば、それは独善として、たちまち普遍性に反してしまいます。そうとは気づかずに、それをしてしまっているのが、多くの宗教であり、その宗教に係わる人達なのです。

ですから、相手を否定して自分を肯定するのであれば、それはとても簡単なことなのですが、普遍性を追求する修行者であることを自負する私としては、それは絶対にしないと決めていたのです。

だからこそ、二人の関係を質問された時に、そう簡単には答えられず、これからは「五井先生との関係をはっきりさせて、普遍性の中できちり説明できるようにして置かなくてはいけないな」、と思ったのです。

そういう出来事が前にあって、そしてこの数日前に、たまたまランダムアクセスで、自分の書いた『人間やりなおし』の第一章の天命啓示の朗読版を聴いていて、そこで見事につながったわけですね。「あ、そうか。五井先生自身も救世の大霊団の一人だとおっしゃっていたから、そのことと私が受けた啓示とがここでつながった。」と思ったわけです。やっとりアリティーをもって、キッチリつながって、今ここに堂々とお受け出来ると思ったわけですね。

何か自分の中では、これまで、上記の事実関係は知っていたのですが、どうもそのところにリアリティーが持てず、モヤモヤとしていて、「まだダメだ」と思っていたのですね。どこかで答えを早く出さなければだめだな、と思っていたのですよ。

「私は、その回答を死ぬまでに出せるのかなあ」と、そういうことをも思っていたのですね。そして今日第16回洞爺研修会でこれを正式に皆さんを前にして、公表できて、とても良かったと思っています。私にとっては肩の荷が下りて、価値ある第16回洞爺研修会でした。

これはこういう場で話すということが大事なんです。たまたまタイミングよくここに向けてそういう話が積み重なって来たんです。

第二章 五井先生復活時の伝言、及び封印

五井先生復活の話は、私が受けた主たる四つの天命啓示の内の一つとして、位置づけています。そこで、岩根先生と五井先生との関係をより明らかにするために、さらに五井先生の復活の過程をより詳しく話してみようと思います。

これまでの私は、五井先生との関係と、白光真宏会との関係については、意識的に一切触れずに、関連づけずにきました。敢えて私の説く絶対普遍の道は、五井先生とは関連づけずに、私独自のモノとして説いて来ました。私の説く道と五井先生の説く道との違いを、私は発展的に連続的に位置づけて肯定していましたが、私の説く道は白光からは否定されていたため、関連づければ白光としても、迷惑だろうと思ってきました。しかも、私としても誰ともどことも関係なく、どこの宗教にも属さずに、宗教の範疇からは外れて、単独で普遍性を開拓しようとしていましたから、普遍性を追求するという私の立場からは、今更誰かの後継者となり、一つの系統に分類されることは、普遍的であることの純粋性を一部失うことになるという心配もあったのです。

ですから、私の説く道は五井先生とは異なる道として位置づけ、私自身の修行により体得した独自性を前面に出して道を説いてきました。五井先生復活の時の伝言の真相の謎が解けていない段階では、そうすることが私なりの正直な姿勢であったのです。

これまで私の話を聞いてきた人にとっては、戸惑いもあるのではないのでしょうか？。これまでは、岩根先生の道は絶対普遍の道であり、これは既に宗教ではなく、従来どの宗教の系統にも属さないとの立場で話してきましたから、そのように理解してきた人にとっては、五井先生との関係を明確にした今回の話には、驚きもことさらでしょう。

そこで今日からは、五井先生復活の謎が解けたことで、五井先生と私の関係を、宇宙の中で新たに位置づけをし直し、救世の大霊団の存在を前面に出し、その上に岩根先生が四十年かけて徹底追求した、究極の悟りの世界を展開し、同時にそこに至る方法論を示すことにします。

その契機となった五井先生復活の真相から、ここに詳しく説明していきたいと思えます。

●五井先生が復活された

五井先生の復活について、もう一度、最初から詳細に説明しておきましょう。

五井先生が亡くなられた数時間後に、それはそれは、強烈な存在感で、突然私の前に五井先生が現れたのですが、その存在感というのはものすごい強烈なまぶしい程の光としか言いようがないもので、それはもう、実際にそこにいるよりも、もっと強い存在感があるのです。目をつぶろうが、どうしようもなくそこにおられるのです。光と言っても物理的な光ではないのですが、そしてその姿はちゃんと、肉体のようにそこに居られるのです。今は思い出せないのですが、その時は、着ている服もはっきりわかったと、

覚えています。だから普通の人なら、本当にそこに肉体の五井先生が居られると思うでしょうね。

復活と言っても、どこでもここでも出ていくわけにはいかないのだと思いますよ。向こうへ帰る途中に寄らなければいけないのですからね。生命エネルギーを集中して、わざわざ私のところに来て下さったわけです。最後に救世の大霊団から特別に与えられた生命エネルギーを、全部私のために、私に会って、後継者としてのメッセージを伝えるために、使って下さったわけですからね。そうなんですよ。

このことについては、もっと詳しく思い出して、お話ししますからね。

五井先生の復活のことは強烈な体験だったので、いつでも鮮明に思いだされるし、その後も時々思い出していましたね。

この時の貴重な経験を出来るだけ正確に思い出して、ここに書き留めておきたいと思います。これは私の義務であるようにも思うので、注意深く、作為を一切排して、思いだされる限り正確に書いてみたいと思っています。

●五井先生の復活を詳細に記述する

イエスの復活の話は、私も聖書で知っているからね。体験してみて、本当に復活ってこういうことなんだと思いました。だから、あれからは聖書の話は本当なんだと思うようになりました。復活を経験している人って、そういないと思いますよ。聖書に出てくるように、イエスが復活して、弟子の前に現れた。そのものずばりの体験ですからね。復活って、別に形だけじゃなくて、その人の持っているバイブレーションそのものがそこに現れるから、疑う余地なんか0.001%もないですよ。そこに本当におられるんですよ。距離としては2 m以内だよ。そういうところに現れるわけです。私も霊的なことはいろいろ体験してるけど、これはものすごい体験でした。この時に「あなたは私の後継者です」との伝言を言い渡されたのです。この時の「あなたは・・・」というのが印象的でした。いつもの五井先生は私を「岩根君」と呼ぶのが普通でしたから、これはとても厳粛に感じましたね。

五井先生自身も生前、日曜日の集会でイエスの復活のことをお話ししていたのを私は覚えています。それがそのままでしたね。霊体と霊体を包む魂魄の要素で現れて、しかもその時、その場に居る私自身の霊体と魂魄も、同時に共鳴して、その場を作っているのだと感じました。

ただ一つ、その後何度も思い出して考えさせられる不思議なことがありました。それは強烈な霊体から発するメッセージとは別に、魂魄からは五井先生の胸の痛みが強く感じ取れたことです。それは何か重要なことを、わざわざ私に伝えているように思われてしまって、長く私の記憶に残りました。その時には直ぐにその「痛み」の意味は良くわかりませんでした。時間がたつにつれて次第に絞られて、理解されてきました。その解釈によっては、五井先生の胸の痛みを敢えて書く必要は無いかも知れないと思いまし

たが、事実を事実として残すことが私の姿勢であり、そのためには、慎重に書いておこうと思います。

それは、はじめ、私を教団から排除したことに対しての、私に対する思いなのかとも思いましたが、最終的にそれは違うと思うようになりました。その後次第に明らかになったことは、教団の組織上の混乱に対する問題の解決を私に依頼しているのだと思われてきました。後に詳しく説明しますが、これはいわゆる「人間的苦しみ」ではなく、魂魄からの強いフィードバックによる「正しい苦しみ」であり、五井先生からのメッセージであると見えてきました。

つまり、五井先生の霊体と魂魄はそれぞれ別々に私にメッセージを伝えていたこととなります。

ところで、復活の五井先生の霊体から発するパワーは、私はこれまでに体験したことのないような、ものすごいものでしたね。その強烈なパワーで、私の体がふわっと浮き上がりそうになるのです。これは実際に宙に浮き上がる感覚なのです。

当時の北海道の建物は、凍結防止のために室内に配管がむき出しでしたから、私は近くのボイラーから床を這う配管につかまって、浮き上がらないように体を固定して、身動き一つせずに、必死の気持ちで五井先生と交流していました。

そのときに、向こう側で、誰かが、「アッ、五井先生だ！！、」と大きな声を出しているのが聞こえてきました。

後でその状況を思い出してみても、「ああ、五井先生の復活の出来事とは、私だけに感じられたのではなく、客観的な出来事だったのだ。」と理解しました。

私は四つん這いになって、配管にしがみついた不自然な姿勢で交流していたので、その状況は手足の筋肉が痛くなるくらいで、相当長く感じましたが、おそらく実際には、五分程度だったのではないかと思います。

復活の状況は、イエスの場合と同じだと思いましたね。イエスの場合は埋葬された肉体を使ったと言われていますが、おそらくそれは違うと思います。生前、五井先生もイエスの復活をそのように仰っていましたね。

ですから、五井先生も、明らかに死後の肉体は使っていません。そしてイエスの場合も、墓から死体が消えて、無くなっていたことから、後代の人がそのような解釈をしたのであって、肉体は使っていないと思われれます。ですから、五井先生の復活の場合も、肉体ではなく、霊体とそれを取り囲む魂魄の要素と、関係者の霊体と魂魄が共鳴状態に成って、その交流の場を作ったのだと理解しています。

この時、私の霊体と魂魄も一体となって共鳴しているから、私はそれが自分のことのように強烈に感じ取れたと考えています。これが復活の真実だと思います。

ですから、霊体と魂魄が共鳴する状況を作ることができる関係、つまり両者の霊体としては極めて親しい関係にあるから、それが体験できたのだと思います。そして感じ取れたのだと思います。

その状況は肉眼で見ているよりも、もっともっとリアリティーがありましたね。目をつぶっても、横を向いても、どうしようもないくらいの、ものすごい存在感でそこに立って居られた、という感じです。有無を言わせぬほどの、絶対に拒否は出来ない威厳のあるパワーでしたよ。これは「復活」であり、いわゆる「霊的に見える」というのとは根本的に違う出来事です。ですから、これは通常の「霊的に見える」というのとは全く違う現象と受け取らなければなりません。実際に、霊体と魂魄が空間を移動しているのですから、通常の霊現象では無いのです。むしろこれは、空間移動を含む物理現象に近い出来事なのだと思います。

しばしば、修行においては霊的な現象は一旦否定せよ、と指導するものなのですが、そのようなこちらの知識さえ、こざかしい、ちっぽけな作為に思えて、そんなものは吹き飛ばしてしまうような、厳粛な中の、明々白々の、五井先生だったのです。そしてそれは交流とは言っても、話は五井先生からの一方通行でしたね。

言葉が肉声のように聞こえているつもりでいましたが、しかし冷静に考えてみれば、それは肉声では無く、ベクトルなのです。つまり、それは強烈なテレパシーなのです。そしてこちらも肉声では無く、ベクトルで応えているのです。音声はベクトルなら、その時の五井先生の容姿も衣装もベクトルなのです。その時は、何も不自然に思わなかったことから、肉体も着ている服もはっきり見えていたと思うのですが、和服だったと思うのですが、今はよく思い出せないのです。きっと、それが魂魄で、本当の肉体では無いから、その姿の詳細は記憶に薄いのだと思います。

このような場面で「あなたは私の後継者です。」「あなたが、これから人類を救うために、大きく働くのです。」と伝えられたのです。

先にも話したように、その時には突然の後継者という言葉の意味を私は白光の教団の後継者という意味以外には考えつかなかったもので、私にはとても戸惑いがありました。

その時、私の頭に、直ぐに昌美先生（今は白光の2代目として活動中）のことが浮かびました。私が後継ぎとなれば、昌美先生との関係はどうなるのだろう。五井先生から昌美先生に、その旨の連絡はいつているのだろうか。下手したらこれは大きな対立になるのではないかと一瞬のうちにいろいろ考えました。

そんなこともあって、「私が後継者だなんて、それはもう、とてもとても現実的では無い、」とか、「今さら宗教にはかかわりたくない」とか何とか、ゴチャゴチャ言っていました。それは無駄な抵抗という感じで、こちらのゴチャゴチャになど一切お構いなしに、返事も無く、一方通行の伝達でした。正直言って、私はその時、非現実的な「後継ぎ」との伝言に引っかかってしまって、その後の伝言は良く覚えていないのです。

これから人類にどのように働きかけるかについての話は、何かメッセージが有ったはずなのですが、必至の中での緊張もあって、良く覚えていません。基本は霊体間の交流ですから、心の奥では必ず捉えていて、表面意識では忘れても良いし、むしろその方が、とらわれずに済みます。

私は、その場では積極的に受諾の返事は出来ませんでしたので、「葬儀に行かせてもら

って、そこで、具体的に考えます」と伝えて後、五井先生はお帰りになりました。

お帰りになった後も、かなり強い余韻が残っていて、同じ体勢をそのまま暫く続けたように思います。直ぐには、元に戻りませんでしたね。

その後も、もうこのような体験は二度とありませんでした。

●封印して、修行に邁進する

こうして話していて、だんだんと詳細も正確に思い出してきました。

結局私は、あの復活の場で自分がどうして良いか分からないまま、何も応えることが出来ないまま、復活の五井先生は帰ってしまいました。

葬儀に出席して、以前の人達に挨拶しましたが、歓迎されていないことは明らかでしたし、これ以上私が動いて、白光真宏会と、ゴタゴタはおこしたくないと思ったのです。葬儀に出て、私の態度ははっきりしましたね。以前交流があった準講師の人に挨拶しましたが、彼は、私が昌美先生に出した、「五井先生復活」の報告の手紙のことを知っていました。その前提の上で、「その件は、五井先生が、(異端で、できの悪い) この私のところに復活し、啓示を与えるなんて、そんな不都合で不条理なことは絶対にあり得ない。しかも後継者だなんて、とんでもない」と言う感じで、完全に否定されました。それを聞いたとき、おそらく、それが教団関係者の一致した考えなのだと思います。

このような雰囲気を受けて、私はもう暫くは、五井先生からの後継者の依頼のことは、忘れようと思ったのです。踏ん切りが付いたという点では葬儀に出て良かったと思っています。

その時は、私はもう白光真宏会をやめて2年以上経っているのですよ。てっきり白光真宏会の後継ぎを指名されたと思っている私としては、宗教には強い拒否感があるし、自分で新しい活動を始めている時だからね。いくら何でも、そこに戻って、それは自分の気持ちとしても無理ですからね。宗教に対する否定的な自分の気持ちはさておいても、強烈な「後継ぎだ」という五井先生から頂いた光の塊のようなベクトルをそのまま内に秘めて、中々出口が見つからずに困惑しながら、これから先のことをずっと考えていたんですよ。

もう「跡継ぎの伝言」にとらわれたくない、私はもっとじっくり、自分が納得するまで修行を深めるだけだ。「そうだ、もうこの事は忘れて、もっともっと修行を深めよう、」という決心に至ったのです。そこで私は「今はこのことは忘れて修行します。もしいつか、私の出番があれば、その時にまた考えます。」と、そういう結論に達して、この意味を心の中で五井先生に伝えて、それでその復活に関連する出来事は自分の中では踏ん切りを付けて、強制的に終わりにしたんですよ。それは葬儀を含めての話だから、一週間くらいの間の出来事なのです。そしてその後、30年以上そのまま放置したと言うわけです。封印したと言うことです。

これ以来34年間、昨日まで、私は五井先生や白光の事はめったに口にしなくなりま

した。この「後継ぎ」の謎が解けない限り、とても、突っ込んだ話は出来ない状況でしたね。

つまり封印したと言うことは、私の中では五井先生の復活は無視して、それは無かったこととして修行をしてきたのです。後は現実だけを見つめて34年間修行をしてきたと言うことです。

●34年ぶりに封印を解除した

ただどずっと、事が事だけに、私の人生の中で、時々思い出されてきては、気になっていましたね。時々脳裏に浮かんでは、思い出さないようにしようとして、とらわれたくないとして、まだまだその時期ではないとして、ここまで先延ばししてきたわけですね。

未処理のまま封印したのですから、頭の片隅にはずっとあったのです。それで30年以上経っちゃったんだよ。そのままね。

そして最近になって、五井先生との関係をそれとなく聞かれるんですよね。私も応えようがないんだよ。質問があっても、知らん顔して「え、それが何か?。」とか、明快には回答せずに、ぼやかしていたんですよ。

でも、そういうことがあって、「もうこのままでは済ませられないな」と思うようになり、解説セミナーの3回目では、その事実を私からチラッと話したでしょ。アンケートの質問に応える形で、五井先生が亡くなった時に「こういうことがあった」と話しましたよね。正式に結論出したのは今日の9月6日だから、あの時点ではまだ一切何も結論は出していない時なんですよ。

まだ未処理だけど、先ずその五井先生復活という出来事だけは伝えておこうということで、その事実のみをあそこで話したんですよ。私としては、そうすることで自分に向かって問題を突きつけておこうと思ったんですね。

自分に対して「おい、まだ未解決の問題があるんだぞ、何とかしろよ、そろそろ解決しろよ。」とプレッシャーを加えたんです。「いつまでも、これを放置するわけにはいかんぞ!」とね。あれだけ長く、34年もの長い間封印して、こうやって横に置いたまま、ここまで生きてきて、もうこれ以上、このまま放置は出来ない、ということをも自分ではよくわかっていたので、一応自分に対しての問題提起として、あそこでやっておいたわけです。

そうするとしばらくして、本当に、ちゃんと答えはでるのですね。

●そして、封印を解除し3人目の使徒として始動する

答えはでました。

そして昨日から3人目の使徒として始動することになりました。

しかしながら、3人目の使徒となってから世界を見ると、それを宣言する前とは全く違う世界が見えてくるのです。これは驚きですよ。

ここで冷静になり、瞑想の中で何度も確認してみるのですが、五井先生は、決して2

人目から3人目の「後継ぎ」のことだけを仰っているのではない、と思えてきますね。五井先生の教えを布教する、教団の後継ぎの方を否定しようとしても、それがなかなか出来ないのです。こちらの方も、何らかの働きかけを託されていると思えてくるのです。

どうしても、五井先生が「今後の、五井先生亡き後の教えの位置づけに係わって欲しい」と仰っていると感じてしまうのです。白光という宗教組織には直接係わらずに、それを成すことも可能ではないか、と思っています。そして、私自身も、あれほど、宗教はいやだ、白光には二度と係わりたくない、と思っていたのに、ここに来て、「いずれは、教えの位置づけとして、この教団に係わらなければならない・・・」と思えてしまうのです。

もしそれをしないと困ったことになります。このまま放置すれば白光での活動は救世の大霊団から切り離れてしまうことを意味してしまいます。何故なら、五井先生の天命はこの私に引き継がれているからです。ですから、本来は私が係わって、教えとして、五井先生の教えと、その後の私の教えとを矛盾無く結合し、互いに共通理解にたって、宇宙的位置づけが成されて、共に発展しなければならないのです。

そのための係わりを持つことを、私が五井先生から依頼されていることを、どうしても否定できないのです。そうすることが、白光にとって、昌美先生にとってとても発展的なことなのだと思えます。しかも昌美先生対しては、以前にも増して、とても親しみを感じてしまうのです。本当にそうなのです。

これが、3人目の**使徒**を自覚した後の、私の正直な気持ちです。私は今後、救世の大霊団の3人目の**使徒**として、世界中の宗教に係わるつもりですから、その流れで当然白光にも係わることになると思えますね。

しかしこの件はもう少し未来に伸ばしましょう。昌美先生には私から靈的に働きかけつつ、自然に条件が整うのを待ちましょう。

白光にとっての成否は、私が救世の大霊団の3人目の**使徒**であると、昌美先生が認められるか否か、でしょうね。もし認めなければ、ただそれだけのことで、何事も無かったように月日は過ぎていくでしょうが、宇宙的位置づけは大きく変わります。

まずは今日から、私は2人目から3人目の後継ぎとして、スタートを切りたいと思っています。

本日、私は五井先生の伝言をきっかけとして、第二の天命啓示を受け入れ、3人目の**使徒**であることを表明しました。

この事で、私自身による自らの位置づけは大きく変更されることになります。私はこれまで、白光真宏会を脱会した後は五井先生との関係はもう無いものとして、一人で独自の修行をし、普遍性を大切にするために、どこにも属さずに、宗教には係わらない立場から普遍性を追求してきた、との立場を表明してきました。しかし、封印を解き、五井先生の伝言を受け入れ、天命啓示を受諾した後は、現実には単独の修行であっても、靈的には五井先生と救世の大霊団に深く関わってきたことになり、位置づけを大きく訂

正することになります。今後、それがどのように具体的な意味を持ってくるかは次第に、より明らかになるでしょう。

今日私がここで言ったことは、皆さんはキッチリと記憶にとどめておいて下さい。そしてこれは決して極秘事項ではありません。だからといって、吹聴してまわることでもありません。

それでは、今日の最後にもう一回お祈りをしましょう。

第三章 五井先生から岩根先生へ

この講演原稿を纏めていて、これを機会に、五井先生と私との関係をここに追記して整理しておきます。これは、いずれは、しなければならない作業と思っていたことです。そして、謎が解けた今ならば、やっとそれが出来ることなのです。

五井先生を知らない方にも、私を知るためには是非この過程を知っておいて戴きたいと思います。

五井先生が生み出した「消えてゆく姿」の教えから、岩根先生の「神の愛の導き」の教えに展開する過程を纏めておきます。そしてさらに岩根先生が独自に生み出した自明行(詳細は『人間やりなおし』参照、)の仕組みと、宗教を統一する現代の真理、即ち独善を排して、あらゆる手法を宇宙の中で位置付けし、一部は排除し、位置付けできたものを積極的に肯定して受け入れるという絶対普遍の教えが生まれていく過程が、ここから読み取れます。

今回のシリーズを一つに纏めて、更に追記し、この場を借りて、人類究極の教えが生まれ出て、それが般若心経に繋っていく過程を述べておきましょう。

ここに書いた内容を通して、私が何を求めて修行したか。そして私が何を目指し続けているか。五井先生から何を学び、何を受け継いでいるか。そして最終的に私が到達した人跡未踏の地、つまり「釈迦やイエスにも到達出来なかった世界」、そしてもちろん、「五井先生にも到達できなかった世界」をしっかりと理解してください。

●天命啓示を受け入れる決意

今日は研修会2日目です。昨日はとても大事な事をお話しました。

天命啓示という大事な事を、私はこれまで放置しておいたのでした。しかしまあ、そこには十分な意味があるんですよ。放置したというと、サボっていたみたいなイメージだけど、決してそうではありません。放置したというのは必要があつての話で、謎が解けずにいたために、封印せざるを得なかったのです。実は、その謎が解けるまでに、私は結果を出し、結果を出したところで、やっと謎が解けたという意味になるのです。このようなプロセスは、正に救世の大霊団の計画以外の何ものでもないのです。

私は、預言に頼って、結果を霊視して、それに合わせて動くようなことはしたくないという強い思いがあつて、結果を知らなくても、成るものは成るだろうと思っていて、44年間、天命啓示は一旦横に置いて、その間よそ見をせずに、無心に努力して、それなりの結果に到達したのですね。そこで今、ここで振り返ってみると、確かに天命啓示がそこにあつて、なるほど、ちゃんと前もって啓示されていたのだ、ということが分かり、驚くのです。

それにより、私は間違いなく、自信と確信に基づく立場を与えられることになるので

す。それで、それを受け入れる適切な時と場所が今なのだと確信して、今、ここ洞爺に神々が降りてきているこの場をお借りして、皆さんにキッチリそれをお話した、ということ。それが昨日の話です。「天命啓示を受け入れます」と宣言したということです。

天命啓示を受け入れると言うことは、これまでの、そしてこれからの私の行動や発言の意味が、そしてその位置づけが変わってきます。それを受け入れてみると、今まで気づかないことで、急に色々に対応しなければならないことが出てきます。そのようなことを今日は話してみましよう。

●谷口先生から五井先生へ、そして岩根先生へ

私は昨日、部屋に戻ってからいろいろと思い出していました。

救世の大霊団から遣わされた4人の使徒がいて、私がその3人目の**使徒**だということをお話しましたね。

第二の天命啓示、これ単独での意味はそれなりには有るのですが、特に重要とも思えなかったし、謎に満ちていたのですが、第四の天命啓示では、五井先生が復活されて、私に後継者を指名したことで、2人目の**使徒**というのは五井先生だという事に、突然気が付いたわけです。そこに至るまでには、私が3人目の**使徒**として、十分に修行を積んだからだといえますね。そこではじめて謎が解けたのでした。それを昨日話しましたね。

そこで今日は、2人目の**使徒**と3人目の**使徒**の関係についてお話をしましょう。

以前、よく五井先生が生長の家の谷口先生の話をしていたとき、自分は谷口雅春先生、つまり生長の家の教えを修正するために生まれてきたんだと、よく仰っていましたよ。ご存知の方も多いと思います。それで11月22日で、誕生日が一緒なんだよ、というようによく仰っていました。月日は確かにそうです。これは霊数という考え方で

すね。ところで昨日、第一の天命啓示の話の時に「以前、私が札幌市内を車の運転中に、強い光に打たれた」ということを話したでしょ。

その時に、五井先生の誕生日は1916年11月22日で、私は1943年2月4日だと。その関係を指導霊から、伝えられたのです。そんなことは以前から知っていたことですが、これを霊数の考え方で分析すると、、、先ず年数の足し算をすると、五井先生は $1+9+1+6$ で17となり、岩根先生は $1+9+4+3$ で17となり、それはどちらも共通でしょ。月も五井先生は $1+1$ で2で、私はそのまま2で、同じ。日も五井先生は22で、 $2+2$ で4で、私はそのまま4となり。こっちも同じなんです。だから年月日全てが五井先生と一致することになるので、これはほとんど親子みたいなものだね、と言われたことを思い出したんだ。

●生長の家の教えを修正するために五井先生は生まれた

このようなことは、占いみたいだけれど、意味は十分あるのです。宇宙のフラクタル構造において、このようなベクトル共鳴が現れるのです。ユングの共時性もそうですね。

このような不思議な一致は決定的証拠にはなりません、傍証的な意味はあるという程度に理解してよいとおもいますよ。これについては他の機会に詳しくお話ししましょう。

丁度良い機会だから、今日は谷口先生と五井先生と、それから五井先生と岩根先生との関係をもっと詳しく説明しておきます。谷口先生は、あの天命啓示の1人目の使徒かどうかは私には分かりません。ただ五井先生は、ご自分では「私は生長の家を修正するために生まれてきたんだ」と誕生日を例に出して仰っていたのは事実です。だから私は、その通りに受け取っています。

私は霊数から見て、五井先生と年月日の全てが一緒であることはわかりました。しかし、谷口先生とは年の霊数が合っていません。私は生長の家のことはよく知りませんが、五井先生の話の中には、生長の家の話が時々出てきたので、耳で聞いた話として知っています。生長の家は光明思想だから、人間は完全であるという、法華経的な立場でのお話なんです。その人間が完全であるとする話の中で、常に問題になるのは、「人間いくら完全だと言っても、結局いろんなネガティブ要因が人間にはあるのであり、それをどう扱うか」ということなのです。この人間の負の側面の扱いが常に重要なのです。この点が宗教にとって一番重要な問題なんです。そしてこの問題は、人類史の中で未だ解決されていないと言って良いでしょう。そして、この問題を岩根先生は岩根先生が修行によって体得した世界観、それは即ち、般若心経を解読することによって得られる世界観によって解決したのです。

この問題が未解決なのは、どの宗教でも同じで、ごく少数の人は、その矛盾に多少は気づいていたのですが、それを言う人は少なかったのですね。

人間は神の子だと生長の家では言いますが、神の子といくら言っても、現実の人間にはいろんな「負の側面」があるわけです。それをどう扱うの、という所で、生長の家に限らず、宗教はとても苦労するわけです。

それで生長の家では、「心の法則」というのを説いて、「あなたは、ハイハイと言わないうから肺の病気になった」とか、それから「夫婦仲が悪いから、二つある腎臓が悪くなるのだ」という因果関係を説くわけです。そうすると病気になるということは、何か自分にネガティブなことがあるんだなど、そこにリンクしちゃうんですね。

そこでかえって自分を責め、そして人を裁いてしまう、ということが実際問題として起きてしまう。だから講師の先生は自分の家族が病気になっても他人に教えない。結局それは「親子の関係がどうだから」と、そういう自分の悪いものが病気になって出て今こうなんだとか、その結果なんだと裁かれてしまう。五井先生は生長の家の光明思想を受け入れていたとは思いますが、その中で説かれる「心の法則」に強く問題意識を持っておられて、その法則では、かえって自分や人を責め裁いてしまい、人を苦しめてしまう事を問題にしたのです。本来「許されるべき現象」なのに、かえって自分と人を責め裁いてしまうことになる、そういう「心の法則」を説いたことは、生長の家の一番の問題だということを、五井先生は常におっしゃっていましたね。もちろん、これは五井先生からの受け売りです。

私は生長の家のことは良く知りませんから。しかし、確かにそうだと思うんです。実際に、そんな責め裁きの論理があるんだと、五井先生に繋がってから、後で知りました。それからこの会員で、今長い間休んでいるけれど O 君がいるよね。彼は〇〇に所属しているよね。その中でもそういうことを言うらしいね。彼からの手紙を読んで知っただけけれど。夫婦仲が悪いから腎臓の病気になったとか、そういう風に生長の家と同じ説き方をするらしいんだ。そうすると、病気になるとその人を呼んで、あなたはこうだと、病気になったことで、夫婦仲が悪いからなのだ、・・・とそっちまで問題にされるらしいね。

そのことを、当時の O 君は特に問題とは思っていないで、私に報告をくれるんだけど。それでは、せっかく五井先生が、「それは人を裁くことになってしまうので、止めなさい」と言っておられるのに、ここに、また同じ問題が発生しているのではないか、これは何とも困ったことだな、これじゃ五井先生の教えが全く生きていないことになり、大きな後退だな、と残念に思ったことがあります。しかし、今の O 君は、そのことに気づいてきたと私は思っています。

●五井先生の「消えてゆく姿」の教え

それだからこそ、五井先生は、教えの中の「心の法則」をやめて、病気となって表れてくるが、それはそこで消えたんだと解釈し、それが「消えてゆく姿」だというように五井先生はわざわざ説いたんですね。自他を裁かないために五井先生は「消えてゆく姿」を説いたんですよ。ネガティブなものの全部を「消えてゆく姿」と置き換えたんです。そのことで、生長の家の出身者は五井先生の「消えてゆく姿」は素晴らしいっていうんだ。私は生長の家の出身じゃないから、その体験はありません。

生長の家出身の人はそこで安心を得るらしいね。「消えてゆく姿」ですごく気持ちが楽になったという言い方をしますね。

私の母も生長の家に長く係わっていたので、五井先生の「消えてゆく姿」で救われたとっていました。谷口先生から五井先生へと、そういう流れなんだと思います。

一方、私は最初から五井先生で学んだから、「消えてゆく姿」というと、悪いものは全て「消えてゆく姿」と解釈してしまうので、「悪いもの」と「消えてゆく姿」とがリンクされちゃうんだよ。それで、時々「それはあなたの「消えてゆく姿」だ」と言われるときがあるのですが、そうすると、生長の家を知らない私からは「それはあんたが悪い」と言われているのと同じなんですね。そこで私は、やっぱりそこには、生長の家の問題が完全には解消していないな、というのが私の実感なんです。

ここでちょっと、「消えてゆく姿」の原理的なことを説明すると、五井先生は「良くないこと」という意味で「不調和」という語句をよく遣います。その「不調和」な出来事に対して「消えてゆく姿」と言うときは、狭い意味の「消えてゆく姿」であり、それは[赦しへの導入]として遣われているのです。

それ以外に、現象及び事象という全般について、一切を区別せずに善し悪しに関係な

い、広い意味の「消えてゆく姿」が遣われていて、これは事象の[全体の基本的把握]として遣われます。つまり、二通りの「消えてゆく姿」があります。

つまり、悪い出来事、及び「不調和」な出来事について遣う場合は、それは[赦しへの導入]としてであり、一方、仏教の諸行無常の意味で、事象全般について遣う場合は[全体の基本的把握]であり、この二つの使われ方があるのです。ここで、[全体の基本的把握]は出来事全体を含みますから、当然[赦しへの導入]は[全体の基本的把握]の中に含まれています。信者は体験的に、この二つの範囲は無意識の内に遣いわけているのです。広い意味の[全体の基本的把握]の事象全般で言えば、良いことも悪いことも、全ては「消えてゆく姿」なのです。しかし重要なこととして、赦しの言葉として遣う場合は、狭い意味の「消えてゆく姿」であり、[赦しへの導入]としての「消えてゆく姿」なのです。

この[赦しへの導入]と[全体の基本的把握]の二面性を忘れていると、時々間違った遣い方に成ることがあるので、注意が必要です。そして、この違いが曖昧になるときに、多少の混乱と間違いが発生しているようにも、私は感じています。

ここで、私が五井先生の「消えてゆく姿」の教えを私が実践してみて、感じたことをさらに以下に書いておきます。

狭い意味の「消えてゆく姿」は赦しの言葉なのです。ですから、この言葉は一義的に、赦しのために使われなければなりません。それ以外の使用方法は間違いなのです。これはとても重要な認識ですので、五井先生の話を書くときには決して忘れないで下さい。

ところで、許されるには条件があります。嘘をついては許されません。嘘をついても許されるということはありません。だから嘘を放置していても、「消えてゆく姿」として許されるということには成りません。

もう少し具体的に言うと、自分が加害者なのに、自分が被害者意識でいて、それがそのまま許されるということはありません。先ず自らが、加害者なのだとして理解したときにはじめて「消えてゆく姿」として許されるのです。ところが最近、と言っても私が辞めた頃からですが、この私の見解とは異なる、別の見解が生まれているようです。「反省は全て五井先生がやって下さるから、五井先生に帰依があれば反省しなくても良いのだ」と誰かが説いたのです。これは五井先生の教えの根幹を崩す、致命的な発言です。自分に嘘があっても、つまりその嘘に反省がなくても、「加害者が、被害者だと思っただけでも、そのまま許される。」ということに直結する、極端な解釈が生まれてしまいます。

実践論的にこれは明らかに間違いとしなければなりません。泥棒したって、放火したって、人殺ししたって、しかも反省しなくたって、そのまま許されるのだという、極端な解釈に繋がります。これは絶対に成立しません。

●責任ある行動とは

更に、私が自分の活動のために参考になった出来事があります。以下に述べることは、皆さんにもそれなりに覚えのある体験であって、様々な問題に直面したときに、どのよ

うに捉えるかについて、そしてその出来事の解釈については大いに役に立つことと思っ
て、以下に纏めて書いておきます。

それは、私が札幌支部長をしていた時のことです。五井先生は常に不調和を嫌い、調
和を重んずる指導をしていました。活動の中で、私は責任上、これは目に余る「不調和」
な重大問題で、これは個人の問題では無く、会全体の問題であり、支部長として解決す
べき事だと考え、勇気を持って実行したことがあります。そうすることが支部長として
の任務遂行上の責任と判断し、それを放置することは任務の怠慢であると考え、十分に
吟味し、祈りの積み重ねの上で決断し、時と場所を選んで、慎重の上に慎重を重ねて行
動を起こしました。そして直接本人に忠告したのです。

ところが、その事が忠告した相手から問題にされ、上層部にまで上がっていました。
この件は、本部で議論されたとのこと。

暫くして、本部から来られた講師の先生から、多くの人の前で私が叱責されることにな
ります。その時に私がした忠告の中身の問題は無視されて、忠告の行動そのものが不
調和と判断され、人を責め裁いたとされ、五井先生の嫌う不調和な行動とされ、相手は
無罪、忠告した私の方が「不調和」であるとの有罪の判断をされて、問題視されてしま
いました。つまり、それは私の生み出した「不調和」な出来事であり、私の「消えてゆ
く姿」であると、決めつけられたのです。どうも、これ以来、「岩根は不調和」という事
になってしまったようです。

それには、驚いてしまいました。そしてとても勉強になりました。「まあ、世の中って、
こんなものなのか。」という驚きで受けとめ、それはもう、啞然としてしまいましたね。
私はこのようなときに、これを「消えてゆく姿」とは思わないのです。ここに重大な「神
の愛の導き」があると理解するのです。

私はこの時、とても驚きましたが、講師の先生から厳しく叱責を受けていながらも、
何か重要な事に気づいたと思って、私の頭の中は、そちらの方にいていましたね。本
当は、その時の新しい気づきを急いでメモして整理したかったのです。しかしメモ帳
を取り出すのは失礼と思って、頭の中で整理していましたね。

その事とは、組織の中の「不調和」を取り除こうとした行為が「不調和」とされたこ
とです。この出来事で私は何かを悟り、その後の私の活動に、大きく影響を与えたので
す。

この時の私は、何か内から湧いてくる自信のようなものがあつたので、決して言い訳
などしないで、勝手に動いていく運命に逆らわずに、自らの立場がどんどん不利になっ
ていく事を客観的に眺めていましたね。私はこの時の体験から、大きなモノを得ました。

私が後で聞いた話ですが、私が忠告した問題は、やがて、私が危惧した通りに表面化
し、その通りに成り、結局その人間は組織から処分されたと聞きました。それなら、こ
の件で私が厳しい評価を受け、叱責までされていたのだから、私に何らかの報告があっ
ても良いのに、と思いましたが、、それは一切有りませんでした。

私がこれを機会に、知り得た重要なこととは、結局「不調和」とは何かということだ
す。進歩や改善を願わない人達から見ると、「不調和」を排除し、改善しようとする「大

調和」の行動はしばしば「不調和」に見えると言うことです。そしてそれ以降、私が大切にし、常に心がけたことは、「不調和」との誤解を恐れない行動こそが、「真の調和」である、ということに強い自信を持ったと言うことです。

この経験から、「調和」という言葉も逆手に取れば、「不調和」をなしえるし、「不調和」に見えても、そこに真の「調和」を実現できると考えたのです。

それは、「愛」という言葉も、「平和」という言葉も、悪意の人が逆手に取れば、真逆なことを行い得ることを体験したのです。

そして、「進歩」のための「調和」は、しばしば「不調和」と見えるということを体験的に知り、以後、私は「進歩と調和」として、対の言葉で遣うようになっていきます。

そしてここから、「私たち人類の進歩と調和が成就されますように。」という祈り言葉が完成していったのです。

そして、組織の指導者に必要なのは、「自らは評価を恐れず、真の調和を実践する勇気であり、そして他者のそのような勇気ある行動を見抜く、洞察力である」ということです。そのような意味で、私は常に悪者になることを恐れない、勇気ある行動を続けただけではなく、いつも出来事の表面だけを見ること無く、隠れた勇気ある行動を見抜くように注意深く洞察するようになりました。その出来事の表面からは見えない、内面に心を至らせ、注意深く人の行動と発言を評価するようになったと言えます。

洞察が出来ないのは単なる力不足なのでは無く、はじめから相手にその可能性を見ようとしないからであり、無責任な周囲の雑音に耳を貸し、或いは利害が優先し、それを見たくないとする傲慢さがあるからなのです。

このような体験から、私は常に自分の思考の範囲に制限を加えないように。常にあらゆる可能性を模索し、検索していて、常に宇宙をスキャンしている状況に保つことを今でも心がけています。

ここは決して直感や感覚に頼っては成らず、きわめて知性的に慎重に行動しなければ成らない場面なのです。この体験は本当に勉強になりましたね。

いいですか、あの、任務上の責任感からくる、行動さえも、報告次第では、独善側からは「不調和」に見えるのですからね。

しかも、私欲を越えて全体の立場から忠告する側と、忠告された側を同列に並べて、「忠告する側に非が有り」とはいったいどういうことなのか！。

私はこの体験から、立場の違う人を、次元の異なる行動を同列に並べて、どっちもそれなりに間違いだとか、味噌とクソを一緒に扱うことを最も嫌う人間になりましたね。

いくら詳しく説明しても、ここに私の示した原理がプラスに回転すればこの言葉で反省できますが、マイナスに回転すれば、自分の傲慢な姿勢をこの同じ言葉でどこまでも正当化することが常に可能ですからね。自己正当化しようとする心の歪んだ人には、この説明の言葉でさえ、逆手に取ることも可能だと言うことですね。

そこで、後に話す岩根先生の自明行にまで至らなければ、プラス回転になる保証は無

いのです。つまり、「常に自分が正しく、相手が間違いだと思いたい人」には、やはりそう思ってしまう危険は残るということなのです。

●消えてゆく姿では捉えきれない場面が多々ある

さて、私は、「消えてゆく姿」よりも「神の愛の導き」の方がより本質的で、優れていて、私には適していると感じていますが、それであっても、五井先生が生み出し、特に大切にされていた「消えてゆく姿」とは、「人を責め裁くな」という強いメッセージなのであり、その心を特に大切にすることに心がけています。

しかしながら、この「消えてゆく姿」では収まらない場面が、多々あるのだということに気づかされるのです。

結局のところ、私が支部長時代に体験したように、ある種の人達は、この「消えてゆく姿」という赦しの言葉さえ、これを逆手に取るのだ、と言う見逃せない実態があるのです。勇気ある行動の方が不調和で、大不調和の問題行動の方が、責め裁かれたという被害者意識が通用してしまうという、この現実の組織の実態でしたね。いいですか、責任を果たすために忠告することが、忠告する人の「消えてゆく姿」だなんて、これはもう、意味不明ですからね。

その後、私の活動の中でも体験しますが、忠告を受けたことを、「責め裁かれた」として論点を外し、しかも被害者意識になることで、自己正当化してしまう人が必ず居ることです。不誠実な人の特徴は、いつも相手側が不調和に見え、自分が被害者に見えるということなのです。自分の「負の側面」を正面から見る勇気が無い人は、常に相手の中にだけ「負の側面」を探すことなのです。反省を嫌う人の特徴は、いつも自分が被害者で居た方が、反省の必要が無いので、この方が楽と判断し、常に被害者で居続けようとするということなのです。

折角、五井先生が、「消えてゆく姿」という赦しのための環境を用意しても、不誠実な人に掛かれば、この赦しの環境さえ逆手にとって、「責め裁かれた」として、常に自己正当化が出来てしまうということなのです。そこでは、いつの間にか、忠告というものが裁きや責めの意味となって、有っては成らない悪となってしまっているのですよ。そして、不誠実な人が大きな顔をして、誠実な人を排除してしまう構図が生まれてしまうのです。この「消えてゆく姿」とする赦しも環境も、誠実さがあっての話なのです。

第三者からは、やりとりの言葉や、表面的な言葉遣いだけで判断すると、どちらが不調和なのかが、分からないこともあるのです。そしてこの第三者に独善があれば、歪んだ直感に頼ることになり、この判断は大きく狂ってしまいます。ですからここは、偏りのないところから判断する、冷静な知性が要求されるのです。

さらに知るべきは、現実を生きる上では、危険な運命の渦から這い出るために、強い力で自己を制御し、相手を導くことが必要な場面があります。それはいつもいつもあることでは無いのですが、それが滅多にないことでも、その時は運命の重要場面と位置付

けて、そのために一旦自分を責め、そして一旦人を裁くということも、決して恐れてはいけない、という真実です。

これは犠牲的行動なのです。このような時には、徹底して神の愛の導きとして行動しなければ成りません。

日頃は優しさという誠実さを常に示しながらも、人生の重大場面では、真実を貫かなければならないことがあります。不調和を嫌い、人を責め裁くことを避けようとしながらも、ここでは進歩を優先し、表面上の調和、不調和にとらわれず、一旦、原点に戻って何が本筋なのかをよくよく考え、大胆に行動することが求められることは、重要場面として、ある時にはあるのです。

枝葉の不調和を恐れて、本筋を見失うと、やがて大きな反動がかえってきます。そのためには、個人の利害を離れ、いつも本筋を見抜く努力と、本筋を貫くための誤解を恐れぬ勇気が必要です。いずれ、その真実をはっきりするのです。

●岩根先生の「全ては神の愛の導き」の教えが生まれた背景

さて、読者から見れば、私は「全ては神の愛の導き」を本質として説いているのですから、ここで明確に「消えてゆく姿」を否定して、「全ては神の愛の導き」とする道を示した方が、分かりやすく簡単かも知れませんね。しかし、私は普遍性を追求する者として、「消えてゆく姿」を否定することなく、その〔赦しへの導入〕の主旨を肯定しつつ、「全ては神の愛の導き」を中心に示したいのです。

そこで岩根先生はどうしたかという、人間の「負の側面」をも徹底的に見つめて、そこから逃げないことにしたのです。そこでは「全ては神の愛の導き」の中での出来事〔全体の基本的把握〕であり、まずそっちが先であり、それが本質であることをしっかり理解する。つまり、すべての出来事は良いも悪いも、全ては神の愛の導きの中での出来事と解釈したのです。そしてさらに、その中で出てくるネガティブ要因は、それは全てベクトル昇華〔赦しへの導入〕であるという言い方にしたんです。

ベクトル昇華を「消えてゆく姿」の狭い意味〔赦しへの導入〕に置き換えてもいいんだけど、私は私の言葉を使いたかったので、ベクトル昇華という言葉を使いました。第一に、先ず神の愛というものを常に頭に持ってきたんです。これは広い意味の「消えてゆく姿」〔全体の基本的把握〕に対応しています。

最も上位の位置づけとして、「消えてゆく姿」ではなく、「全ては神の愛の導き」として、良いも悪いも全ては神の愛の懐の中での出来事なのですよ。だから安心しなさい。として位置づけます。

そして、その下位の位置づけとして、人間からはネガティブと見えることが、狭い意味の「消えてゆく姿」、つまり〔赦しへの導入〕なのである。という解釈と理解を生み出したのです。私は五井先生に忠実であろうとして、白光の教義に沿って、神霊の指導により霊修行をしていました。

靈修行の中では、白光の教義の冒頭の言葉を単純化して、「全ては神の愛の導きなのです」との祈り言葉にして、それを行として実践していました。この私の解釈が、最も正しいことが次第に明らかになります。そして、これこそが宇宙の中での、最も本質的な解釈です。これが真実であり、これが最も本質であり、白光の教義をよく読めば、後に示すように、正にこのようになっているのです。ですから、私の解釈が白光の教義に最も忠実な解釈なのです。

私が白光の教えに沿って靈修行をしていることは、当然五井先生には伝えていて、年に二三度、お会いした機会に口頭で、報告をしていました。

ちょうど折良く、あの準講師から、五井先生から私に「最近の報告をするように」、との伝言があった旨、連絡をもらいました。五井先生は私をそこまで気にかけてくださっていることに感謝し、早速最近の靈修行での新たな進展について、手紙で報告をしました。

「全ては神の愛の導きなのです」というのは、白光の教義の最も本質的な理解ですから、それを前面に出しています。「私はこのように理解し、こういう風にしています」と、手紙を書いて伝えたのです。その直後、五井先生からの返事には、「それでも良いが、それは誰にでも出来ることではない。上根の人でなければ出来ない。」との返事でした。

この返事は、何度も読み返し、真の意味を受け取ろうとしました。私の体得した道は、たとえ上根の人しか分からないとしても、より本質的な道であり、この本質的な道が説かれていてこそ、誰にでも分かるようにかみ砕いた道が意味を持つのです。比喻で言えば、誰にでも分かるような小学校で学ぶ理科は、大学で学ぶ物理学の裏付けがあるから意味があるのであり、大学で学ぶ物理学は上根の人でなければ分からないから、小学校で学ぶ理科でなければならぬということにはならないし。物理学は難しいから学ぶのはやめた方が良く、人に勧めない方が良くとの事にはならない、と理解しました。

もっと言えば、「消えてゆく姿」が一般的で、導入部であるならば。そして「神の愛の導き」がより本質であるならば、より本質の真理を学ぶことに、一切の躊躇は必要無いとの結論に至りました。

より本質を学ぶことを禁止される理由は見当たらないし、たとえどんな苦勞をしても、より本質を学ぶことは意義があることであり、私には、「神の愛の導き」を学ぶことに、全く障害となる理由は見当たりませんでした。

その結果、これは決して私に対する否定ではなく、「このような理解は確かに本質だが、あなたは上根だからそのような本質的理解が出来るが、一般の人にはなかなかそれは出来ない」との肯定的な意味に解しました。

このような検討で、私にとっては、十分に肯定して頂いたとの結論に達したのです。私にとっては、「消えてゆく姿」を前面に出すよりも、「神の愛の導き」の方がずっと納得できて、楽に出来て、肯定的に理解出来るので、そのまま、この方法を続けることにしたのです。そしてその事も五井先生に伝えていきます。

私としてはこの私の解釈は、後に吟味するように、最も白光の教義に忠実な解釈と思っていましたが、しかし、これらの私の言動（報告書）は周囲にも伝わっていて、「岩根

は「消えてゆく姿」を省略した」。だから、あの以前の「支部長としての責任行動」のように、「岩根は不調和」になった。どのような、再び周囲からの批判に繋がっていきます。

さらに、あの懇意にしていた準講師に依れば、今回は五井先生も批判的に仰っているとの事でした。しかしながら、五井先生から私への直接の返事には、そうは書いてないので、ここは五井先生から私への返事をこそ、五井先生の私に対する回答と受け取るべきであると考えて、周囲の雑音には取り合っておりませんでした。

振り返ってみて、確かに私は当時、霊修行中であり、それを五井先生に気にかけて戴いていました。そこで、自分の修行における新たな発見と展開について、時々報告していたのです。私は五井先生を尊敬して忠実に従っているつもりで居ましたが、、、以下は人間的な解釈になりますが、、、五井先生から見れば、かわいがっているこの岩根が、自分の示した道から少しずつ離れていくように見えたのではないかと思います。

今となって振り返れば、もう少し気を遣えば良かったのではないかと、とも思いますが、しかし私の行く道は既に決まっていて、[全体の基本的把握]としての「消えてゆく姿」ではなく、より本質の「神の愛の導き」を真っ直ぐに歩んでいくしかなかったのです。

実際のところ、私は「消えてゆく姿」を[全体の基本的把握]と[許しへの導入]との二つの場合に分類し、[全体の基本的把握]としての「消えてゆく姿」の方を、「一切は、神の愛の導きである」とし、教義にしたがって、より本質的な解釈に置き換えたのです。

ですから、実際には追加こそすれ、省略などしていないにもかかわらず、批判の矢面に立たされてしまいました。私は周囲の人にどのように批判されようと全く意に介しませんでした。私は白光の教義に沿って霊修行をしていて、白光の教義に明確に書いてあることなので、いずれ誰もが理解する筈だと思い、何を言われようと、余り気にはしていなかったのです。ですから、私はこの件で、この前も後も、一切誰に対しても言い訳をしていませんでしたし、そのような機会は与えられていませんでした。

ただし、周囲から「消えてゆく姿の省略」と言われていることに対して、誤解が無いように、私は五井先生にだけは本当のことを知っておいて頂きたいとの気持ちから、急ぎ私は五井先生に、再度手紙を書きました。「消えてゆく姿の省略」と言われているようですが、先の報告書で、教義の冒頭の部分の「人間は本来、神の分霊であって、業生ではなく、守護霊守護神によって護られている存在である」との部分をつまみ、その[神と人間の基本的関係]としての[全体の基本的把握]が[神の愛の導き]であります。ですから、決して「消えてゆく姿」の替わりではなく、決して狭い意味の、つまり[許しへの導入]としての「消えてゆく姿」は省略していないとの主旨を、手紙で簡単に伝えました。

言い訳がましくならない程度に、それから、師に対して失礼な表現にならないように、五井先生の書かれた教義の分析的表現は避けて、何とか短い文章に纏めて伝えました。

そしてこの手紙が、最後となってしまいました。

この手紙の主旨が、幹部には正しく伝わらなかったことは、十分あり得る事ですが、五井先生に対しては、私の経験から、報告は簡単であっても、教義を基にしていることは間違いのない事実ですから、これで主旨は十分に伝わるモノであると、私は今でも思っています。或いは一旦は事実関係に誤解があったとしても、直ぐに誤解は解けるものと考えていました。

しかし、現時点（2018年）でこの原稿を更新しつつ、このときを振り返れば、そこにはもっともっと大きな全体の運命の流れがよく見えてきます。

ここから先は、時間の流れの中で、原因と結果として説明することは不可能であり、ここは既に、結果からの説明でなければその正確な意味を表現することは出来ません。これまでは、時間の流れの中で、こうしたからこうなったというように、原因と結果で説明してきましたが、それをここでは【現実性からの理解】と位置づけます。そして新たに、【結果からの出発】として、結果からその行程を解釈する【本来性の立場】からの理解として、新たに位置づけして解釈をし直します。

この後、この【本来性の立場】からの理解は、真理の表現として、そして本質的な救われを説くためには、特に重要な位置を占めていくこととなります。それは後ほど再度説明します。この解釈こそ、このような重要問題を解決する、唯一の解釈であることは、次第に明らかになります。

それは、私が白光の組織に縛られていては、3人目の使徒として、この先の展開が、大きく制約されてしまう段階に達したとの、救世の大霊団側の判断があったために、この時点から、私を白光から切り離そうとする事になったのだ、と思われてきます。救世の大霊団の判断は【本来性の立場】からの判断ですから、恐らく、もしこの時点を何とか通過したとしても、救世の大霊団の考えとしては、いずれ私を白光から切り離す方針であったことは間違いのないことなのです。そのためには、私の意志で白光から離れるための、この世的な理由が必要なのでした。そして、五井先生にとっても、たとえそれが事実誤認であったとしても、この私を白光の組織から排除する理由が必要なのでした。そしてそれが、【現実性の立場】としての説明であり、原因と結果で動くこの現実世界のルールなのです。

もともと、五井先生の私への直接の高い評価と、周囲の私への評価とは、常に大きな乖離がありました。しかし、これは神計らいであるとして、私は結果をそのまま受け入れていました。

しかし最後は、この乖離が大きくなって行くのでした。全くもって、救世の大霊団の大きな導きがここに感じられるのです。

そしてそこまで含めて、「全ては神の愛の導き」ですからね。人間からはどのように見えようと、この経緯は重要であり、たとえそこに策略や陰謀があっても、結果はこれで良いのだと言うことなのです。

もし、私が五井先生と直接やり取りしていれば、このような事にはならなかった筈です。このときに限り、人を介したために、私と五井先生との間に、大きな意思の疎通を欠く事態が生まれてしまったのです。直接やりとりさせてくれなかったのは、この人の役目でもあったのだと思いますね。しかし結果はこれで良いのです。

そして、五井先生からの返事はなかったのです。それが最後の手紙となりました。返事が無いということは、最後は五井先生も周囲の意見に同意されたのだと思います。つまり、そのことによって、私が白光から離れることを五井先生も同意されたのだと言うこととなります。

これらの一連の出来事により、私は白光を離れますが、この大きな流れにこそ導きがあるのであり、結果が重要なのです。すべては神の愛の導きなのです。

そして、このような経緯の後、私が白光を離れて三年弱の後に[五井先生の復活]という、大奇跡が起こるわけです。

●白光の教義に忠実なのは私なのです。

ところで、振り返ってみて、あの問題になった白光の教義の解釈に関して、ここにあのときの議論点を吟味してみると、私の当時の主張には一貫した正当性があることが分かります。それを以下に確認しておきましょう。

先ず事象全般を、つまり[全体の基本的把握]として「消えてゆく姿」ではなく、「全ては神の愛の導き」と捉えんとする、この岩根先生のやり方の方が、元々の白光の教義にきわめて忠実なのです。だから、そうすべきなのだと思いますね。どう考えても、それ以外にないのですね。

何故なら、教義、「人間と真実の生き方」の冒頭は、以下のように始まります。

[人間は本来、神の分霊であって、業生ではなく、つねに守護霊、守護神によって護られているものである。]

教義の冒頭に、神と人間の基本的な関係が説かれます。

ですから、先ず最初に、基本認識として、「全ては神の愛の導き」と捉えることは、全くもって白光の教義の冒頭の言葉そのままであり、これこそが本当に教義に忠実なのですよ。これを正面に説かないことの方が間違いなのです。

私は自らの修行の体験から、[人間は本来、神の分霊であって、業生ではなく、つねに守護霊、守護神によって守られているものである。]という、この最大重要な部分を「全ては神の愛の導きなのです。」として、「行」の正面に持ってきたのです。最も重要なフレーズを最も重要に扱ったのです。

そしてその後に、人間の「負の側面」に焦点を移動し、先の教義の続きとして[この世の中のすべての苦悩は、人間の過去世から現在にいたる、誤てる想念が、その運命と現れて消えてゆく時に起こる姿である。]として、ここで「消えてゆく姿」を赦しの行として示すのが、もっとも自然と思われます。

ですから私の主張こそが最も教義に忠実なのです。そしてもちろん、この解釈こそが宇宙と人間の理解として、最も本質的な理解なのですよ。

この私の重要指摘を、受け入れなかったのですから、このように行ずる事を拒否した

のですから、これは白光の幹部が、白光の教義を自ら否定したことになりますね。これは白光にとっては命取りでしたね。この時の仲介者は、「自分の言うことは五井先生の意見である」と言っていましたから、おそらく、形の上ではそのようなことがあったのだと思います。

そこには、たとえそれが誤解に基づくものだったとしても、間違いなく五井先生の意見が反映されていたと私は思っていました。

しかし、その時の仲介者は、仲介とは言っても、私を良くは思っていない人であっては、私を拒否しながらの仲介では、もう全くもって、仲介など最初から期待できない状況でした。しかし、そうであっても、そこは五井先生のことですから、仲介者の言葉を越えて、そこには、私の気持ちを必ず分かってくさるだろうという、一縷の望みをかけていました。

既に白光の中では、この私を組織にとって有害な人間だと評価されていたのだと思います。そして、白光としては、私の主張を全面的に拒否して、その仲介者を通して私に脱会を促したのです。そして、その結果を五井先生も一旦は納得して受け入れたのだと思います。まさにこの時が、私にとっての分岐点でしたね。そしてこれは白光にとって、もはや引き返すことが出来ないターニングポイントと成ってしまったのですね。

この時点の宇宙的意味は、まさに2人目の**使徒**から3人目の**使徒**へと、救世の大霊団の地上の受け皿がバトンタッチされた時なのでした。

このときに生まれた齟齬によって、白光での私に対する評価が最悪となり、そしてちょうどこの時点から、白光は大きく混乱していきます。そして一方で、私は孤軍奮闘の中で修行を積み、着々と実績を積んでいくことになります。

四十年後の現時点から、当時を振り返れば、とても良く見えてくるのですが、第一の天命啓示のように私は「釈迦やイエスにも出来なかったことを成し遂げる」のですから。そしてもちろん「五井先生にも出来なかったことを成し遂げる」のですから、当時の私の言動はそれだけ重かったということなのですね。その私の言葉の重さを発見できなかったことが、白光にとっては致命傷となりましたね。この3人目の**使徒**としての私を、否定してしまったことが大いに悔やまれます。

このように、私が白光の中に居て、教義の原点に戻って、教義に忠実に従い、もともと正面に説いてある「神の愛」を正面に持って来たり、普遍性を重要視して、宗教の独善性を否定したりするやり方が、組織の人からは快く思われず、常に否定的にしか受け取られないのでした。

しかしまあ、常識的には、上根とはいえない普通の人達であれば、私の発言を理解できないのは当然でしょうね。しかし私はこのとき、まちがいなく救世の大霊団からのメッセージを必死に伝えていたのです。

その時の私は、3人目の**使徒**としての自覚は未だ無い状態ではありましたが、強い使命感は確かにあったのです。私は、そこでそれを言えば間違いなく嫌われることを覚悟で、普遍的な宇宙の真理の立場に立ち、つまり、救世の大霊団の立場に立ち、最後の最後まで、フィードバック（修正機構）の最後の砦として、体を張っていたのでした。

その意味で、3人目の**使徒**としての無自覚の自覚の中で、もはや白光は改善を期待できる組織ではないと判断したのです。でも長期的な視野からは、私はあの時に白光に対してのいくつかの発言によって、最も重要な問題提起が出来たことになり、それなりの働きは出来たのだと思っています。彼らがいずれ反省しなければならない場面に直面したとき、そのためのヒントは十分に与えることが出来たと思っています。

ここから、白光はその教義に反して、「全ては神の愛の導き」を前面に説くことを明確に自ら否定したことになります。その結果、最も重要な本質を見失い、どこまでも普遍性を失い、フィードバックがまったく掛からない、単に五井先生を信仰する自己陶醉の集団へと傾いていったのです。

これは五井先生がご逝去される三年前からご逝去までのきわめて短い期間の話ですから、既に体力の限界に達しておられた五井先生が、ここにどの程度係わっておられたのか、或いは殆ど係わっておられなかったのか、それは私からは全く分からない部分です。

そして私が退会した直後から、何故か、私と五井先生との霊的な結びつきが、どんどん強まっていくのを感じていました。そして、これらのすべての結論として、三年弱後の〔五井先生の復活〕につながっていきます。

白光はこのときから、雪崩のように崩れていったと、私からは見えます。五井先生は体力的に限界に来ており、このとき2人目の**使徒**の働きはもうすぐ尽きようとしていたのであり、既に3人目の**使徒**の時代に入っていたのだと思います。

3人目の**使徒**としての私としては、巷ではよくあるように、前任を否定することで、自分を肯定することはしたくないのです。そのために、ここではかなりのページを割くこととなります。3人目としては2人目を肯定することで、2人目の業績を引き継ぎたいと思っているのです。3人目の使徒の業績は、2人目の使徒の業績があってこそその話です。そして今振り返れば、実際に私は、五井先生の業績をしっかりと受け取っていたのだと思います。

2人目の業績が完全で、完結していれば、3人目は必要ないのです。救世の大霊団から見れば、まだ完結しておらず、説明不足の点も有り、改善の必要性があるから、そしてこの先に、大きな展開が予定されているからこそ、救世の大霊団は、3人目の出現をはじめから準備していたわけです。

従って、このような2人目から3人目への最終の引き継ぎの場面では、一見して、形の上での前任の無謬性は捨てなければならないこととなります。ここで無謬性とは「絶対に間違いを犯さない」とする考え方のことです。もちろん、これは形の上のことであり、決して本質ではありません。しかし、人間は得てして、形にこだわることから、それが不完全に見えてしまいます。そもそも、本質と比較して、言葉とはその程度のことにはしか過ぎないのですが、しかし、形の事といえど、滅多なことで五井先生の間違いを指摘できる人は居ません。それは3人目の私だから出来る事です。それは私以外には出来ませんし、してはいけないことなのです。それは思いつきでする事ではなく、そこに

は、私の人生がかかっているのですよ。

このような言葉による表現では、私の立場を説明すればするほど、私は五井先生の教えを改良して説いていることから、基となる五井先生の教えを低めることになりかねませんし、そして同時に、岩根先生が、何処までも合理的な行動をとっているように見えてしまいます。

しかし私が常に、完璧に合理的な行動しかとらないということはありません、この説明のように言い切ってしまうと、それは真実から多少の距離が出てきてしまうこととなります。

何故なら、それは時間軸上で、原因と結果として説明する限り、そうならざるを得ないからです。これは言葉の表現の限界であり、その限界を超えるために、私は更に工夫をしています。

【未完成だった般若心経／岩根和郎／献文舎】に詳しく書きましたが、この時間軸上での説明は【現実性の立場】の説明という位置づけになります。しかし、五井先生と岩根先生の関係を説明するには、この【現実性の立場】では、大いに不足していて、事が重要であればあるほど【本来性の立場】から話さなければなりません。それは正に全肯定の説明なのです。その場合は結果からの説明になりますから、その結果を実現するための原因と結果であり、そこに間違いは無いのです。つまり、無謬性は本質的に担保されていることとなります。もはや、ここでは形の上のことではなく、その結果の意味にこそ本質があるのです。

そのことに関しては、次第に話していくこととなります。

まずは、この予備知識で以下を読み進めて下さい。

一般にも言えることですが、特に、救世の大霊団からの霊的な指導というのは、常に言葉の表面に出てくることはありません。言葉ずらが常に正しいかどうかでは有りません。行動が常に納得できることばかりではありません。誤解や間違いや失敗と見えることも全て含めて、完璧に計画は遂行されるのです。このような場面では、宇宙の完全性を強く意識しなければならない場面なのです。人間から見れば、不完全に見えても、宇宙から見れば全くこれで正しいのです。皆さんも、そういう理解をする訓練をして下さい。

3人目の**使徒**の私とて、前の二人の**使徒**の業績が有って初めて、自らの天命を果たせるのです。私は1人目と2人目の仕上げとしての役割を持って生まれてきて、今その使命を果たそうとしているのです。全て、折り込み済みの出来事です。

そのためには、2人目と3人目のこれまでの係わりと経緯をばかしたままにする事は出来ず、それを明らかにしたいと思います。

そこで、3人目の**使徒**の私は、2人目の**使徒**の実績を正しく評価し、その実績を認め、その業績を宇宙の中で正しく位置づけし、そして、その上で不足の部分があれば、それを加えて訂正し、そして修正し、改良し、そして、自らとの「差異」を明確にし、その業績を3人目に引き継ぐ作業をしたいと思っています。

●最後の手紙の返事はなく、脱会を決断する

話は私が脱会する直前に戻ります。以下は時間軸上での、原因と結果による【現実性の立場】を主とした説明となります。

以前の五井先生は、おそらく生長の家から離れる場面では、本部から理解されず、誤解を受けて、それなりの苦労はされた筈です。ですから、その五井先生なら、この私の進退をかけた私の行動は当然経験されているはずですから、そして私と同じような立場で苦労されたと思うので、私のこの時点のギリギリの状況をきつと理解して戴ける筈だとの期待で、五井先生に手紙で訴えたのです。

最後に（昭和52年10月8日）、私から五井先生に、教義の冒頭にあるように、神の愛の重要さ故に、「全ては神の愛の導き」とし、その下での「消えてゆく姿」とする見解に対して、許可を願うための手紙を書きました。教義から判断しても、これは必ず受け入れられる筈だと期待していました。その時私は、五井先生が単なる一宗教団体の教祖ではなく、世界平和の中心者として帰一していること。つまり、現時点で言うならば、救世の大霊団の2人目の使徒として、帰一していること。そうであるならば、一つの方法だけではなく、普遍性を失わないために、会の中で、私の見解も受け入れて、「全ては神の愛の導き」を実践することに関して御許可下さるよう切にお願いしたいとの主旨で、私の見解をしたためた手紙を送りました。

しかし、いくら待っても回答はなく、そこで私は、その回答がない事を回答と受け取って、私は会から離れる決断をし、そのようにしたのでした。

この重要場面で五井先生に無視されたことは、当時の私にしてはなかなかきつい仕打ちであり、その結果としての脱会は私に大きな決断をさせましたね。

その決断とは、私の悟りが「全ては神の愛の導き」の心境に到達していたのであり、それを撤回することは不可能でしたから、そこで私は自分の全生涯を貫いて「神の愛の導き」を実践し、その実践の結果を通して五井先生に理解していただく以外にないと判断したわけです。

このような五井先生の振る舞いは、当時の私にはなかなか理解できないものでした。

当時の私からはとても理不尽に思えました。それであっても私は、その理不尽の中に真実の理があることを疑うことはありませんでしたね。

そこで私はそれをも「消えて行く姿」ではなく、これをこそ正に「神の愛の導き」と受け取り、決して逃げず、それをも正面から受け取る方法として、「理不尽の理」と言い切って、積極的に肯定して受け入れる道を生み出し、迷いを振り切って、会から離れ、自らの道を一直線に進んで行ったのです。

●私と五井先生の関係の最も本質的なとらえ方

ここまで、このように書いてみて、このような表現では、まだまだ本質的なとらえ方ではないと思えるのですね。【現実性の立場】からの理解では、これを説明することはもはや不可能であることが分かります。

これは経緯の記述なのであって、真実との間にはまだまだギャップがあります。です

から、ここまでの前2項目のとらえ方もそのまま残して、以下に最も本質的なとらえ方を示しておきましょう。それは先に多少触れた、【本来性の立場】からの理解です。

そして、この【本来性の立場】からの理解が、今後の私の真理の表現にとってとても重要な位置づけになっていきます。

当時、五井先生に対する崇拝や神格化は、確かに次第に私の中にも芽生えていたのです。

私自身はまだ気づいていませんでしたが、救世の大霊団の計画により、私がいずれ3人目の**使徒**として独立して活動し、人々に道を説くためには、そして直接神につながり、3人目の**使徒**として真実の道を歩むには、五井先生という肉体の器への依頼心は足かせに成り、必要ないものであったのです。

私は当時の私の意に反して、それをも越えなければならなかったのです。もちろんそれは救世の大霊団の計画と指導です。

3人目の**使徒**の成すべきことは、2人目の五井先生の業績を受け取り、それをさらに発展させることです。

それは必ずしも個人崇拝の全てを否定するものではありませんが、それを中心として人々に説くのではなく、真実の道を最も純粋な姿に高め、そして最も純粋な形での神との関係へと導くことです。

そして実際に、私は自らの体験を通して、宇宙の姿と宇宙と人間の間を最も普遍的に説き、実践論をも示して、3人目の使命を果たして行くことになっていったことが、今ならはっきりと分かるのです。

救世の大霊団の意志としては、私が3人目の**使徒**としての立場を確立するためには、形の上で、私が一旦五井先生との関係を絶つことが必要なのですね。

あれから三十数年も経ち、私がここまで来てみると確かにそのように見えるのです。全てを感謝で受け取る以外にないのですね。五井先生も私も、そこまでのことを何の打ち合わせも無いままやるのですから、互いに一旦はその気になって、本気で袂を分かťのですね。

ここに【本来性の立場】として、3人目の**使徒**の働きを説明しましたが、今後も、【現実性の立場】からの説明を主としながらも、しばしば【本来性の立場】からの説明が入ってきます。その都度、頭を切り換えて【本来性の立場】からの理解を深めてください。そしてもちろん、【本来性の立場】からの理解が、最も本質的な理解であることは、言うまでもありません。

そして、重要なこととして【現実性の立場】からの理解では、どうしても相対的になり、原因結果からの説明となり、善と悪との対立となりがちです。それを解決するのが【本来性の立場】からの理解です。この理解に是非慣れて戴きたく思います。

このように、五井先生と岩根先生との関係を説くには、【現実性の立場】からの理解ではどうしても無理が出てきます。このような重大な出来事の理解は、【本来性の立場】からの理解でなければ、その本質を理解は出来ないのです。そして、岩根先生はこの二つの関係【現実性の立場】からの理解と【本来性の立場】からの理解とを示し、それを自

明行で無理なくつないだのが、岩根先生の重要な業績でしょうね。自明行については、既にご承知のように「人間やりなおし」に詳しく書いてあります。

さて、ここまでは、五井先生から岩根先生への、即ち「消えてゆく姿」から「神の愛の導き」への大変化の経緯の説明です。以後、私は「神の愛の導き」を誰にもはばからず、前面に出して説くことになっていきます。

私はこれらの一連の出来事により、五井先生への気持ちも吹っ切れて、これで私も決断が出来て、単独で新しい活動をはじめていきます。わたし個人としては、会を去って後、独自の活動をはじめ、白光真宏会との関係は完全に切れませんでしたので、その後白光真宏会がどのようになるかと、私には一切関係ないことでした。もうこれで、白光真宏会とは一切関係なく、独自の活動が出来る筈でした。

ところがですよ、その後直ぐに五井先生は亡くなられ、私の前に復活されて、私に重要な伝言を預けることになったのです。ここで、復活の五井先生から重要な伝言を受けた私としては、その伝言により、私は再び一旦切れたはずの、五井先生との関係と、白光真宏会との関係を求められることになりました。それであっても私は、それを無視して、これをこれまで三十年以上も放置してきましたが、いよいよもうこれ以上は放置は出来ないとの認識に至るのです。

●復活の五井先生の憂いとはいったい何なのか

実際問題、五井先生の組織を継承することはなかなか困難なことです。もし、復活の五井先生の言葉に従い、私が教団を継承しても、五井先生の教えが変質するという点では、同じでしょう。その変質に対して、正当な理由が見いだせないから混乱するのでしょうかね。

もし、生前に、五井先生からの継承が明確に指示されていれば、このような混乱は無かったと思いますが、それはもう、周囲の誰もが受け入れないということなのでしょう。そして、昌美先生への継承の指示は実際に無かったのです。

この、生前に継承が明確に指示されていないという事実こそが、重要な点です。

しかしより正しくは、五井先生の復活によって、後継者との伝言を頂いてから振り返れば、確かに五井先生は生前に、この私に対して複数回に亘り、跡継ぎとの示唆を与えて下さっていたと気づくのでした。そのことは後に、第五章で又触れることにします。

そこで、今からでも、五井先生の意向を正しく受け取ろうとすることは、十分な意味があると思えます。

このような状況を踏まえて、ここで、当時の私が感じたことを思い出しながら、復活の五井先生の本当の意志とは、いったい何であったのかを推測してみたいと思います。

その当時、白光真宏会の中では信仰の形が限定されていたために、最も大事な2人目の**使徒**としての五井先生の使命が達せられなく成っていったのだと、当時の私には見えていたのです。つまり、組織上の問題により、救世の大霊団の**使徒**としての使命を果たせなくなっていたということなのです。

私も時々五井先生の身近にいさせて戴いたから分かりますが、五井先生はすばらしい方でした。ものすごい霊的パワーを持った方でしたよ。でもそれであっても、それだけでは、本来の目的でなければならぬ、世界平和の実現には直接繋がらないのですよ。

しかし、これが単なる宗教団体なら、これで全く問題は無いのです。しかしながら問題点はここなのです。私は白光に単なる宗教団体以上のことを求めて、それを期待して係わっていたということなのです。そしてこの私の視点こそ、救世の大霊団の視点なのです。私は、今思えばですが・・・、私は白光に対して、常に実質的に救世の大霊団の3人目の**使徒**としての視線で観ていたことが分かるのです。私からは、この信仰の延長上に、世界平和の実現は無いと見えたのであり、五井先生が自ら世界平和の中心者を名乗る限りには、一つの方法に限定せず、独善的にならず、他の方法をも否定すること無く、私の示した普遍性に基づく方法も、積極的に受け入れて、それを認めなければならなかったのだ、と見えますね。この時の私の判断は、今になって振り返ってみても、全くもって正当ですね。でも、宇宙の普遍性に基を置く私の言動は一般の信者の人には一体何のことか、全く分からなかったのでしょうか。そしてそれは幹部の人と同じです。

中に居ればこれが不自然とは見えず、独善とは見えず、そこでは互いに、五井先生崇拜の競争に成っていて、如何に五井先生を高めるかだけが、日々の課題と成っていきます。

ところがですよ、私が辞めた時点から、突然、以前とは全く違う教えが説かれることになっていきます。突然「五井先生に帰依があれば、反省しなくても良い」と説きはじめた重要幹部がいるのですよ。それは当時の瀬木理事長のことです。これには当時の私も本当に驚きましたね。私はそれを最初は信じませんでした。何か言葉の言い回して、条件がついていて、そのような誤解が発生しているのだろうと疑っていました。第一、五井先生がそんなことを認めるはずは絶対に無いと思っていましたからね。

私も辞めて直ぐでしたから、この重大情報は私の耳にも入ってきたのです。驚いて、直ぐに、機関誌白光を取り寄せて、確認しました。その情報は正しかったのです。

もう既に辞めたところだから、私が係わることでは無いと切り捨てていましたが、いったいこの大きな不連続は何だったのでしょうか。いったい白光の中で何が起きているのだろうか、と正直驚きましたね。既に五井先生はとても体調が悪く、かなり体力が弱っていた時ですからね。この時点で五井先生の意向というものとはまったく反映されなくなっていたとも考えられます。

この理事長の発言は、これは中にいる人にとっても、大きな違和感があったのだと思います。

ここまで行くと、あるとき私が進退をかけて主張した教義との「差異」などは、今や小さい小さい問題です。全く次元の違うことが堂々と説かれています。この不連続を何と説明するのでしょうか。この時一体何が起こったのでしょうか。

しかし、これは白光を辞めた私一個人にとっては、それはもう、どうでも良いことなのでした。もう今更係わりたくないことでもありました。

後継ぎとは余りに非現実的なことなので、受諾はしていませんでしたが、白光のその後の成り行きが気になっていたことは事実です。白光のこの大きな不連続が五井先生の意志では無いからこそ、生前に五井先生の意思が私に正しく伝わっていないからこそ、五井先生の復活が成されて、私に重要な伝言が成されたと考えるのが自然ではないでしょうか。他に考えようがありません。皆さんも、この点を見失わないようにしてくださいね。

しかしここまで含めて、救世の大霊団としては、織り込み済みであり、それ故に、1980年の五井先生の復活（以下、「五井先生伝言80」と呼称）が早めに成されたのだと思います。

ですから、結果としての今の白光の姿は「これはこれで、想定範囲」として、排除するのではなく、何とかして、救世の大霊団の意に沿って、生き続ける道を探すのが、現実的な解決なのだと思います。

そこで、これから白光の現状を何とかして、最終的に救世の大霊団の3人目の**使徒**によって、排除するのではなく、宇宙の中に正しく位置付けするためにも、ここまでの一連の流れと、白光の突然の変化が五井先生の意志に反していることを明確に知ることが重要です。

振り返れば、白光にとって、当時の私の発言と、私の脱会は重要な意味をもっていて、白光に課題として、そのまま残っていることになりますね。

だからこそ、3人目の**使徒**の私としては、これ以上無視は出来ないとして、五井先生の伝言に沿って、これを今、ここに取り上げることにしたのです。もう、「私には係わりが無いことだ」とは言えなくなってしまった、と言うことです。

振り返れば、3人目の**使徒**としての私の忠告を拒否したことから、白光の混乱は收拾が付かなくなったのだと思います。解決するには、あのターニングポイント以前に戻ることからしなければなりませんね。教義の解釈という原点に戻って、教えを立て直す必要があると思います。

今や、フィードバックの掛からなくなった組織は、五井先生の意向を無視して、その方向性を制御できずにいます。ここまで来ると、五井先生亡き白光真宏会は、ついにカオスの渦の中に吸い込まれてしまったようにみえます。五井先生復活の時に感じたあの五井先生の憂いは当然のことと、今の私には思われますね。

こう言いながらも、今の白光を単なる宗教団体としてみるならば、これでもいいのではないかと、との気持ちにもなります。五井先生とは切り離して、単なる宗教団体と見限れば、これで十分なのであり、そのランクも中の上だと言えます。そう割り切ってしまうと、もうこれ以上、私は係わらないで済むとの気持ちが有るのも確かです。

私はここまでの経緯から色々学ぶことができました。その一つとして、この一連の出来事は、五井先生の霊的パワーはすごかったが、その浄めの力で世界平和を実現するのではないのであり、その意味で霊的パワーが万能ではないということの意味しています。

そして同時に、これはそのまま岩根先生であっても、それぞれ得意分野があるのであり、その力が万能ではないことを意味しています。

ただし、岩根先生はその事を知っているのです、それを前提とし、部分の働きに徹しているのです。その部分の働きによって、他者に働きかけようとしているのですよ。そしてその働きは、救世の大霊団の理念と方針に一致していると言うことなのです。

振り返って、私はこの時点から三十年以上も、3人目の使徒として、しかもその自覚が無いまま、それを意識せずに、第一の天命啓示、第二の天命啓示を忠実に遂行していたことを、今になって確認することが出来るのですね。

●白光が示す世界平和のイメージは非現実的

私もいつ時、白光に深く係わったから分かるのですが、世界平和を祈り、世界平和を語っては居るけれど、その具体的イメージを確認すると、それはあまりにも非現実的なことに驚かされます。

信仰深い人達は、その内に、世界中の人々が皆、五井先生を信仰するようになると、本気で考えているのです。世界中の人達が「世界平和の祈り」を祈るようになると本気で考えているのです。

そして中には、世界中の宗教が、最終的に皆、白光真宏会に統一されることで世界が平和になると本気で考えている幹部の人さえ居ましたね。

さらに五井先生は創造主であり、救世主であるとまで高めています。まあそこに真実も有るのですが、独善的に排他的にそう考えることが問題なのです。

そうなるにはそうなる理由も確かにあるのです。信者は皆、五井先生は自ら救世主宣言されて、世界の業を全てその身に引き受けることで世界を救済すると決意し、遂にその業の重圧の中で亡くなったと理解しています。

五井先生を信仰する人達にとっては、このことをもって五井先生こそ救世主であるとして、他に救世主を認めない理由はこの大犠牲にあるのですね。私もそのような信仰を中心とする人達の中にいたのですが、私は五井先生と特別に親しい関係にあったにも係わらず、私は帰依はしていても、決してこのような個人崇拜には至らずにいたのですね。その中に居ては、私の態度はむしろ肩身が狭い気持ちでしたよ。個人のための信仰であればそれで良いのですが、五井先生が真実大犠牲であっても、その大犠牲でもって全人類を救うという論理には無理があります。もしこのような視点から論理展開すると、「五井先生が人類の全ての業を引き受けられたのだから、私たちは今更もう反省すら必要ないのであり、反省は五井先生が代わってして下さいさるのだ」という強引な前理事長の主張さえ生まれてくるのです。そして信者は皆、このへ理屈を真実味をもって信じてしまうことになるのです。ここに強烈な独善が発生してしまうのです。

ですから、五井先生を信仰する人達にとっては五井先生の大犠牲は間違いのない真実であっても、個人の救われを越えて、真実世界平和を考えると、普遍性という観点からはどうしても、これは人類救済の一部分でなければならないのです。大犠牲が全てではないのです。これが全てであっては成らないのです。

それから、五井先生が亡くなる前の五井先生と私との霊的な交流では、五井先生は「大犠牲は私だけで良い、おまえはそれをしないように」、と常に言われ続けていたように感じていました。更に五井先生は、お話の中で、大犠牲ほど出なくても、中犠牲や小犠牲は行われているとのことでした。そして私はそのことに納得していました。微少犠牲程度なら、私も常に体験しているからです。

そして一方この私も、大犠牲による人類救済という方法に対して、極めて懐疑的で、私はこのような信仰の形が特に苦手な人間と言えるでしょう。何故懐疑的かといえば、大犠牲では苦の本質的解決にはならないからです。

イエスの大犠牲によって人類は救われたのか、と問われれば、キリスト教徒でさえ、「既に人類は救われた」とは、なかなか言わないでしょう。

一つの信仰の形として、多くの人は犠牲という形が好きなのです。仏教の中でも、犠牲が美談として語られています。この形が好きな内は、この犠牲の形が現れ続けます。そこで、3人目の使徒は、大犠牲によっても、苦の根本からは開放されないと説いていて、大犠牲を望んではいけないし、もうこれ以上、大犠牲となる人の出現を望んではいけないと説いています。

結局、苦の本質的解決のためには、身代わりは不可能であり、自らの努力で解決する以外にないからです。このことは極めて重要なので、この次に一項目を費やして述べることにします。

救世の大霊団は、イエスを救世主として、イエスの大犠牲を柱とするキリスト教的な信仰の形を2人目の**使徒**として示されたのです。そして救世の大霊団はその次に、このような信仰の形の苦手な、3人目の**使徒**が現れる計画を用意していたことに大きな意味があるのです。3人目の**使徒**は、決して救世主にはならず、あくまで真実の世界観を示し、真理の道を説く、というスタイルを貫く姿勢をとり続けています。そして、その3人目の**使徒**の説く普遍の真理によって、五井先生の教えも生まれ変わることが出来るのです。

さて、当時の白光の組織では、周りが五井先生信仰一本にどんどん傾倒していくことで、普遍性を失っていくことに気づかなければならなかったのです。これは宗教自身が迷っている姿と、私には見えたのです。

この時の私の心からの叫びは、「五井先生は世界平和の中心者なのだから、信者の個人の救われにおいてはともかく、五井先生の大犠牲だけでもって世界を救うという信仰の形にはどうしても無理があるから、何とかして欲しい。」というものでした。そしてもう一つの危惧は「これだけでは、反省しなくても良いというような怠惰な人間をたくさん生み出してしまう」というものでした。

ここははっきり言いますが、・・・救世の大霊団としては、この時点を2人目から3人目への交代の時機として定め、急遽岩根先生に引き継がれたという事になるのです。私は、五井先生信仰の限界を知り、独善を排除し、五井先生の苦難の体験を可能な限りプラスに活かして、その業績を正しく引き継いで、3人目の**使徒**として、先に進んでいっ

たのです。正確に言えば、私は3人目の使徒であることを、その後三十年以上も気づかずに、それをやってきたのです。それに、今はじめて気づいたわけです。

●五井先生の大犠牲の意味とは

まず、五井先生の大犠牲のみに匹敵する、イエスの大犠牲について語ってみましょう。ここには、共通の信仰の形が見て取れます。

質問：イエスの死が「多くの人の身代金」と言えるのはなぜですか。

イエスが自分の命を犠牲にしたことは、神が人類を罪と罰と死から開放する、つまり、救うための代償でした。聖書では、イエスの流した血が購いの代価と言われています。それでイエスは、「多くの人の身代金として自分の命を捧げるために」来た、と言ったのです。

質問：なぜ「多くの人の身代金」が必要だったのか。

最初の人間アダムは完全な者、つまり罪のない者として創造され、永遠に生きる見込みを持っていましたが、神に背いたため、その見込みを失いました。そして子供をもうけた時、罪という欠陥を子孫に伝えることになりました。聖書の中に、アダムは自分自身と子孫を罪と死への奴隷として売った、と述べられているのは、そのためです。アダムの子孫はみな不完全なので、だれもアダムの失った見込みを買い戻すことはできません。神は希望のない状態にあるアダムの子孫に同情なさいました。しかし、人間の罪を正当な根拠もなく見過ごしたり、容認したりして、ご自分の公正の規律を曲げることはできません。それで、人類を愛するがゆえに、罪を許すだけでなく、消し去るためにも、法的に必要な手立てを講じることにされました。その法的な基盤となるのが、購いです。

<https://www.jw.org/ja/%E8%81%96%E6%9B%B8%E3%81%AE%E6%95%99%E3%81%88/%E8%B3%AA%E5%95%8F/%E3%82%A4%E3%82%A8%E3%82%B9-%E7%8A%A0%E7%89%B2-%E8%B4%96%E3%81%84/>

このような発想は、東洋に育った人間としては、遠い世界の不思議な伝説のように見えてしまいます。なかなかこれをそのまま真実と受け入れるには、かなりのギャップがあります。私もそのような人間の一人です。

このように、人間を、神の創造物とする世界観と、アダムとイブに全ての起源を置く、叙事詩的な解釈は、一つの民族の伝承である内は、それなりの高揚感と民族の誇りを持つことができるのでしょうが。しかし、この一つの民族の伝承を他の民族にまで拡張し、さらには現代の世界人類に拡張して、この解釈を当てはめようとするのは、かなりの無理があります。アダムとイブは果たしてホモサピエンスなのか、ネアンデルタールなのか、それともクロマニヨンなのか、史実とは全く整合しません。

しかし、如何に無理が有っても、それを強く信じれば、宇宙の最も基本的

な法則「思い通りになる法則」によって、そのように状況は動き出します。「思い通りになる法則」は常に宇宙の意志に沿ったものばかりではなく、宇宙の意志に沿ったフラクタル共鳴と、そうではなくただのベクトル共鳴というものがあり、このベクトル共鳴が宇宙の意志に取り込まれて、はじめてフラクタル共鳴にまで成長します。このフラクタル共鳴こそが、現代において、人類の恒久平和を創り出す、生命エネルギーとなるのです。

ただのベクトル共鳴は、常に矛盾を抱えていますから、「思い通りに成る法則」は、常に矛盾をも創り出してしまいます。

過去の信仰は、フラクタル共鳴に成長した時代もあったのですが、時代が過ぎて、普遍性を要求される現代という時代に至ると、突然、ただのベクトル共鳴となり、さらには反フラクタル共鳴となって、破壊的な作用をしてしまうこともあるのです。

現代から未来にかけて、宇宙人の存在が明らかになると、過去のフラクタル共鳴も、多くの矛盾が出てきて、全く通用しなくなることは、火を見るより明らかです。

現代には現代の、正しい世界観に立った、より本質的な解釈が必要と言えます。それが3人目の**使徒**である岩根先生が開拓した、絶対普遍の世界観と、それを体得するための行ととしての、自明行であるのです。

さて、そこですが、五井先生の大犠牲についても、白光の中では、人類を救うために、人類の業をその身に受けて、人類の代償となるために、五井先生の大犠牲は成されたと言われています。

そこで、ここに人間の苦とその開放について、私の理解を示しておきます。【未完成だった般若心経／岩根和郎／献文舎】に詳しく述べましたが、般若心経の世界観に経てば、救われの様相は一変します。

一義的に人間にとって、苦とは罰やあがないではなく、「空への帰還」を達成するために、、、つまり苦とは救われの為に必要な材料となります。

この書に示したように、人間の最も根源的な苦は、それは心の姿勢が歪むことによって発生する苦です。さらに、嘘によって発生する想念の苦があります。ここまでを「一次的事象の苦」と呼称します。次に、これらが原因となって、「思い通りになる法則」により、「二次的事象の苦」を生み出します。これは最も本質的な意味で、決して罰でも罪でもありません。この「二次的事象の苦」は「思い通りになる法則」によって、自らそれを望んでしまった結果であることとなります。この「二次的事象の苦」は、精神が病んでいる状態で、やがて肉体も病んでしまいます。それはそのまま運命的な苦となって現れてきます。全ての「二次的事象の苦」は「一次的事象の苦」を元として、「思い通りに成る法則」が作用して、思い通りに成った結果として「二次的事象の苦」が発生します。ですから、「二次的事象の苦」は「一次的事象の苦」にまで遡ることで、解決することができます。そこまで行ってはじめて「二次的事象の苦」は解消し、消滅しますが、

これには「一次的事象の苦」を発見するという、修行を積まなければ成りません。その修行を岩根先生は自明行として示しています。

多くの人々は、「一次的事象の苦」に気づかずに、「二次的事象の苦」のみを苦として捉えています。したがって、多くの人々が苦として自覚している、この「二次的事象の苦」を、多くの宗教では、解決すべき苦として扱っているのです。

そこで、この「二次的事象の苦」を集めて、集中的にベクトル昇華することによって、ある程度人々の苦を解消してくださるのが、五井先生の大犠牲であると言えます。イエスの大犠牲も同じ意味合いです。

しかし、根本の問題として、大犠牲だけでは「一次的事象の苦」は手つかずであり、決して解決されずにそのまま残ります。人は最終的に、「一次的事象の苦」を自ら感じ取り、それを自ら解決することでしか、本当の救われにまで到達することが出来ません。そして、それこそが、「空への帰還」であることを示しました。

そこで、全ての人々が、苦と感じ取る「二次的事象の苦」に焦点を当てましょう。この「二次的事象の苦」が蓄積してしまうと、もはや「一次的事象の苦」には到達できず、唯々運命の中で苦しんでしまいます。人間の負の体験の蓄積が増大すると、「二次的事象の苦」が蓄積し、苦が新たな苦を生みだし、二重三重に重なって、自らの苦の原因が、いったい何処にあるのか全く分からなくなり、そのために反省が難しくなり、唯々苦しむだけのスパイラルに落ち込んでしまい、そこから抜け出すことが困難になってしまいます。

もちろん、それとて宇宙の法則の中では必要な体験に違いはないのですが、救世の大霊団の側から、現実世界における苦に対して、直接的に苦しみを和らげようとの、救世の大霊団の導きが存在します。そこで、現実の運命の中で苦しむ人々の、願いに応える形で、特別に修行した聖者を地上に派遣し、実際に苦を消滅させることにより、苦は解決されることを象徴的に示すことにあります。

しかし、大犠牲とは、これは救急病院と同じように、直面している目の前の苦から、ある程度救ってもらえますが、決して根本的な苦の解決には成りません。人は、この苦の解決を契機に、信仰に芽生え、自らの努力で、その原因となっている「一次的事象の苦」に到達できるように、導かれます。

苦は「空への帰還」の原動力となる宇宙の法則ですから、運命的な苦の根本となっている「一次的事象の苦」に思いが至り、自明行によって心の姿勢の間違いを発見し、自ら、解決しなければ成りません。それは誰にも代わってはもらえないのです。つまり、大犠牲によっても解決しないのです。

現実には直面している苦の状況を、一旦軽減して下さり、負担を大きく軽くして戴き、その上で、自分をゆっくり省みることが出来る環境を与えて頂き、そこで祈りと自明行によって、苦の根本を自ら解決し、真っ直ぐに、救われの軌道に乗せていただく、前提条件を作るために大犠牲は意味を持ちます。ですから、大犠牲は、根本的な苦の解決ではなく、根本的な苦の解決のための、環境を作って戴いていることになります。

ですから、決して大犠牲によって、人々の苦の全てが無くなると考えてはなりません。

苦を自らの力だけではなかなか解決できませんが、五井先生の大犠牲によって、信者

一人一人の負担を軽減し、楽にして戴ければ、信者がこれまで自分で蓄積した苦の体験に直接向かい会い、後は岩根先生に引き継いで、祈りと自明行によって、「一次的事象の苦」を発見するまでに成長し、本来の「空への帰還」のために、苦をプラスに生かすまでに、成長させて戴けるのだと、言えると思います。「一次的事象の苦」についての詳細は【未完成だった般若心経／岩根和郎／献文舎】を参照してください。

大犠牲によって、人間一人一人の、捻れに捻れた「二次的事象の苦」を解きほぐして戴き、後は、自らの祈りと自らの修行と反省によって、救われの道の入り口へと連れていってもらえるのです。急場では、救急車で病院に運んで戴けますが、回復した後でも、「一次的事象の苦」に気づかず、又同じ事を繰り返せば、大犠牲はまったく意味の無いことになってしまいます。

繰り返しになります。大犠牲があったからといって、それで直接的に皆が救われるということにはなりません。大犠牲によるベクトル昇華によって、一旦、負担軽減により楽にしてもらえますが、その機会を捉えて、動機が多少不純であっても、信仰に目覚め、自らの意志で、「一次的事象の苦」に向かうことができれば、大犠牲は意味があったことに成ります。ここで、「一次的事象の苦」を見つめる勇気を持ち、自明行を実践し、自ら苦の根源に気づき、その原因を知り、祈りと修行によって、「空への帰還」を果たし、救われに至ることが出来ます。そこまで行って、はじめて本当の意味での救われとなります。

この意味で、3人目の**使徒**の岩根先生の教えがなければ、五井先生の大犠牲の意味も半減するのだと思います。

本来、苦とは、、それは[一次的事象の苦]のことですが、それは「空への帰還」のために、必要な体験なのですが、その苦の体験を効率よく生かせるように、大犠牲によって、人々の苦をここに集めて消滅することを象徴的に示し、そして実際に、個人や人類の抱える大きく捻れた「二次的事象の苦」を一部解きほぐして頂き、それを通して「一次的事象の苦」に気づき、救われに向かう運命として、導かれることになるのです。しかし、いくら五井先生の大犠牲によっても、「一次的事象の苦」からみれば、決して身代わりにはなりません。つまり、「一次的事象の苦」の解決には成らないのです。「一次的事象の苦」はあくまで、自らの力で解決しなければ成らないのです。

「二次的事象の苦」を少なくして戴くことで、修行のきっかけを作って戴いたのであって、ただ大犠牲を有り難がって、それに頼るだけで、自ら修行せず、反省しなければ、誰も一切救われることはないのです。大犠牲が人々の身代わりなのでは、人々の生命活動の意味が無くなります。苦を体験した意味が無くなります。

せっかく「二次的事象の苦」を軽減して頂いても、そこでやがて「一次的事象の苦」の自覚に至るのでなければ、「空への帰還」という、人生最大の目標を失ってしまいます。

大犠牲によって、或いはより一般的には、守護の神霊によって、「二次的事象の苦」は軽減してもらえますが、「一次的事象の苦」は自ら自明行によって発見し、自ら解決しなければ成りません。それが、「思い通りになる法則」であり、それが「生きること」の意味であるからです。

そこですが、以前示したように、「五井先生に帰依すれば、反省しなくても良い」というようなことは、絶対のないことをここに強調しておきます。それを信じることは、せつかくの大犠牲を無効にすることになります。

百キロの荷物は一人の人間に簡単に運べないが、十キロずつに分割してしまえば、人間には十分運べる荷物になるのです。人間が、苦に直面して、それを逃げずに正面から捉え、修行しやすいように、負担を分割したり、一部を肩代わりして戴けることなのです。

大犠牲には、守護の神霊の働きが、この現実の世界に象徴的に示されていると言えます。実際に五井先生が犠牲になることにより、負担軽減が為され、その後に連携するように、岩根先生によって自明行が説かれることで、真の救われの道筋が用意されていると言うことを、目に見える形で、象徴的に示されているのです。

このように、五井先生の教えは岩根先生の教えに連携することで、完成するように思われてきます。

岩根先生の教えは、全ての宗教の頂点にあり、全ての宗教は岩根先生の教えにつながることで、世界観の中に統合され、その存在価値が認められることになるのだと思われます。

重要なことは、「一次的事象の苦」に気づくことで、人は皆「空への帰還」を果たすのです。大犠牲は「二次的事象の苦」を削減して戴くことであり、本当の救われは「二次的事象の苦」が無くなることではありません。

「二次的事象の苦」の根源にある「一次的事象の苦」に気づきさえすれば、大犠牲に依らずとも、人は皆、最終的には必ず救われ、「空への帰還」を成就します。

「二次的事象の苦」は誰もが自覚しますが、「一次的事象の苦」に気づく人はきわめて希で、その人は既に救われの道に入っている人と言えます。多くの人間の願いは常に「一次的事象の苦」の解決ではなく、「二次的事象の苦」の解決にあり、この苦から救われたいと神に祈るわけです。

大犠牲は「一次的事象の苦」ではなく、「二次的事象の苦」の削減ではありますが、大犠牲を信じれば、神が身近に感じ、犠牲を払っても神は人類を救いあげるのだという、信仰が生まれます。

そこには、神による救済が、存在することを、象徴的に示されていると言えます。これだけの大犠牲を払っても、神は人類を救うのだということの、象徴的表現です。

つまり人は、そして人類は、業生ではなく、神によって救われる存在であると言う真実を、実際に形で示して頂いたことで、人は神の存在を知るのです。

さてここで、象徴的表現を避けて、般若心経の《世界観》に立って、最も本質的な真実を述べれば、、、その真実は、宇宙はそのまま、善と悪の対立のように見える世界も、実は大肯定されており、不生不滅・不垢不浄・不欠不満なのでした。そこに欠陥はありません。そして苦とは、「空への帰還」のための生命エネルギーの作用なのでした。

私達人間は、善悪の構図や神と悪魔の構図に依らずとも、守護の神霊に帰依すること

で、効率よく、自らの苦の体験を生かし、一部解消して戴き、修行の道筋が示され、私が示した自明行によって「一次的事象の苦」が解決され、「空への帰還」が成就するように導かれるのです。これが最も本質的に示した救われの本筋です。

人類は、いよいよ、**3人目の使徒**の出現により、この最も本質的な世界観を理解する段階に至ったのです。

●同じ轍を踏まないために

ここに指摘した白光真宏会の抱える幾つかの問題点について、私は自分のこととしてよく学ばせて戴きました。そこで、これらの経験から岩根先生はどのように解決したかと言えば、・・・。

私につながってくる多くの人達は、私の著書を読んで感動し、興味を示し、あるいはこの道を歩もうと決心して、少しずつ私に近づいてきても、私が神様に見えたり、ただの人間に見えたり、崇拝してみたり、疑ってみたり、優しく見えたり、怖く見えたり、当初どのように接して良いか分からないものです。このような不自然さは、当初は誰にとっても当然のことなのです。これは、誰もが通る道なのです。

このように当初の段階では、岩根先生個人に対して尊敬の念があっても、その接し方は実に不自然になってしまうものです。

それは当然のことであり、暫定的にはいろいろな場面が考えられます。そこで、親しみを持ち、必然的に岩根先生への個人崇拝的傾向がでてきても、まあ、私としては積極的に薦めはしないのですが、これも道の入り口として、暫定的な形として拒否はしないようにしています。意地悪で否定的な、横目で遠くから見ている姿勢よりはずっとこの方がよいですからね。先ず、導きのためには、私の懐に入れなければ成りませんからね。

そこで、当初ありがちな「個人崇拝的な傾向の、岩根先生信仰」と、「尊敬の念により岩根先生の下で共に生きる姿勢を示し、岩根先生に帰依すること・・・」、とは別のこととして、明確に分離しておきます。

帰依して岩根先生と共に歩もうとする場合は、それは用意された多くの悟りのコースの中の一つのコースとして位置づけています。私はこれを C 2 コースとよんでいます。一方、個人崇拝的な傾向を持つ暫定コースは C 3 コースとして、C 2 コースとは明確に分離しています。

そして、「この C 2 コースのポジションは決して、私を神様扱いするような、個人崇拝ではない」、ということをキッチリ示すことに心がけています。ここで暫定的に許されている、C 3 コースは、あくまで正規の C 2 へ至るための暫定コースとして位置づけています。

しかも、3人目の**使徒**としては、・・・いや、全くその自覚が無いときからですが、C 3 コースはもちろん、この C 2 コースの形を大きくして行って、世界の平和を実現する、等とは考えていません。外向けには C 1 コースとして、岩根先生を前面に出さないコースを主流としたいと考えています。

私は、悟りのコースとして、全部で A,B,C,D,E,F,と6つのコースに分類しています。

そして、C 2 コースは、6 分類の中の上から 3 番目の C コースの中の、さらに枝分類された中の 2 番目のコースに過ぎないという位置づけに成りますね。さらに C 3 コースは枝分類の 3 番目に位置づけています。この分類は、拙著『自分の発見』（献文舎）の中で詳しく述べています。

このように位置づけておくことで、身近に居る人たちは帰依のコースですから皆、自分たちを C 2 コースと呼ぶことに慣れていています。決してこのコースが主流では無いことを自覚しています。時々、「私たち C 2 を歩む者は・・・」というような会話が成されていますよ。

つまり、この人達の多くは、常に岩根先生の近くに居て、活動を共にする人ですね。私はこのようにして、個人崇拜は暫定的に認められるのであり、それが主流と勘違いしないように、帰依と個人崇拜とを明確に分離して、十分に慎重に歩んでいるのです。

私がこうまで言うのは、私の活動を、私を教祖とした宗教にはしたくないから、なのです。この活動は、変幻自在な、形の無い潤滑油で有るべきと思っているからです。

おそらく、これは 2 人目の使徒の組織運営を見ていて、そこに何らかの不自然さを見いだして、それを自らの組織作りに活かしたのだと思っています。

世界は広いですから、岩根先生を知らなくても、つまり帰依が無くても、絶対普遍の道を歩む人は居るはずです。実質、岩根先生の道と同じ道を歩む人は居るはずです。その人は当然、救われます。しかも、帰依は絶対条件ではありません。この場合は私の分類では、A、B、又は C 1 コースです。

ここでですが、この意味は「帰依しなければ、絶対に救われない」とは言いませんよ、という意味です。

それから、帰依はしているつもりでも、実質出来ていない場合も多くあり、その時の都合で帰依はできたつもりで居ても、何か不都合があれば、いつでも解消するような帰依であっては、意味の無いことですからね。しばしば運命の分岐点ではそれが確かめられます。しかし、それであっても、帰依を救われの条件としないのは、「あなたは正しく帰依できていないから、救われません」とは言いませんよ、という、私からの赦しの意味なのです。言い換えれば、帰依するというのは、そう簡単なことでは無いからです。

●三人目の使徒を宣言した岩根先生と共に歩むには帰依が絶対条件となる

しかしですよ、いいですか、この度 3 人目の使徒を宣言したことで、岩根先生の宇宙での立場は確立しました。そこで、帰依の意味も大きく変わり、以下が追加されることとなります。

そこでですが、その岩根先生と共に歩むには帰依が必要なのですよ。わざわざ「私は帰依しない」という人と、この道を共に歩むことは出来ません。この道を共に歩む場合は、常に岩根先生に帰依しようとする姿勢は必要なのです。

何故に、帰依が意味を持つかと言えば、岩根先生と絶対普遍の価値体系はフラクタル共鳴の関係に有るのですからね。この関係の中に岩根先生の天命としての絶対性が存在しているのです。この共鳴関係にある両者は一体であり、ここを分断することは不可能なのです。「私は帰依しない」と言う人は、これを敢えて分断しようとする人なのです。

それは不自然なことであり、半分を拒否するということになるのです。さらにそれは3人目の**使徒**の絶対性を認めないということであり、与えられている絶対性を敢えて相対化しようとする意味になります。

それであっても、一般には、私は帰依を求めません。私が深く普遍性を追求したことから導かれる、「帰依を絶対条件とはしない」と言うことの、私の真意を正しく理解するように。いいですか？。

私に与えられている絶対性が、またまた世の教祖様のように独善を生まないようにとする配慮です。そして後に話しますが、外向きには私は黒子として、しかも潤滑油として動きます。私の存在はあまり表に出さずに、各宗教において預言されている救世主が表に出やすい環境を作ろうとする配慮なのです。それは先に示した五井先生の体験をこのような所に生かしているのです。

そして、これも後に話すように、私は縁があって私に直接つながる人達を救いますが、一般の大多数の人達を直接救おうとしているのではなく、大多数の属する宗教や文化を救うのであり、その中の指導者を救い上げて、普遍性の中に導こうとしているのです。そしてその結果として、全人類を救い上げようとしているのです。

ですから私に係わる人は、修行をおろそかにして、私を祭り上げることだけが、目的になってはいけません。帰依と個人崇拝の違いはまさにここに 있습니다。

私の言う、深い深い意味を正しく理解して下さい。このようなことから、私に繋がる人は決して同じ過ちを繰り返さないように十分に気をつけて下さい。帰依しているつもりが、いつのまにか岩根先生信仰だけを求める形には成らないように、岩根先生を祭り上げることだけの信仰にならないように、ということです。

私は皆さんを救いつつ、世の中の宗教に普遍性を回復させるために、黒子となって潤滑油の働きをしなければなりません。潤滑油は液体なのです。自ら決まった形を持たず、相手に形を合わせ、変幻自在な姿でいなければ成りません。黒子は敢えて崇拝の対象に成らないための仮の姿です。

私の活動は宗教ではありません。私は宗教そのものを救おうとしているのです。

私が形の無い潤滑油だからこそ、私の中にはどの宗教の人も入って来て、普遍性を回復することが出来ます。そして共に、救世の大霊団の地上への働きかけの一部となって、人類恒久平和のための活動が出来ることになるのです。

ですから、私が崇拝の対象になるのはふさわしくなく、いつも黒子でいるのが良いのです。もし、明確な形をもって、表に出て崇拝されると、自らも一つの宗教になってしまって、他と競わなければならなくなりますからね。

ですから私は皆さんの修行のためには、決まった方法を示しますが、外向きに動くときには、徹底して普遍的な方法を追求します。

前任の轍を踏むことなく、どこまでも普遍的な方法で、他者に普遍性を回復させる働きをするという、岩根先生の説く、普遍の道の神髓を皆さんと共に貫いて行きたいと思

います。

●岩根先生の描く、人類恒久平和のイメージ

人類恒久平和を説く限りには、そのイメージを明確にしておかなければなりません。そして、それが出来なければ、私が提唱する「人類愛の祈り」を祈っても、そのベクトルの方向が定まりませんよね。

さあ、それではここで、岩根先生が説く、恒久平和を達成しつつある人類の未来のイメージを簡単に述べておきましょうか。

ここでまた私が、前身を否定して、新たに宗教を興し、岩根先生が世界の中心になって人々を導くなどと言い出して、独善的になるのでは、元も子もありませんよね。

さあ、現代をよく観察してみてください。もう既に世界中には、様々な文化や、宗教が有り、民族が有り、多様性は十分に確保され、満たされていることに気づくのではないのでしょうか。

実は、これこそがきわめて重要な視点なのですよ。

この視点に立てば、今更また宗教を一つ作るのではなく、これからは、既にある多様性を作っている各要素の、それら一つ一つに、普遍性を回復する道をつけてやることと、宇宙の中での位置づけをすることが大切なことがわかりますよね。

そこで、それを私の最初の仕事としたのですよ。私は、まだ3人目の使徒としての自覚がまったく無いときに、既にそのように動いているのです。

世界はもう既に一つになっても良い時期に来ているのです。いや、本来人類は一つなのです。人類愛の祈りにあるように、「私達は既に一つなのです」。今度はその一つの立場から動き出すわけです。

この発想に至るには、普遍性に裏付けられた、色づけの無い人類愛の心と、自らを主張しない謙虚さが必要なのです。自らは黒子になって、全てを受け入れる寛容さが必要なのです。そして、時には、独善を一気に破棄する強い清めの力が必要なのです。そしてさらに、実体験に裏打ちされた、徹底した「空」の思想が必要なのです。

多様性を構成するそれぞれの要素が、他との調和を実現しさえすれば、世界は調和するのです。しかし、多様性を認めると言っても、宗教であれば何でも良いとするものではありませんよ。文化であれば何でも良いとするものではありませんよ。民族といえど、全てそのまま肯定されるものではありませんよ。多少の手を加えて、普遍性の真理の中に取り込むことが出来るものも有れば、独善を主張して、それを守ろうとする、煮ても焼いても食えない宗教や文化や民族は、最終的にはその存在を否定されるのですよ。

独善を持つ宗教が、普遍性を回復するには多少の痛みは伴いますからね。宇宙の中で立場を得るには、自らその痛みを躊躇しないで受け入れる勇気が求められますね。そしてここで重要なことは、普遍性を回復することで、宇宙の中で立場を確保し、その宗教の絶対性は安定的に確保できるのです。

私は各宗教についてその判断をして、その結論を救世の大霊団に伝えます。それも3人目の**使徒**の仕事なのだと、通達されているのです。

この普遍性の追求と、独善を排斥する活動の中では、しばらくの間は、私は黒子で良いのです。しかし、私はわざわざ隠れようとはしませんし、どうしても表に出る必要があれば、それもしますが、それは例外でしょう。

基本的には、他者に普遍性の回復を促すことを組織的にすれば良いと思っています。

私の活動は、これら現実の世界で多様性を作っている全ての要素となる宗教と文化と民族から、独善を排して、普遍性を回復して、宇宙と調和するための潤滑油となることなのですからね。

この普遍性の追求と、独善を排斥する活動とは、それは間違っても、「どちらもそれなりに正しい」というような、或いは「どちらもそれなりに間違っている」というような、何でも混ぜ合わせて、その平均を取るような、味噌もクソも一緒にしたような、日和見主義とは、全く違うことを知っておいて下さい。

そして特に、被害者意識は最も危険な思考です。これは世界の恒久平和にとって、最大の敵です。この被害者意識の強さによって、民族や文化は大きくランク付けされます。もちろん、救世の大霊団によって、それは成されます。

そして次に、宗教には属さない、多くの人々には、恐らくそのような人の方が多いと思うのですが、、その人達には、協力者の文筆活動によって、文化という面から、私と共に潤滑油になってくれることを求めつつ、絶対普遍の真理の道を伝えて行きたいと思っています。

さらに、多少政治的に成りますが、宗教と文化が普遍性を回復した暁には、被害者意識から完全に解放され、普遍性を回復した各民族は、「自らの固有の文化を他者に邪魔されずに構築して、発展させていく自由」を持つことが保証されます。それは他者を邪魔しない義務とも言えますね。

注意すべきは、「自らの固有の文化を他者に邪魔されずに構築して、発展させていく自由」は、平等よりも優先されると言う意味になります。よく考えてみれば、これは当たり前のことですよね。元々、自由と平等は両立しない概念なのですから。

こうすることで、普遍性は回復され、文化は交流しながら、その独自性を確保できるのです。そしてもし、そうでなければ、文化は混じってしまっ、いつの間にか、特徴の無い、つまらないものになってしまいますからね。

さて、3人目の**使徒**は、世界の恒久平和だけではなく、当然「個」の救われも説くこととなります。

敢えて宗教としては説きませんが、宇宙の真理と人間の生きる道は説きつづけます。愛の大切さを説かない宗教はありませんよね。愛や思いやりや感謝については、もう耳に「たこ」ができていますよね。愛や思いやりを説かない宗教は無いのです。その点、それを説いてさえいれば、宗教としての最低の存在価値はあるのです。ちまたに溢れる

新興宗教は、確かに、この点では、人間としての最低の規範を示してくれていて、それなりの存在価値はあるでしょうね。中にはとても感動的な話さえありますからね。

ここでの問題は、それ以上のことを説くときに、唯一絶対になったり、極端な個人崇拜となって独善が発生し、排他的に成り、致命的な問題を発生してしまうことなのです。

愛を説く宗教が沢山存在していて、ここから独善さえ排除すれば、存在価値は十分あるのですが、しかしながら、形ではない、作為の無い、無私の愛を実践することはかなり困難なことなのです。そしてさらに、言葉ではない、目先の都合ではない、全肯定の感謝を実践することは、かなり困難なことなのです。

愛の大切さは誰でも知っているのです。感謝しなければならないことは、もう既に誰もが知っているのです。しかしそれが出来ないことで人は悩み、苦しむのですからね。

ですから、3人目の**使徒**は、愛も感謝も必要であることは当然のこととして、その愛と感謝を心から実践できる道を説き続けるのですよ。

そのためには、心のこもった愛と感謝の実践を妨害している負のベクトルを昇華させなければなりませんね。それを「心の姿勢」にまで立ち返って、そこから行を始めるための、手法の一つとして、私は自明行を説き続けます。人間の行動の原点の、「心の姿勢」から生まれ変わることで、人間はどのような人間にでも成れるのです。自明行は後に多少詳しく話しますが、この自明行があつてこそ、宗教の独善を排除して、普遍性を回復することができるのです。

このようにして「心の姿勢」を整え、生きる姿勢を確立するために、宇宙のフラクタル構造を貫く、絶対普遍のベクトルを発生する祈りを祈ることが日々の行となります。

この絶対普遍のベクトルに共鳴することで、日々の生命エネルギーが供給されるのですよ。

そして、この絶対普遍のベクトルに共鳴することで、当然のことながら、「個」も普遍性を回復することにより、互いの差異を批判する必要がなくなり、差異を認め合い、個性に与えられた絶対性を確保したまま、進歩の中に自然に調和が為されていくのですよ。そのためにはフィードバックとしての「自明行」を怠らないことが必須となります。

従って「個」は、他との平等を求めるのではなく、自ら求めるものを、求め続けることで、求めるものが与えられることになり、その結果として、個性に与えられた絶対性を発見し、それを確立することになるのですね。

この行動原理を伝えることが3人目の**使徒**の仕事であると考えています。

●何故、宇宙の中での位置付けが必要なのか

私は、普遍性の回復のためには宇宙の中での位置づけが必要だと、何度も言っていますよね。これについて、もっと話してみたいと思います。

位置づけとは、宇宙の中で、本来の立場を確保して、肯定されることを意味するのですね。ですから、位置づけが無ければ、宇宙の中では肯定されないことを意味します。これにはとても深く広い意味があり、普遍性を確保するには重要です。普遍性の回復の

ためには、宇宙の中での位置づけが絶対に必要なのですよ。普遍性が回復してはじめて、宇宙の中で肯定されるのですからね。

比喩で話してみましようか。

テレビで見たことなのですが、現代でも、広大なアフリカの奥地では、村を形成する過程で、飲み水となる水場の近くに人が集まってくる傾向にあります。その時に、便利だからといって、水場の近くで下水や汚水も処理してしまうと、細菌が地下にしみこみ、上水を汚してしまい、不衛生になって、伝染病が発生し、蔓延してしまうと言うことがありましたね。良く聴く話ですよ。

ここで、上水が重要で、下水や汚水は重要ではないと言うことは決して言えませんよね。人間が生活するためには、どちらも必要で、それらを適切に処理しなければならないのは当然のことですからね。これは、上水を善、下水を悪とする、善悪の問題でも決してありませんよね。人間はそのどちらとも深い関係を保たなければ成りません。

そこで、解決策としては、上水と下水とを切り離すことです。距離を置くことです。これは明らかですね。つまり、上水と下水とを切り離して、利用するということが、上水と下水の正しい位置づけという事になりますね。

この比喩の意味することは、「全ては神の愛の導き」であるから、如何なる事象も、必要があって存在しているのであり、それらを宇宙の中で正しく位置づけることで、全肯定されるということの意味するのですよ。そして、宇宙の中に正しく位置づけられないときに、様々な不調和が発生しているのですよ。

そしてさらに比喩を続ければ、もし、この実態を正しく把握している知性に溢れ、勇氣ある人が、上水と下水を分離しようとして周りに働きかけたとした場合に、この人の行動はまさに「調和」のための行動、そのものですよね。この人はまさに大調和の人ですよ。

そこでもし、この不衛生で危険な実態を知らない、無知な人達が寄ってたかって、この「大調和」の人を自分たちの生活の場を乱す「不調和」な人として排除してしまったら、これは宇宙の生命活動の進展に対して、真っ向から戦いを挑んだことになりますよね。この行為は自らの村の破壊を意味していることは明らかです。

無知とは怖いことなのです。無知だからと言って許されるのでは無く、無知だから罪が重いのですよ。

これはここでは、比喩として話しましたが、このまま実例と言っても良いことですよ。

敢えて言い換えておきます。普遍性が否定されている危険な教団の実態を知らない、独善を掲げる無知な人達が、寄ってたかって、普遍性の回復の必要性を説く「大調和」の人を排除してしまったら、これは宇宙の生命活動の進展に対して、真っ向から戦いを挑んだことになりますね。この行為は自らの教団の破壊を意味していることは明らかです。

無知とは怖いことなのです。無知だからと言って許されるのでは無く、無知だから罪が重いのですよ。

岩根先生が普遍性を「生み出す」のではなく、「回復する」としたのは、もともと人間は普遍性を持っていたからです。詳しくは【未完成だった般若心経／岩根和郎／献文舎】、【仏教再生としての般若心経／YOUTUBE】を参照して下さい。

ここで解説した般若心経は私の体得した絶対普遍の価値体系としての位置づけになりますからね。そしてその絶対普遍の価値体系の実践論において、私は五井先生の手法を改良して、説いていると言うことになります。

既にお分かりと思いますが、独善があっては宇宙の中で正しく位置づけが成されていないということになります。つまり独善があっては、その存在が危ういということになり、しばしば存在が脅かされます。そして存在し続けるために、常に戦い続けなければなりません。そして、独善を排除し、その上で存在することが許されれば、今度こそ宇宙の中でその位置が安定的に確保されることになります。

普遍性を回復しさえすれば、独善を排除した後も、個々の絶対性は確保できるのです。だから、何も心配は要らないのです。心の底から反省をして、普遍性を回復しさえすれば、宇宙の中での自らの正しい位置づけが出来てきます。そうすれば白光の人達が五井先生を創造主としても問題は無いのです。

●会を辞めてから三年弱の期間、引き継ぎの儀式が続く

さて、私が白光真宏会を辞めた時点に、話を戻します。

今、振り返ってみて初めて分かることなのですが、この時から、五井先生の復活までの三年弱の期間は、私の天命を確立する特別の期間と言えますね。それは第一の天命啓示、第二の天命啓示を障害無く遂行するための、環境を整える期間でしたね。

そして私は、白光真宏会を辞めた後も、五井先生がご存命の期間、私と五井先生には、霊的な交流は続いていたのです。それは白光を脱会した直後だったと思いますが、朝方の黎明の中に、五井先生が霊的に現れて、「岩根君は正しい。（私を脱会させてしまった過程を指して、）ごめんね。」と笑顔で言って下さったことも、その後の私の気持ちの支えに成っていましたね。その時、私は「有り難うございます。もったいないお言葉です。」と応えていたのです。

「ごめんね」、の言葉の中に、これまでの経緯を含めた五井先生の精一杯の気持ちが読み取れました。さらに、私と五井先生の間立ちふさがる数人が、邪魔をしている姿を霊的に感じ取りました。そこにはきっと何か、組織上の理由があるのだろうと理解しました。

そして最終的に、五井先生が霊界に移行されて、五井先生は3人目の**使徒**としての私を十分に理解されたのだと思いますよ。この三年弱の期間、形の上の世界とは裏腹に、私は五井先生と一体感を深めていったのです。形とは裏腹ですから、これは何とも不思議な感覚でしたね。私には五井先生に対する尊敬の念がありましたから、それが却って自らを抑制しがちでしたが、この期間を通して、私は確実に自立し、独立していったと

思います。

今考えれば、2人目の**使徒**と3人目の**使徒**とは、現実の白光内部の混乱には関係なく、何ものにも揺るがない連携を組んでいて、救世の大霊団の主導により、三年弱の時間を掛けて、引き継ぎの儀式をしていたのだと思いますね。

このようなことは表面意識には関係なく、救世の大霊団と、そこに係わる守護神の段階で為されることですから、私も今頃になって理解出来ることが沢山有るのですね。

さらに、私が会を辞めた時点から、五井先生の復活までの三年弱の期間、2人目の**使徒**から3人目の**使徒**に、救世の大霊団の地上の働きのための引き継ぎが成されたのです。この期間は「引き継ぎの儀式」の期間と言えるのでしょうか。そして儀式の最後として、五井先生の復活が為され、後継ぎの依頼のための伝言に至るのです。

そしてここからは、とても長く、いつ解けるかも分からない、封印の時代に入ります。

その後は、私の表面意識では伝言を一切無視し、それを意識すること無く、実質的に3人目の**使徒**としての使命を達成していくこととなります。

そして三十数年間、私は完全に独りで普遍性を求める修行を続け、密度の濃い期間が流れていきました。有意義な時代でした。目標はハッキリ見えていましたから、そこに向かって、努力を積み重ねていったのです。私はこれこそ自分に与えられた修行として、積極的に捉えていたのです。

これこそが、普遍性を追求するための修行であり、ここで自明行を生み出し、「全ては神の愛の導き」と捉えて疑わなかったのです。決して「消えて行く姿」ではないのです。

私はこの課題の修行を実践的に成就するのに、30年以上の時間がかかった、と言うことなのです。

第三章 終わり

第四章 私は独自の世界を極める

●「神の愛の導き」を前面に出し、普遍性を回復する道を求める

その後、会を離れてからの私は、「神の愛の導き」を前面に出す教えを説き、宗教組織は作らずに活動を進めます。先ず、宗教そのものの独善的な、そして排他的なところを問題にして、自らは一つの方法論を示しながらも、他の方法論も一部手を加えて、絶対性を確保しつつ、普遍性を回復させることで受け入れるとする、普遍的な真理を深めて、それを実践的に示しつつ、宗教の外側に、空不動の世界を作りあげていったわけです。それが岩根先生ですね。

だからこそ、私は今でも、手段としての方法論は複数有って良いし、複数なければならぬのだ、として、普遍性に徹した究極の教えが生まれたのですね。

普遍性を重要視する私の立場からは、「消えてゆく姿」も一つの手段であり、祈りの位置づけは共通であり、手段としての自明行は、「消えてゆく姿」に代わって、人間の「負の側面」を正面から見据えて、それを越える方法論を生み出したのであり、ここに五井先生の教えを次の段階に発展させたのが岩根先生の教えであると、そう見えますよね。

しかし、一つの方法論しか許されない白光からみれば、これは許せない違いなのだと思いますよ。

岩根先生によって、般若心経の解読で詳しく述べたように、人間の「負の側面」、及びそこに元をおく苦は「空への帰還」の為に必要なものであり、最終的に「すべては神の愛の導き」として肯定されるのだとする、究極の教えが説かれることとなります。

●独善は何も宗教だけではなく、個人の中に強固な砦となって巣くっている

悟りを得ていない時には、自己の存在に関して自信を持たないために、砦を作って武装し、その中に閉じこもります。人はこの作業に余念がありません。外からの攻撃に耐えるように様々な道具を発明し、戦いに備えます。或いは自ら戦いを仕掛けます。

ここでは、道の言葉さえ戦う武器となります。自己正当化の武器として道を学ぶ人さえ珍しくありません。宗教が独善で無いと生きていけないように、個人も又独善で無いと生きていけないと思っているのです。このような中で、平和平和と叫んでも、皆自分に都合の良い、自分が得をする平和を考えているのです。愛も、思いやりも、寛容も、調和も、親切も、みな自分の閉じこもった砦の中から、自分中心の神様を信じて、相手を変えようとしているのです。

このような自分の実態に対して、問題意識を持たない限り悟りは決して訪れません。もちろん救われることもありません。

私は自明行という「行」によって、この砦を内側から破壊することを提唱しているのです。それは自分自身で破壊することで始めて成功するのです。もしこれを外側から破壊しようとしても、ますます閉じこもり、砦を強固にして、様々な武器でもって、宗教

さえ武器として、道の言葉を道具として、戦い続けることになるのです。

この書では、私は宗教の独善を特に問題にしていますが、それは個人個人の内面にある独善の砦を内側から破壊することでもあるのです。それは拙著『人間やりなおし』に譲ります。

●普遍性を回復すると独善を破棄できる

人類の歴史の積み重ねの上に、自分が居るのです。全体の部分として自分が居るのです。百万個の石の積み重ねの上に、自分が一個の石を重ねたのです。

このように、私の実践的行動を振り返れば、普遍性を重要視すると相手を否定しなくても自己肯定できるので、独善を主張する必要がなくなり、全体がありのままに見えてきて、他者に寛容になることが明らかになりましたね。

普遍性が無いと全体が見えなくなり、自分の存在を確保しようとして独善となり、その独善を守るために、自分と相手の差異を発見して、ことさらそれを強調して、相手批判をして、相手を否定してしまうのです。

そこでは「否定のための否定」が習慣となってしまう、自分がその泥沼の中にいることさえ気づきません。そこでは、相手の存在を否定することでしか、自らの存在を肯定する方法がないのですね。

これが独善の迷える姿なのです。決して他人ごとではありません。あなたは大丈夫ですか？。

普遍性を説く私は、そこに有る差異を肯定しようとしませんからね。これが岩根先生の教えの特徴であると言えそうです。そして、私が実践の中で示しつつあるように、この寛容さが生まれるのは、この道が宇宙の絶対普遍の真理そのものであるからだ、と考えられますね。

ですから、岩根先生は世界一寛容なのです。世界一調和の人なのです。分かりましたか？。

寛容にせよ、調和にせよ、上っ面の親切とか、言葉遣いのことではないのですよ。

普遍性が無ければ、愛も、思いやりも、平和も、寛容も、調和も、親切も、本質を欠いた、上っ面の飾りものと成り、独善の狭い範囲でしか通用しないのであり、その外側では、深刻な対立となるのです。普遍性が回復していれば、愛も、思いやりも、平和も、寛容も、調和も、親切も、全人類で共有出来るのです。

1人目、2人目は出来なかったが、3人目の**使徒**は遂に宇宙の絶対普遍の真理に到達することが出来たのだと言えます。3人目は1人目、2人目が出来なかったことを成し遂げたのです。そして、第一の天命啓示のように、「釈迦やイエスにも出来なかったことを成し遂げること」になるのです。

●般若心経は私だから解読できた

私の到達した悟りは、般若心経に一致していたと私は考えているのです。まさに、私の到達した絶対普遍の価値体系そのものが般若心経として解読されたのです。

全ては神の愛の導きを前面に持ってきたことは般若心経の、「照見 五蘊皆空 度一切苦厄」に通じます。五蘊皆空は「消えてゆく姿」ではないのですからね。むしろ、無色・無受想行識・・・無意識界まで・が、それに対応します。或いは、・・・無智亦無得、までかも知れませんね。

こうしてみると、私が般若心経の解読の役目を与えられたのも、決して偶然ではなく、五蘊皆空を身をもって体験している私だからこそなのですね。

このような徹底した全肯定の教えを説いたことと、普遍性の追求の姿勢が、天に認められたからこそ、般若心経を解読する役目が与えられたと考えるべきなのですよ。

「消えてゆく姿」では、般若心経は解読できないのです。「全ては神の愛の導き」だから、解読できたのですからね。そして、私は生涯を通して普遍性を徹底追求したから、解読できたのです。3人目の**使徒**の資格として、般若心経の解読はとても重要なことです。

基本的なところでは、私の霊修行の体験を通して、宇宙は全肯定されていると理解し、しかも普遍的に道を説くために、そういう論理立てをしたのです。般若心経で言えば空と色との関係で、絶対普遍の宇宙論を展開し、諸法空相で普遍性の表現を見事に論理構築できたわけです。それが、岩根先生の教えなのですよ。

3人目の**使徒**の働きとしての岩根先生は、普遍的であるということと、「人類愛の祈り」が般若波羅密多のフラクタル共鳴を創り出して宇宙と共鳴し、地上で生命活動を続ける人間が、肉の身を持つ故に、どうしても避けられない、人間の持つ「負の側面」を積極的に直視し、そこに宇宙的意味を見いだしたのです。

先ず、「神の愛の導き」の中で捉えて、そしてさらに、岩根先生は、今みなさんがやっているように、五井先生の「消えてゆく姿」で世界平和の祈りを一歩進めて、「全ては神の愛の導き」の中でのベクトル昇華という位置づけにし、自明行に繋っていくのです。自明行の詳細は『人間やりなおし』を参照して下さい。

●嘘を発見する道、自明行を生み出した

自明行とは、自分の正体を良くも悪くも見抜くことであり、人間の本質を覆い隠している「負の側面」を取り除き、本質の輝きを取り戻す作業です。輝きを取り戻した人間の本質は、その根源的な力により、一気に人間を救い上げます。

そこで自明行とは、この避けられない人間の「負の側面」から決して逃げずに、無視せずに、それをごまかさずに、正面から対処する修行の方法として、自明行というものを生み出したわけです。

それは結局、私に言わせれば、普遍性の観点から、人間は何でも許されているのだけれど、人間の「負の側面」を嘘に単純化して集約したのです。

それは「嘘だけはだめですよ」という単純化なのです。嘘はだめよ、という意味は、「嘘

をついてはだめよ」という意味ではなくて、「嘘は嘘として位置づけなくてはだめよ」というのが岩根先生の大発見なのですよ。

嘘は現実にあるのだから、嘘はあっても仕方が無いけれど、嘘を真実と誤解してはだめよ、ということです。言い換えれば、「嘘は嘘として位置付ければ、嘘さえ存在が許される」ということなのです。「嘘をごまかして、嘘を真実として持っているは、それはだめですよ」ということなのです。それは岩根先生の道の中では、嘘はそういう位置づけになります。

これが、宇宙の中での嘘の位置づけであり、嘘さえも宇宙の中で、立場を与えられ、肯定されたことになります。そしてこれが普遍性の回復という意味になります。その嘘というものを、自分の中に徹底して発見して、[嘘発見の自明行] というものを生み出したわけですね。

そうすることで、ほとんどの、人間の持っている「負の側面」は、宇宙の中ですべてキッチリ位置づけできたという風に私は思っています。これは人類史の中で、大発見なのだと思いますよ。宇宙の中で正しく位置づけさえできれば、何でも存在できるのですね。

●普遍性を回復しつつ、「負の側面」を宇宙の中で位置づける

五井先生から岩根先生への流れとしてはこのような流れがあるのです。だから修行の方法としての、人間のネガティブな、どうしても人間として避けられないで、抱え込んで持っている「負の側面」を、どういう風に位置づけて、処理をするかということに、岩根先生は集中したのですよ。そこの扱いというものを、全ての宗教はかなり持てあまして、その対応に苦労しているんだということを皆さん覚えておいてくださいね。

それをどのように、宇宙の中で位置付けるか、どのように対処するかで対応を間違えると、却ってそれで人を苦しめてしまうようになる。ということですね。夫婦仲が悪いと腎臓の病気になるといって、それだけでは済まずに、腎臓の病気を知って、あんたたちの夫婦仲が悪いんでしょ、という形になるんだ。「負の側面」の扱い方を間違えると、これがかえって人を責め裁く方向に流れることで、つい自分でも隠してしまうことになる、却って苦の原因を作ってしまう。五井先生が生長の家を批判するときには、この点をおっしゃっていましたね。

この私が、今になって考えてみれば、生長の家の問題点は「心の法則」そのものではなくて、「心の法則」がいつも正しいとは限らないこと、間違いも多々あるから、なのだと思いますよ。もしこれが本当に正しいのであれば、その後の処理方法を多少変えて、裁きの方向にいかないよう工夫すれば、十分生き返ると思っています。それは後に話しましょう。

ですから、谷口先生と五井先生には根本的な差異はなく、教えの基本は同じなのですから、生長の家側が五井先生の指摘を受け入れて、その後組織として分離しても、互いを補足し合って共存出来たと思います。

ですから、五井先生が、ご自身のことを考えれば、私のことは理解出来たはずなのです。

しかし、結果として、このようなことが出来るのは、普遍性を強く求める3人目の使徒の岩根先生だけなのだ、と思いましたね。あの戯画化された、第二の天命啓示がここに来て、急に現実味を持って理解されてきます。私だけが、宇宙の真理の中心の的を射貫いたのです。しかも、実践を通してそれをしたのです。

●消えてゆく姿に、宇宙の意味を与える

そこで「消えてゆく姿」ですが、病気もそうなんだけど、病気は消えていくのですよ、というのが五井先生が付け加えた教えだということです。そして、私はそこから入ったから、消えていくというのも、宇宙は完全なのに、消えてゆくだけなら、何故そんなものが有るんだ。元々ないほうが、もっといいじゃないか、というのが私の最初の疑問でした。わざわざ何で消えていくものがあるんだと思った。最初からない方がもっといいじゃないか。と思ったわけです。だから人間はそれを「不調和」だと勝手に思っているが、私はそれは決して消えてゆくだけでは無いのだと理解したわけです。消えてゆくためにだけ存在しているのでは無い、そこには十分な意味があるのだと理解したわけです。完全な宇宙から考えるとそうしか成らないのです。

五井先生は、人間の持つ「負の側面」を捉えて、その事で人を苦しめたくはないという深い愛の心から、生長の家の「心の法則」を否定し、「消えてゆく姿」を生み出したのです。五井先生は、表れてくる苦悩を「消えてゆく姿」とすることで、「それ以上、わざわざ人を苦しめたくはない」、というその主旨を、私はしっかり受け取っていますよ。

五井先生の生涯を通じての最大のメッセージは「祈りの大切さ」と、「わざわざ人を苦しめたくはない」とすることなのだとして理解しています。その上で、「祈りの大切さ」はそのまま受け継ぎ、その「消えてゆく姿」に、消えてゆくだけではない、宇宙の意味を与えたのが岩根先生です。その説明をしましょうか。

五井先生の消えてゆく姿に、私が付け足したいことが幾つかあるのです。そこで次に、「消えてゆく姿」から、「神の愛の導き」、そして自明行までを説明しましょう。

自分から「不調和」と見えることは、確かに「消えてゆく姿」だけれども、それだけでは中途です。「不調和」の原因を知って、その原因を無くす作業はしなければなりませんよね。もし、病気であれば、病気の原因を知ることは、医学的な意味に置いても正しいですね。

ですから、五井先生の解釈に私が追加して解釈すれば、様々な「不調和」な出来事は「消えてゆく姿」だけれども、先ずその状況は、「神の愛の導き」として存在しているのだから、先ずそれを全面的に肯定して受け入れましょう。この段階では、自分から「不調和」と見えることが、本当に不調和な事かどうかはまだ分からないのです。

しかしそれは、考えても分からないこともあるけれども、それは今、必要があって与えられているのですよ。先ずは安心して下さい。と言うことが一番最初に受け取ることであり、それが一番重要なことなのです。先ずこの点をしっかり受け取りましょう。

そしてその次に、その「不調和」と見えることの原因になっている嘘を発見して、その嘘をもう一度「消えてゆく姿」、(私はベクトル昇華としましたが、)としなければ成らないとしたのです。嘘を発見しないで、嘘を無視しておいて、嘘の結果として表れた現象としての「不調和」な状況だけを捉えて、それを「消えてゆく姿」とやっても、その現象は消えますが、原因が無くなってはいないので、その「不調和」は、姿を変えて何度でも現れてしまいます。これでは根本的な解決には成らないということです。

嘘を発見し、その結果の「不調和」を確認してみれば、それは決して「不調和」ではなかった、という事も多々あります。「神の愛の導き」そのものの、「調和の姿」であった、ということだっていくらでもあります。ですから、自分が「不調和」と感じたことであっても、それは本当は「不調和」では無い、ということも常に想定していなければなりません。

● [嘘発見の自明行] により、嘘を切り離す

そこで岩根先生は次なる方法を考えたのです。

まず、「不調和」そのものはもう消えていくだけだから、原因となっている嘘を発見することに努力を集中しなさいとしたのです。もちろん出来事に関して、自らの非が明らかであれば、それは正しく反省はして下さい。・・・しかし、一般には考えてもよく分からない場合が多いので、その現れた現象の善し悪しをいじり回さずに、現象は無視して、その原因となっている嘘だけを発見する努力をしなさいとしたのです。

この嘘を発見して、これを「消えてゆく姿」でもよいが、私は「ベクトル昇華」として扱い、自分から切り離しなさいとしたのです。「ベクトル昇華」の昇華とは、悪いものが良いものに変換されるという意味を含んでいますから、とても納得しやすいのですよ。そうは思いませんか？。

原因となっている嘘はその時に考えて分かることもあるが、分からないことの方が多いから、分からないときは、自分には「不調和」と思える、表に現れた現象の後始末だけはして、常日頃から、嘘を発見することだけに集中しなさい、としたのです。後始末とは、ことの善し悪しに関係なく、場を汚したら、黙って拭き掃除をすれば良いだけなのです。それが本質的では無いことなら、こちらから「ごめんなさい」と言っただってメンツがつぶされることはありません。日本人は昔から、お互いに「ごめんなさい」と言える文化を持っていたはずですよ。

●嘘を切り離すときには痛みを感じる

嘘発見は、自分の成長が実感できるので、本来は楽しい行なのですが、成長を望まない人には、それを苦しいと感じる人も居るのです。しかし、こびりついた嘘を発見してそれを切り離すときには、確かに苦しみもともないます。

自他を苦しめることが目的ではないとしても、自明行によって自分から嘘を切り離す時には、それなりの苦しみは必ずともないます。これまで守ってきた嘘を失いたくないとの気持ちから、切り離される時には、多少の苦しみは必ず発生します。自明行を行じ

て自らの嘘を発見し、それを嘘として自分から切り離そうとしたとき、嘘を守ろうとして暴れたり、言い訳したり、という場面に直面します。

ここで言い訳とは、誰か相手が有ってするのではなく、自分に対して言い訳することが問題なのですよ。

或いは他人に忠告され、それを知らされれば、嘘を守ろうとしたり、その嘘を自分から切り離したくないとして暴れて、「責められた」とか「裁かれた」と感じて被害者意識になる人も居るでしょう。でも、これはどちらも無視しましょう。この被害者意識は卑怯者なのですから、無視で良いのです。或いは放置で良いのです。時にはこんな事で責められたとか裁かれたとか、ガタガタ言う自分を、或いは愛する相手であっても、「甘ったれるな！」と叱咤しましょう。

ですから、この場面は、暴れずに、祈りを大切にしましょう。

忠告する側はタイミングが重要で、相手を思う気持ちが重要であり、最適なタイミングを一年でも二年でも待つ必要があります。それは実行したときがタイミングです。

タイミングを恐れて、忠告を放棄してはいけません。その勇気ある行動を萎縮させてはいけません。そして、先に進むにはこれは避けられないことです。しかし、この時の、忠告される側としては、苦しみを最低に押さえる努力をすることは出来るのです。素直な心であれば、それは出来るのです。そしてもちろん忠告する側は、自ら徹底的に自明行を行じて居る人で無ければ成りません。自ら自明行を深めつつ、愛する隣人には忠告もするのです。

ただし忠告は、皆さんに言っているのもあって、これは一般の人向きではありません。

自ら自明行を深める努力をしない人は、他者への忠告は極力控えるべきです。何よりも先ず、自明行とは、その名の通り、自分のために自分に対してする行であって、決して他者のためにする他明行ではないのですから。もし、忠告の内容が間違っていたとすれば、以前よりも問題は大きくなってしまいます。これは避けなければ成りません。

自明行を自ら深めている人のみが、他者に対して忠告しつつ、自らもそこから同じものを学び取ることが出来るのであり、そこには「進歩と調和」の行為として、宇宙的な意味があるのです。

この書の最後の部分で詳しく説きますが、絶対普遍の道は全肯定の道であり、「全ては神の愛の導き」としての全肯定の道を歩むためには、人間の負の側面に対処する自明行を徹底的に行じなければなりません。これは別々に存在するのではなく、一対のモノなのです。このことを深く記憶に留めて下さい。

●消えてゆくだけではない。フィードバックとしての積極的な意味がある

そして私の霊修行で得たことは、結局、ある種の「苦」は間違いなく必要があって与えられているのであり、「苦」を無視しても、苦は無くならないし、解決しないということなのです。人間が苦を感じるのはフィードバックとしての役割のためにわざわざ与えられている機能です。正しく「苦」を感じる事が出来ると、正しいフィードバックが

掛かり、運命は真っ直ぐに動き出します。ただし、「苦」のとらえ方が間違っているとフィードバックが正常に作用せず、問題はかえって大きくなり、苦しみが増加します。ですから、そのためにも正しいフィードバックを求める必要があるのです。つまり、正しく「苦」を捉える訓練のための、体系だった学びが必要になるのです。正しい苦しみのとらえ方については、拙著『人間やりなおし』の中の、「正しい苦しみの自覚」を読んで下さい。

これは比喻ですが、おなかが痛くなるのは、体に悪いものを食べたことを知らせているのです。痛みを無視したり、痛みだけを止めてしまえば、ますます体が悪くなります。ですから、これは必要な痛みと知ったうえでの適切な対処が必要なのです。

その上で、私の開発した自明行の道は、フィードバックのための新たな展開をしているのです。人間は苦しまなければ成長できないということも事実ですから、必要な苦から逃げないで、フィードバックとしての苦の存在も積極的に認めて、効率よく苦しむ道を発見し、最低の苦しみに最大の効果を得ようという、道でもあるのです。

無駄な苦しみを徹底して排除し、必要な苦しみを大切に扱い、それをも楽しめる程に昇華してしましましょう。と、こういう展開になっているのです。従って、「正しい苦しみの自覚」こそ重要なのです。自明行は先ずそこから入りましょう。

岩根先生は、人間の「負の側面」を含めて、全ては必要があって与えられているという、全ては神の愛の中での出来事として、その大原理の中で、苦から学ぶことがあればそれを効率よく学び、そしてそれは同時にベクトル昇華であり、そして昇華されていくプロセスなんですよ、という視点を生み出したのです。そしてそれが宇宙の最も本質的な解釈なのです。

私は、自分を責め、そして人を裁くような論理構成は良くないと五井先生の主旨をしっかりと受け取った上で、それに私の霊修行の体験を付け加えて、さらに改良して行ったのです。こっちの方が本質的だという立場で、岩根先生の「人間やりなおし」の世界が構築されたわけですね。だからこれはものすごく素晴らしいのです。非の打ちどころがないのです。

でもね、五井先生の教えがあったから、私はそれをできたんです。やっぱり前がなければ、それは生まれてこないのです。だから私から言わせれば、この過去の、ここに至る過程も、それも「全ては神の愛の導き」なんです。決して「消えてゆく姿」ではないのです。そういうことですね。もし、私が一人でこれをやると主張するなら、五井先生の教えは私にとっては、元々無くても良かったもので、五井先生と係わった私の過去は単なる「消えてゆく姿」と言うことになってしまうのですよ。しかも、その方が私の独自性としては意味のあることです。

だから皆さんも、自明行の時に、ベクトル昇華とする作業は「神の愛の導き」の大原

則をの下にあることを思い出してほしいと思います。

もちろん、私が開発したのはそれだけではなく、最も重要なのは、普遍性の追求も徹底してやって来たこと。何と云っても一番の特徴はそこですね。宗教の持つ独善性とか、排他性を全部否定し、体を張って、それを実践し続けてきたということです。

●岩根先生が説きなおす「消えてゆく姿」

そこで、私が理解している五井先生の「消えてゆく姿」の教えを、私の今の立場から解説して、以下に記載しておきます。

「消えてゆく姿」とは赦しの言葉なのです。この言葉で、人は許されるのです。

自分の係わる「不調和」な出来事の、その善し悪しには触れなくても、事の善悪を決めなくても、それをそのまま、出来事のまま、「消えて行く姿」として、その出来事は確かに「消えて行く姿」です。

それで、出来事としては確かに消えて行きます。

しかし、その出来事を作っている原因に嘘があれば、その嘘を嘘と気づかなければ、嘘はそのまま残ります。確かに現象としての出来事は一旦消えて行きますが、原因となっている心の事象としての嘘は嘘のまま残ります。その残った嘘はまた同じような現象としての出来事を何度も何度も作り続けます。つまり、何も消えていないのです。

明らかに嘘をついていて、それを放置したままで、つまり反省をしないで、そのまま嘘が消えて行くことにはなりません。そのままでは、嘘は許されたことになりません。原則として、嘘をついていても許されるということはありません。

もう少し具体的に言うと、自分が加害者なのに、自分が被害者意識でいて、それがそのまま許されると言うことはあり得ません。消えたのは一回の現象だけです。反省が無ければ何度も現象としての出来事は繰り返し繰り返し発生します。先ず自らが、加害者なのだとして理解したときにはじめて、心の中の事象も「消えてゆく姿」として許されるのです。そして現象としての出来事も生じなくなります。そのために、反省は絶対に必要なのです。自分が間違っていたと気づく必要があるのです。その気づきが無くて許されるとするのは明らかな間違いです。

ここに私の知っている、五井先生の教えとは、大きな相違が生まれていると感じます。もし、「五井先生に帰依していれば、反省はしなくても良い。五井先生が代わって反省して下さるのだ」、などと、堂々と説く人が居たとすれば、これは宇宙の秩序への挑戦であり、破壊行為であり、とんでもないことです。

●時には、裁きも必要である

五井先生は愛の心から、自分を責め、人を裁くことを極力避けようとされていた事を私は知っています。五井先生ご自身は周囲に対しては、常にこのような姿勢を貫いたのだと、私は信じていて尊敬しています。この姿勢を私は理解し、大切にしたいと思っています。しかし、私はこれだけでは済まない場面は多々あることを知っています。

そこで私の結論は、私も歳を重ねて現在に至れば、最近は周りに対して強い口調でも

のを言うことは殆ど無くなりました。五井先生のような姿勢を貫くことも出来る心境と年齢になりました。しかしそれは、これまでの蓄積から、自分の周囲にそういう環境を作り上げたからなのだと思います。それは、私にそれなりの権威が生まれているからだと思います。そういう私を理解する人達との関係が築けたからです。

しかし、自分の主宰する会や、自分の経営する会社から一步社会に飛び出て、社会と直接関わる場面では、人間の「負の側面」に対して直接対決しなければならない場面は、決して無く成りはしないのです。これが現実です。そしてこれが人間の実態です。

そしていいですか？、この場面に敢えて自ら身を置いているのが、3人目の**使徒**なのですよ。

ですから、人間の「負の側面」を無視すると言うことは、責任ある場面では不可能なのです。だから、もしどこかに「反省しなくても良い」とする人が居たら、それは根本的に間違っているのです。

責任ある現実社会の中では、誠実さが要求されますから、いつもはにこやかに話していても、ある場面では当然・・・それはしばしば有ることはありませんが、それが滅多に起きない場面でも、それは重要場面です。その時には、叱責する必要も出てきます。相手に強く反省を迫る場面もあります。そしてもちろん、こちらの間違いを指摘される場面もあります。こちらが責められる場面もあります。自らが反省しなければならない場面もあります。その反省を五井先生に代わってもらうわけにはいきません。

人間の優しさの面だけでは越えられない場面は多々あるのです。それを見失わないために、私は今でも、現実社会から逃げずに、その中にすっぽり身を置いているのです。

そこでは、誠実さを貫こうとする故に、人を裁くことも当然必要なのです。

そして当然、責められることも、裁かれることもあります。私はそれを受け入れています。ですから、「私は絶対に間違いを犯さない人間である」とは、決して言わないようにしています。

ですから、必要があつて、一瞬強く裁くことは理にかなっています。目的が責めや裁きにあるのではないのですから、ベクトル昇華を一瞬で行う重要場面では、これは当然肯定されます。一瞬の責めや裁きは、大きな清めの作用です。わざわざ忠告する相手に、「私はあなたを責めているのではない、思いやっているのだ」等と、言い訳する必要も無いのです。そんなことを言っていると、ますます、付け入られますよ。

滅多に無い場面ですが、人生の岐路における重要場面、特に、生きるか死ぬかの場面では、そして生かすか殺すかの場面では、責めることも裁くことも恐れてはいけません。もし、このような重要場面での、責めや裁きを否定的に批判したりすると、これは宇宙の秩序の破壊行為になり、天に唾する行為になりますから、十分気をつけなければなりません。

しかし一般には、日頃は反省深い人が、自明行を深めている人が、限定された場面でのみ、それをすべきでしょう。そしてこれは、全肯定の教えに、メリハリを付けてくれます。そして、だからこそ、この「負の側面」の取り扱いには、自明行を深めている人

による、実に微妙なバランスをとった慎重さと、十分に練りに練った方法論と、知性が必要なのですよ。

これは一般論ですが、世界的に、そして歴史的に、宗教組織となると信者を増やし、人を組織に留めておかなければならないから、わざわざ面と向かって、相手の「負の側面」を直接扱うことは避けがちになりますね。もしそこを徹底しようとする、自らの「負の側面」を見る勇気を持った人しか、残らなくなりますね。

最も本質的な組織を作ろうとして、人間の「負の側面」を逃げずに直視する手法を取り入れれば、会に同好会的な面を期待して入会した人は、たちまち逃げていくでしょう。そして自分を見つめられる人達だけが、残ることになるでしょう。そこに会費を払ってでも、自分の「負の側面」を解決したいと願う人だけが、集まることになるでしょう。この人達は本物ですね。

しかし、これではなかなか組織として一気に大きくなることは不可能ですね。しかし、それでも良いのですよ。量より質なのです。このような人達が大きく活躍する社会になれば、恒久平和の礎が出来たと言えるでしょうね。

私は100年先を見て組織を作っているのです。これで良いのです。

私は社会的に仕事を持ちながら、こうやって、一人一人をキッチリ成長させようと思っ

てやっているから、これ以上なかなか人を増やせないんだ。ちゃんと仕上げようと思うと、はっきり言って、今はこのくらい的人数が限度なんです。

●人間の「負の側面」を直視する

歴史的に見れば、そこで何とか「負の側面」を、人間から切り離そうとして、神と悪魔の対立を持ち込んで、悪いのは自分ではなくて悪魔のせいだというと、自分が神の側で、お前の方が悪魔の側だとなり、綱引きが始まるんです。結局、神と悪魔の境界が分からなくなり、自分の都合で線引きすることに成り、自分に都合の良い神と自分に都合の良い悪魔の対立構造になっちゃうんですね。

そこで最終的に神と悪魔の対立を無くそうとして、究極の一元論的な論理を持ち込んでみるのですが、それでも人間の「負の側面」はなくなるから、結局、肺の病気は、「ハイ、ハイ」と言わないからだというような事になる。・・・でもですよ、本当にハイハイ言わないから肺の病気になっただなんて、そんなことまともに信じる人が居るのでしょうかね。私は不思議に思いますね・・・。「ハイハイ」と言わないから肺の病気になる、これを本気で信じているんだらうか？ そういうことが本当に言われているとするなら、驚きです。

そういう風な解釈の「心の法則」で、人間の「負の側面」を扱ってしまうと、そこにまた別な困難な、現実とかけ離れた、異常な世界を作ってしまうのですね。

しかしもし、その解析が本当に正しいなら、確かに原因を特定できて、プラスの面も

十分有ると思いますよ。それは私でも苦の原因を特定できるなら、・・・と言ってもそれは本質ではない、現象面の原因ですが、それを知りたいとは思いますがね。しかし、多くの場合、解釈も沢山出てきて、解析は複雑に成り、複雑になれば解釈はご都合主義に流れて、それで結局、又人は自分に都合の良い解釈しかなくなり、事態は混乱し、却って苦しんでしまうわけなんです。

現代精神科学もさらに進歩すれば、大いに役立つかも知れません。ハイハイ言わないから・・・というのではなく、苦の正しい原因が本当に分かる時代が来れば、それはそれで良いことであり、歓迎すべきです。

今のところ、空の無い精神科学は断片の分析と断片の寄せ集めの解析のようで、まだまだ全体を論ずるのは無理ですし、扱う人の問題もあり、そこには裁いてしまう危険も有り、まだまだ主流にはなり得ないと思います。

その意味では、私は「心の法則」も、一つの方法論として位置付けし、完全否定はしません。「空」の認識に立つ未来の精神科学に大いに期待しています。

そこで私は、谷口先生の「心の法則」も、将来的にという条件付きで、肯定して受け入れたいと思います。現象面であっても、真の原因を知るとはとても重要だからです。将来的には、「神の愛の導き」という絶対普遍の「空」からみた本質を取り入れた、完全な個人の「心のカルテ」を書けるまでになることを期待しています。その時は科学として、しかも、絶対普遍の「空」を中心とした精神科学として、人間の「負の側面」を扱えるときですからね。

そこで私は、精神科学が追いついてくるまでは、とことん、この人間の「負の側面」を直視しつつ、単純化して、私なりの解決策を示したわけなのです。一旦、その「負の側面」を正面に見据えて、それをベクトル昇華だとする方法を考えたのです。原因追及も複雑な精神分析に陥らないように、徹底的に単純化し、嘘発見という単純作業に一本化したのですよ。それが一番楽だし、ごまかしが入らないから、これは良いと思うね。

そのためには、人間の「負の側面」を逃げずに一旦正しく正面から見据えて、位置づける必要があるのです。最終的に、それが良いことになっていくんだから安心して出来るわけです。全ては神の愛の導きの中での出来事ですから、良くなるに決まっているのです。そういう希望が持てるのです。決して、消えてゆくだけの話ではないのです。このように全肯定で捉えるということはすばらしいことなのです。

●自らの修行により、独自の世界を築いていく

話を、私が最後の希望を持って、白光真宏会に係わっていた最終場面に戻しますよ。

白光に在籍していた時の私は、五井先生の教えを教材として、守護の神霊に直接指導頂いている、霊修行中でありました。当然その事は五井先生に直接伝え、五井先生からは、白光に籍を置いて霊修行を続けることにお墨付きを頂き、その後五井先生に何度かお会いしたときにも、その報告をしつつ、時々には指導を受けているという関係だったのです。

ですから、自らの霊修行であっても、白光の教義に則って、「人間は本来、・・・守護

霊守護神によって守られているものである」とする視点を基本とし、その下に「赦しへの導入」としての「消えてゆく姿」が存在する、との見解を持っていました。当時は、私のこの見解に納得する白光の人達も多くいたのですね。

或る講師の人に話すと、ハッとしたように「確かに、そうだ。」と言うんだけど、でもそれは、本質を良く理解出来る幹部の人だからなのです。多くの方は、どうしても「赦しへの導入」だけでなく、「全体の基本的把握」についても「消えてゆく姿」でなければならないと言うわけですね。私が周囲を観察していて感じたことは、「消えてゆく姿」は「赦しへの導入」と「全体の基本的把握」との二面性を持っているために、区別が出来ずに混乱している人達も多くいた様に思います。この人達は「消えてゆく姿」の持つ二面性については、未だ気づいていない人達でした。

この私の見解に関しては、五井先生にはかなり前から手紙で伝えていました。

私にとっては「赦しへの導入」はそのまま「消えてゆく姿」で良いとしても、「全体の基本的把握」としては「消えてゆく姿」とする方が難しく、「全体の基本的把握」としては「神の愛の導き」の方がずっと簡単でした。

この見解こそ、教義そのままだし、納得できることでしたし、何よりもこの解釈が最も本質的であり、それ以外は本質からずれていると見えました。

当時の私は霊修行の渦中にありました。そして常に白光の教義に忠実に修行を重ねていったにもかかわらず、白光の見解とは異なる結果になってしまったわけです。

そこで、私の見解を示して、私は私のやり方で修行させて頂くことを五井先生には伝えていました。五井先生からは、既に述べたように、「それでも良いが、それは誰でも出来ることではない。上根の人しか出来ない。」との返事でした。この返事を私は五井先生に肯定して頂いたと理解しましたが、白光の中では、私の主張は文字面では、白光真宏会の文字面とは違うわけだから、その辺でも、会の人達から批判される材料になったと言えます。

まあ、ハッキリ言って、私の主張こそが教義に則っていて、最も本質であっても、本筋を見抜けない多くの人には、文字面が違うと言うことだけでも「生意気な奴だ」と思われたでしょう。

だけど本当は、いくらやり過ぎと思われても、どのように悪く思われても、これは教義の根幹に係わる重要場面ですからね。無視するわけにはいかないのです。

今から考えれば、ここが分岐点でした。そして、この私の見解が白光に受け入れられない限り、私が白光に居られないのは明らかでした。

私はそれを体を張ってやったわけです。結果的に、この場面は救世の大霊団の3人目の使徒が、2人目の使徒に訴えている場面なのです。ここが重要な所です。ここが重要な分かれ道です。お互い、体を張ってこれをやるのが誠実さなのです。互いの使命感からくる行動なのです。ここは2人目から3人目への権限委譲の直前の場面であると、今なら分かるのです。

ですから、世の中には、やり過ぎであれ、それをしなければならないことはあるのです。これは真理なんだから、そうすることが正しいのです。それをしなければ不誠実になるのです。ですからこれは犠牲的行為なのですね。その場に立たされたら、逃げずに、命をかけて、進退をかけて、それをするのが正しいのです。この場面そのものを「消えてゆく姿」として、済ましては居られないのですよ。

私は人をつかまえては、普遍性の話をしていましたが、私が熱心に話すものだから、私がそれを言えば、親しくしていた準講師や幹部の人は、一応それを理解はするのです。一旦は私の主張する、全体把握としての「神の愛の導き」や「独善性を排除して普遍性を取り戻せ」という主張を、よく理解してくれた人達も何人か、いたのです。しかし、私のその話が広がっていくと、そのことに組織として危機感を持ったと言うことは十分あったのだと思います。以前、良く理解していた人達までも、私の主張に対して、「でも、そこまでやる必要は無いよ。(独善があっても) 宗教とはこんな(程度の)ものだよ。」とか、「神の愛の導きというのでは困難が増してしまう」というような、良く意味の分からない反応に変わっていきました。私としては、教義にも書いてあるのだから、先ずは、最も本質で捉えることこそが重要だろう。そして、独善を抱えたまま、こんな程度でよいとして、済まして良いはずはないだろう。と私はとても憤慨したことを覚えています。私のように、この神の愛と、普遍性を貫く事に命をかける、進退をかける、などとは、とても理解は出来ない、と言うんだね。また、私に好意的な人でさえも、「岩根さんは、本当はすばらしい人なのに、なんでそんなつまらない事にこだわるのだろう。」という反応でしたね。もう、本当に話がかみ合っていないのに、何とか分かってもらおうと、私はあきらめずに、議論を挑むものですから、もう最後には「又、その話か。」と、いやな顔をされてしまいました。

●自明行が出来たから、普遍性の回復が出来た

私のように、独善と排他を嫌い、普遍的でなければならぬとするのは、私だけであることに、私は不思議で仕方有りませんでした。

敢えてその理由を考えてみれば、独善に浸っている人たちにとって、普遍性を回復することとは、独善から来る優越感を失うことであり、「世界一の座」が危うくなるからなのだと思います。折角ここまで育ててきた、選民意識を捨てなければならないという、危険を直感するからなのだと思います。

そして何よりも、普遍性を回復すれば、自らの持つ独善を排除するための、かなりの痛みを覚悟しなければならないからなのだ、と思われまます。

私だけにそれが出来たのは、自明行を開拓して、自らその痛みを越える方法を知っているから、なのだと思います。

多くの方は、そして多くの宗教は、自らの独善に気づき、それを排除することは、自分が傷つくと思っているのです。その事で、自らの立場を失うかも知れないと心配してしまうのです。自分の存在価値が無くなるかも知れないと、心配するのです。そのことで、自分が傷つくのを本能的に避けているのでしょね。だから、最初の段階で、独善

に気づくことから逃げているのですよ。自らの独善に対して、認めないようにしているのですよ。白光真宏会もその例のご多分に漏れないのですね。

私は自明行によって、自ら独善を排除してきたから、普遍性の回復が出来たのだと思います。その意味で、自明行と普遍性の回復とは密接な関係にあることが分かります。自明行が出来なければ、普遍性の回復は有り得ないということになりますね。

と言うことは、普遍性の回復は、やはり、私だから出来た、ということが言えますね。

自分の独善を守りたいと思っている人には、普遍性の回復は出来ないのです。私、以外の多くの人、そして多くの宗教は、自分の独善にも気づかないと言うことですね。中には、気づかない振りをしている場合もありますね。そのためには知性を眠らせる必要があるのです。こうしてみると、これからの人類にとって、自明行が如何に重要か、が分かります。

普遍性を回復していれば、宇宙の中に、自らを正しく位置づけようとし、周りを、そして世の中を肯定してみようとし、そしてその上で、それでも普遍性に反することは否定せざるを得ません。そこには自ずからそのまま肯定できることと、否定せざるを得ないことが出てきます。この場合の肯定と否定は絶対普遍の価値体系に沿った判断となるのです。

しかし一方、自明行が無く、普遍性の無い状態で肯定をしようと思うと、独善の世界に都合良く世の中を見て、自らの独善にとって都合良く世の中を肯定し、或いは否定してしまうのです。独善にとって都合が良ければ、普遍性など関係なく、何でも取り込みます。独善にとっての肯定と否定は、普遍性からの判断とは全く違うのです。一致していたとしてもそれはたまたまなのです。ですから、独善の世界において、周りを肯定したとすれば、それは間違いなのです。同じ事を同じように肯定したとしても、それは全く違うのです。ましてや、否定したのだとすれば、それはもう、全くもって、根本から違うのです。

世の中で私だけが、独善を問題視し、普遍性の回復を重要視し、自明行によって、それを実践していることに、次第に使命感を感じていったのだと思います。

こうしてみると、明らかに3人目の**使徒**のすることは常に本質を突いていましたね。

私は心の底から突き上げてくる、この普遍性を貫こうとする気持ちは、決して揺るぐことはなく、何があっても微動だにしないものでしたね。

そしてそれがそのまま、今に至っています。そして、当然今に至っても、世界平和とはこの独善を排し、排他性を無くし、普遍性を回復する以外に、有り得ないと思っています。平和を語っても、愛を語っても、独善の中にいれば、その根底には嘘があるので。それはまあ、真実では無いが、たまたまその方向が絶対普遍性に合っているだけの話ですね。真実と同じ顔をしていても、その嘘はやはり嘘なのであり、自明行によって発見されなければならない嘘なのです。

結果的に、自明行が無ければ、普遍性を回復していなければ、世界の恒久平和は実現

できないということになります。

私にとっては、天命啓示が有ろうと無かろうと、五井先生は救世の大霊団から遣わされた方であり、世界平和の中心者として位置づけていたために、五井先生の教えがどこまでも普遍的で、最高のものであって欲しい、否そうでなければならない、との思いから、私はそうしたのです。今振り返っても、私はこれで良かったのだと思いますよ。

このような私の主張と行動は白光の会員はもちろん、幹部にも全く理解出来ない事だったのでしょうね。私はそれも承知の上です。白光の会員は只、「五井先生、五井先生」と有り難がっているだけで、世界平和を言いながら、結局は個の救われに限定していて、そこに世界平和の中心者としての本当の五井先生の姿を実質見てはいないのです。この人達は、ますます独善的になっていくことに、どんどん普遍性を失っていくことに、何の疑問も持たないのです。

しかし、私だけは、常に五井先生を正しく見ているのだとの自負がありました。五井先生が一宗教団体の教祖に過ぎないのであれば、当然私の行動を拒否するでしょうが、五井先生が自ら仰っているように、本当に世界平和の中心者であれば、この肝心要の重要場面では、最も本質の所で捉えるはずですから、私の主張は当然のこととして受け入れられる筈だと、私は考えていました。私は五井先生ご自身よりも、ある面では五井先生を正しく位置づけていたと言えますね。

それはまったく正しいのです。五井先生の教えが、生長の家 of 修正に留まらず、五井先生の教えに普遍性を回復させ、世界に普及させるためには、「消えてゆく姿」と、「神の愛の導き」との二重構造が必要で有り、こうすることが必然で有り、教義から言っても、そうすべきであると、私は考えていましたね。

●無謬性の自縄自縛から解放されなければならない

私も若かったから、行動力があつた。そしてその時私は霊修行中だったから、それが守護神の主旨であるとして、どこでもここでも、怖いもの知らずでそういうことをやっただけです。自らの進退をかけて、真理をどこまでも貫こうとしたのです。

もし、あの時、あの場面で、あの仲介者が私の気持ちを正しく五井先生に伝えてくれていたとするなら、結果はどうなっていたかわかりませんが、それを期待するのはそもそも無理というものでしょう。そのような人の配置にこそ意味があると理解すべきです。ここには、その人の配置にこそ、大きな意味があると理解すべきです。これは「消えてゆく姿」ではなく、宇宙の完全性の中で理解すべきです。

そして五井先生が亡くなられて、向こうの世界からご覧になって、はじめて私の悟りの深さを心底理解されたのだと思いますよ。

私はこの時、五井先生であっても、肉体を持つ限りには、その悟りの無謬性には限界があるのだと言うことを知りました。

師の無謬性が崩れたことは、3人目の私の悟りが、2人目の五井先生の悟りを、ある面で超えたときに発生したことですね。これは特殊な場面です。しかしながら、このよ

うに自らの悟りを、ある面で越える場合には、無謬性が崩れることはあり得ると言うことなのです。

この時の体験は私にとってはとても役に立ちましたね。以後、自らの無謬性を主張するときにも、その限界を知って発言し、慎重に行動するようになりました。

これは歴史的にも重大な問題ですね。無謬性というものがどこまでも有効であると思っているから、宗教は過去を変更できないし、互いに理解し合えないし、分裂しか、ないのですね。愛を説き、調和を説きながら、世界の平和を説きながら、自分だけは間違いを犯さないとするから、調和が出来ないのです。無謬性が有るから、改良が出来なくなり、対立だけが目立ち、調和が出来なくて、常に分裂してしまうのですね。

無謬性を信じるから問題が発生するのです。無謬性については、限界が有ることを知らなければ、宗教が最後まで「不調和」な存在として残りますよ。無謬性については別の機会に詳しく述べたいと思っていますが、悟りにおいては、空に一致する本来の所では無謬性が有っても、それを制限の多いこの世界に投影するとき、情報は大きく失われ、無謬性は必ず崩れるのです。これは原理的なものです。心配せずに肝心要の場面では無謬性も捨てなければならぬのです。

ですから、私の説いた道であっても、実践していく中で、細かく対応するための部分の改良は必要と思います。ただし、その時には理念が共有されていることを確認するために、十分な手続きと、そのための時間を掛ける必要があります。安易に変更すべきではありません。私が五井先生の教えに対して、その見本を示していますから、それにならして下さい。

教祖さまはいつも偉いから、決して間違いをしないという偉いところで、ものを言わなければならないから、それが出来ないのでしょうか。自縄自縛とはこのことです。

私は宗教は嫌いだ、教祖には絶対に成らないといつも言っていますが、これも一つの理由ですね。学者スタイルで行けば、いつでも修正や改良ができますからね。こちらが真理なのです。悟りというものは固定したものではなく、次第に深まっていくものなのです。そうすれば初期の悟りの表現は修正したい面も必ず出てくるのです。

そこで、もし修正したときに、それに弟子達がついて行けないと不幸なことになります。そこでついて行ける人と行けない人とで、組織は分裂してしまいますね。ですから、最初から自らの無謬性に制限を掛けておけば良いのです。私はそのようにしていますよ。

さて、私が会を離れ、形の上で、五井先生に拒否されたようになってしまったのですが、しかし、それであったからこそ、その流れの中で、五井先生は亡くなられて直ぐに、私の所に来て、自らの発言を訂正しようとして下さったんですよ。五井先生の霊界移行に当たっては、私に会って、幾つかの伝言をすることが、最優先のことだったと言えますね。

そして私の考えの正しさを心底認め、さらに私の当時の活動を全面的に肯定して下さい

り、しかもご自分の後継者であることを私に直接伝えたのです。

天命啓示との一致から判断すれば、救世の大霊団としては、最初からそこまで計画済みだったと見えてきますね。

五井先生は最大重要な場面で無謬性を捨てて、正しく判断されたのだと思います。ですから、五井先生の復活の意味としては、ここで示した以外の解釈はあり得ないのです。

五井先生は、特別の生命エネルギーを使って私の所まで来て復活されて、私の説いた教えと行動を肯定してくださって、さらにご自分の後継者であることを告げられたわけですからね。これはすごいことです。私は有り難く受け取っています。

第五章 空白の過去を埋める

天命啓示を受諾して、初めて分かることがあります。

昨日、長い間封印してきた、五井先生の復活時の伝言の謎が解けたことで、第二の天命啓示の意味が明らかになりました。もうこれで、五井先生との関係が明確に成り、これからは2人の関係のどんな質問にも、やっと答えられますね。

今日は岩根先生と五井先生との関係を集中的に話していますが、この件は、今日までは全く話したことは無かったことですからね。これまでは、この二人の位置づけが成されていなかったの、出来なかったのです。これからは、五井先生との「共通点」と同時に「差違」をも明確にすることになります。

ところで、今日ここに封印を解くということは、結果として白光真宏会にとって不都合な真実について、幾つも公表することに成るのです。

これまで触れてこなかった私の空白の過去を埋めるためには、当然、白光との係わりに触れなければ成りません。それは結果として彼らに不都合なことを語ることに成ります。これらが彼らにとって、公表されたくないことだからこそ、私は34年間も封印を続けたのです。

しかし、時は至り、私は五井先生との関係について多くを語らなければならない時が来たのだと考えております。私は、五井先生の天命と、白光の働きとを切り離すことで、白光の問題にはできるだけ触れないようにしたいと思いますが、私が係わってきた関係上、そして、五井先生の憂いを思うとき、果たしてそうなるのかどうかは、書いてみなければわかりません。

本日、私が救世の大霊団から地上に使わされた3人目の**使徒**であることを宣言することになりました。そのことで、3人目の**使徒**としての立場が明確に成り、岩根先生の宇宙の中での立場が確立したことになります。

長い間封印してきたことから、34年の空白を急いで埋めなければ成りません。

私は、これから暫く、この空白を埋めて、3人目の立場を確立することに傾注します。

●本来の「後継者」の意味は救世の大霊団の使徒としての後継者である

五井先生の後継者の意味には二つあります。教団の後継者という意味と、救世の大霊団の**使徒**という意味との、二つです。

もちろん、ここでの受諾の意味は、救世の大霊団から遣わされた地上の受け皿として、3人目の**使徒**としての、後継者の意味と理解して、受け取ったわけです。

そして昨日この場で、私が救世の大霊団の3人目の**使徒**であると明言したことから、私としては、救世の大霊団の**使徒**としての責任を果していくことになります。

ところが、3人目の**使徒**の立場に立って振り返って見ると、白光との係わりを無視したままでは先に進めず、しかも未だ、白光真宏会の後継者としての意味が否定されたわけではなく、このまま、教団の後継者問題を無視することはできないと思えてきます。そこで今暫くは、この問題を先送りにしたまま、進んでいくことになります。

ここで、五井先生復活による私への伝言「あなたが私の後継ぎです」をその年代から〔五井先生伝言80〕と呼称することにします。

当時、あの時の、五井先生から伝わってきたもう一つのメッセージは白光真宏会の問題なのだと私は考えるに至りました。何故に、五井先生がそうまでして、白光の組織の憂いを私に伝えたのが最も重要な問題なのだと思います。ですから、白光真宏会が変われば、この問題は解消されると思っています。

そこで私としては、救世の大霊団の**使徒**としての後継者であることを受諾し、もう一つの教団への係わりは今暫く先延ばしにしておくことで、その間に白光真宏会側が正しく問題意識を持って、変わってくれることで、自らの努力で解決してくれることを期待しています。

そこで、先ず3人目の**使徒**である私の活動は、私の立場を外に向かって公にすることから手がけなければなりません。

●生前の五井先生の重要発言

ここに私が3人目の**使徒**として、五井先生の後継者であると決まってしまうと、五井先生は亡くなる前から、私に幾つかの示唆深いことを仰っていたな、と思います。振り返ってみれば、私が後継者だということを、幾つかの機会で、確かに私に対して、そして周りにも聞こえるように、示していたことをここに思い出すことができます。その場面は、実質それは私を示しているのだろうと思えても、明確に名指しされたわけではなかったため、私自身はそれをそのまま受け入れることは避けていました。本当に「後継者」となる時が来れば、正式に通達戴けるものと思ひ、その言葉が有り難いとは思っても、それをそのまま事実として、自分が後継者として受け入れることは決してしませんでした。

そして、本当に、それは思いがけないときに、とても想像できない形で、キッチリ名指しされて、私が後継者となることを五井先生から直接的に通達を戴けることになったのは、ご承知の通りです。

ここで「後継者」の意味をもう少し考えてみたいと思います。

五井先生を経由しないで、直接岩根先生に繋がっている人にとっては、今更どうでも良いことかも知れませんが、ここは岩根先生の働きの、宇宙の中での位置づけとして、一度は理解しておいて下さい。

1980年のあのときに、私に何の心の準備もなく、五井先生復活が成され、跡継ぎを伝達されたとすれば、私は別の意味で、もっと躊躇があったと思います。その心の準備についても、緻密に計画されていたことを書いておきます。

まず、それは1972年のことでした。白光真宏会での、大きなイベントとして私も参加した、五井先生直下の、宇宙子科学の行事として、富士登山がありました。その時、登山口の富士吉田の浅間神社まで五井先生は来られたのですが、そこで大きな杉の木の下に腰を下ろしていた五井先生は、その前を通り過ぎようとしていた、私の目を見つめて、「ほう！後継ぎは決まってるなあ」と仰ったのでした。五井先生の周りには数人の補佐の人がいましたから、その発言は絶対に聞いていたはずです。

私に投げかけた重要な言葉として思い出されますね。しかし、その時に五井先生の目と私の目が合ったことをもって、私が五井先生の後継者に決まった、としてはならないし、私は、その言葉を歩きながら、歩く速度を変えることもなく、一瞬の出来事として聞いていたのです。五井先生がそう仰ったことは確かに事実ですから、その「発言の事実」だけを確かな出来事として、心に仕舞っていました。このような出来事は私の心に十分に深く、刻み込まれていったのだと思います。

そして実は、この出来事には伏線があるのです。

それこそは決して忘れられない、そして忘れてはいけない最も重要と思われる出来事がありました。それは私の記憶では、その1972年の富士登山の何ヶ月か前だったと思うんだけど。

その頃に全国支部長会議があって、私は当時札幌支部長をやっていたので、市川の聖ヶ丘道場での全国支部長会議に出席していました。そこには全国から地域の支部長とか講師とかが集まって、総勢50人くらいで五井先生のお話を聞く機会があったのです。

このときに五井先生がいろいろお話しされた最後に、「質問ある人は居ませんか？」と仰ったのです。そこで真っ先に「ハイ」と手を上げて質問したのが、山形県、上ノ山市の支部長の松村さんと言う方で、当時四十代位のお坊さんでした。私は後日、この方を山形県上山市のお寺まで訪ねていったことがあるので、よくおぼえているのです。その松村さんが五井先生に以下のような質問をしたんです。

このときも、昌美先生はいつものように、五井先生の横に坐って居られました。松村さんはその昌美先生が、当然五井先生の後継ぎであるという前提で、「昌美先生の代になっての、白光の未来はどのような姿なのでしょう」と質問したんです。

その松村さんの質問に対する五井先生のその時の回答が、「いや、昌美は私の後継ぎではありません。」との発言でした。それが五井先生の直接のお答えでした。誰もが昌美先生が五井先生の後継ぎで、それ以外は考えられないと思っていたのは当然です。もちろん私もそう思っていました。一同はこのお言葉を、かなりの衝撃的発言として受け取りました。みんなは、「エッ、そんな事って有るの？」と仰って、皆で顔を見合わせた感じで、とてもビックリしたのです。そしてほんのチョット間をおいて、続いて五井先生は「後継ぎはこの中から出てきます」と仰ったのです。「えっ」、それはまたまたびっくりで、この中って言えば・・・、それが今ここに集まっている人達だとすれば、かなり限られているよね。皆、それにも大いに驚いたのです。これには私もビックリしました

ね。「へえ、昌美先生ではなく、この中から跡継ぎが出るんだ」と皆驚いたはずですよ。

そしてその時「ヒョッとして、それは自分かも知れない」との、不純な思いを多くの人が出したと思います。私はそれ以前から、神霊の指導で常々修行をしていましたから、そのようなことを言われても、「かも知れない」では決してここを動かさない訓練をしていたので、心を静かにして、その五井先生の発言を聞いていました。

その質問した松村さんの横顔を私は今でもはっきり憶えています。

記憶を辿れば、このようなことが有って、その直後の富士山浅間神社の杉の木の下の話に続くのでした。

今その時を振り返って、この時点の「後継ぎ」という意味は、救世の大霊団の跡継ぎと、白光の組織の跡継ぎと、それを切り離して考える人は居ませんでした。

このとき、五井先生は後継者の意味を切り離さずに、両者の意味として仰っているのに、現時点で、私が勝手に切り離して受け取ろうとしているだけなのかもしれません。しかしながら、この時点は五井先生存命期間ですから、当然それは救世の大霊団と白光組織と、その両方を意味していると受け取るのが、自然な流れかと思います。そして今は、周囲の状況から、切り離して考えることができれば、白光にとっては、その方が負担が少ないと考えています。ただし、これを敢えて切り離さないで一体として考えるべきだという考えも十分あり得ることとして、次に進みます。

そして、ここにはもう一つとても重大なメッセージが存在します。それは、昌美先生は後継者ではないと五井先生が断言したという事実です。

後継ぎの意味を、両者で同じと考えても、分離して考えても、昌美先生はどちらの場合であっても、五井先生の後継者ではない、という意味になります。

その事実がありながら、昌美先生が白光の2代目として、つまり五井先生の後継者として活動しているという構図がここにあるのです。宗教活動は今更、と思っている私にとっては、それで何も困ることは無いのですが、白光の組織と昌美先生にとって、本当にそれで良いかどうか、そこが問題ですね。この点で、白光存立の合理性が大きく揺らいでいるということです。今の白光の存在が、五井先生のご意向に沿っていないとするならば、これは重大なことと考えるなければなりません。

余計なお世話と言われそうなことですが、そして宗教は嫌いだといっている私にとっても、いまさらそんなことということなのですが、五井先生の意向を考えると、どうしても、白光はここに大きな問題点を抱えていると言わざるを得ないと思います。その点をぼかしたままの組織運営では、ウソの上塗りをしなければならず、苦痛に満ちたものとなってしまいうでしょう。

私が白光に係わらなくて良いのであれば、今更どうでも良いことなのですが、後継者となった私が、五井先生との関係をここまで密に回復して置きながら、一方その教えを行じている筈の、白光をこの状態のまま無視し続けるというのも、私としては、なかなか難しいものがあります。私としては、無視するのではなく、問題提起と、その解決のための方向性を示し、そのための入り口を開けておく必要があると思って、いま話して

います。

五井先生との関係を取り戻した今の私から見て、「昌美は後継者ではありません」との五井先生の発言は、実に重い言葉で、とても重要な真実に見えてくるのです。

私に限らず、五井先生に忠実であろうとするなら、後継者の意味がどちらであれ、「昌美は後継ぎでない」と仰った五井先生の言葉は、とてもとても重要な事として、心に響きますね。まあ、ここしばらくは、私自身としては、昌美先生にはあまり触れずに、救世の大霊団の後継者のみで進みたいと思っています。

1972年のこの出来事は、そこに出席していた幹部全員が知っているはずですが、この場に居た人達は、誰もこんな重大な内容の話の聞き逃したり、忘れたりするはずがありません。この場に居た人達は、各地の支部長と講師の先生達です。当時私は若い世代でしたから、今では、私と同じ年代の人から上の世代の、かなり年配の人になってしまいましたけれどもね。

五井先生のこの発言は、とても重大な発言です。白光にとって大きな節目となる発言であり、忘れてはいけない出来事です。でも今は、それはもうなかった事になっているみたいですね。誰も聞かなかったこととして、進んでいるのでしょうか。誰もそのことには触れないんですね。これは決定的な五井先生の公式な言葉であるにも係わらずですよ。

この重要な五井先生の発言に従わないことは、五井先生に対する最大の裏切り行為ではないのでしょうか。白光は、何か、そこで時間が止まっているように見えます。

この時の五井先生の伝言「昌美は、私の後継ぎではありません」と、「後継ぎはこの中から出てきます」とは、その年代から、以下、[五井先生伝言72]と呼称することにします。

ところで、ここに示した[五井先生伝言72]と、先に示した[五井先生伝言80]とは無関係であるはずがありません。両者を並べて見れば、両者に密接な関係があることは明らかです。救世の大霊団の意図がここに十分に凝縮されていると見えてきます。ここには、重要な宇宙的な意味があると考えなければなりません。

ここまで来てみると、私には、30年の修行を積み重ねた普遍性を回復する道があり、そのための自明行の道があり、さらに現実理解から全肯定に至る本質理解までを説いて、それを元に般若心経を解説し、人類恒久平和への道を示し続けているという実績があります。これに加えて霊修行の中でのいくつかの天命啓示があり、[五井先生伝言72]を経て、最後に[五井先生伝言80]を決定的出来事として関連づけられています。ここまで並べられれば、いくら控えめに考えても、私が五井先生の後継者とすることに十分な合理性がありますし、もしこれでも受け入れないとするならば、失礼に当たるという段階に来ていると思います。そこで、私はやっと救世の大霊団の3人目の使徒であることを、そして同時に、五井先生の後継者であることを、もうこれ以上は逃げずに、正々堂々と、正面から受け取ることにしたのです。

ところで、これが白光の教団の後継者となると、なかなかすっきりとは行かず、拒否はしませんが、さらに知恵を出すところだろうと思っています。そこで、時間が経った今となつては、五井先生のご意志をねじ曲げずに、岩根先生を正式な跡継ぎとした上で、その前提で、3人目の**使徒**の力を借りて、昌美先生が正当な白光の後継者となる道筋を探してみることも良いのではないかと思います。

ただし、白光の後継者については、教えの継続性という思想的なことを問題にしているのであり、法律的に組織の後継者が昌美先生とすることには、五井先生の意向に反しているとは、私は考えていません。

ここで重大なことは、あくまで教えの継承者として、五井先生の跡継ぎとは信者の納得ではなく、組織の都合でもなく、五井先生の意向という観点からのみ、考えるべきです。それが本筋であつて、誰がどんなに反対しても、五井先生の意向以外で決めることがあつては成らないのです。

●白光の問題を無視できなくなった

この、第16回洞爺研修会という場を通して、昨日私が3人目の**使徒**であることを受諾しました。

そして3人目の**使徒**を自覚した私の最初の仕事として、これまで封印してきた、以前の五井先生の発言と、五井先生の復活時の「メッセージ」をここに公表したのです。そしてこの公表は私の義務でもあります。そしてもちろん、そうすることが救世の大霊団の意志なのです。このことで岩根先生の立場を明らかにすることです。

ところで、私が問題提起した白光の問題を解決するのは私ではなく、当事者の白光自身です。しかしもし、協力依頼があれば、私は喜んで協力しますが、現段階では、3人目の**使徒**の私がするのは問題提起と五井先生の伝言を公表することまででしょうね。後は、白光自身がそれを正面から捉えるか、無視するか、それは白光の自由な選択です。わざわざ、こちらから責任追及したりするつもりはありません。私は五井先生からの伝言を受けた立場として、その義務を果たそうとしているのです。それが私のスタンスです。

私には、どうしても宗教が肌に合わないモノが有り、これまでは、白光の後継者問題には関心がありませんでした。しかし、今となつては、ただただ、五井先生のご意志がどこにあるのか、それだけが重要だと思っています。

ここでもし、白光真宏会が私の問題提起を受け入れない場合には、結局何も変わらないと言うことでしょうね。それならそれで、それは白光の選択として、これ以上、私は係わらないことにします。そうならなければ、本当のところは分かりませんが、ここで深追いしたり、さらに追及する気持ちは全くありません。私は与えられた義務を果たしたいと思っているだけなのですから。

そして、このときこの文書は、後世の人にその真実を記録して残しておくための資料ということで良いのだと思います。

●白光にとっての「神の愛の導き」

[五井先生伝言72]とともに、[五井先生伝言80]という事実は、現在の白光真宏会の関係者にとっては、その存続意義を根底からひっくり返されるほどの致命的な事であり、最も都合の悪いことです。でも本当は、これは白光真宏会にとっての「神の愛の導き」なのです。「自らを宇宙の中で正しく位置づけして、本来の姿に戻りなさい」という意味なのです。それに使命を受けた私が協力しないわけがないのですから。それが、分からない人には「不都合」と見えるだけの話です。

この白光真宏会にとっての「不都合な真実」は「神の愛の導き」として、与えられたものであり、正面から向かい合って解決しなければならない事を意味しています。白光は根底から生まれ変わらなければならないことを意味しているのです。今こそその時なのです。そして、生まれ変わるのに遅すぎると言うことはないのです。白光が私を明確に拒絶しない限り、祈りと共に働きかけを続けていきます。

ここで、[五井先生伝言72]を認めることは、しかも同時に[五井先生伝言80]を認めることは、白光真宏会にとって勇気が要ることだと思います。

この二つの重要な事実が、三十年もたってから、3人目の**使徒**の私によってクローズアップされていることに意味がありますね。昨日のことも含めて、何十年にも亘って、このような決定的に重要な幾つかの場面に、たまたま私が居合わせていた、ということも、救世の大霊団のスケールの大きさと、大きな導きを感じますね。ここには重要な、宇宙の意味が象徴的に現れていると考えなければなりません。そしてここに、2人目の**使徒**の重要なメッセージが込められていると考えなければなりません。

●知性の無い人の妄想にはつきあうな

ここまでは、白光の人達は、私の存在を無視することで、この「不都合な真実」から逃れようとしてきたのですからね。

ですから、これらのことを白光真宏会の人に言っても決して受け入れませんでしたね。

このことですが、よく覚えておいてください。知性を眠らせている人には、信じたくないことは信じないという、特技があるのです。宗教とはそのようなことを平気でやるのです。私が宗教は嫌いだという理由も、このようなところにも有るのですよ。

もし知性があれば、それを否定するためにも、その「不都合な真実」を調査して、否定の理由を探そうとすると思うのですがね。

宗教法人も一つの事業だと割り切るならいざ知らず、神を語り、自らを神の**使徒**というからには、これらの不合理を拒否するだけの知性と誠実さが常に求められるのです。

私は、五井先生の復活の事実を直ぐに昌美先生に手紙で伝えていましたが、昌美先生からは返事は来ませんでした。無視の姿勢でした。つまり、五井先生の復活を認めないという意味になります。当然この私を後継者とは認めないという意味になります。

これに私は特に驚きはしませんでした。五井先生の復活を受け入れることは、白光の根幹を揺るがすことですから、十分に予想は付いたことです。

その後、白光の関係者に、五井先生復活の事実を言うとイヤな顔をするんだよ。「も

し、復活が真実だとすれば、白光の組織体制の根幹に係わることだ」と直感するのでしょうかね。しかし、私が嘘を言う人間ではないという信用はあるようで、私が嘘を言っていると言う人は一人も居ませんでした。この事実を正面から受け入れることを避けようという姿勢でしたね。

ところで、最近になって耳にするには、この「五井先生の復活」の噂は流れているらしく、これを事実として受け入れている人も多少は居るようでした。

多くの関係者は、このような重大局面で、五井先生の意向に忠実であろうとするのではなく、無意識に自己保身と組織保全の方を最優先に選択している、と感じましたね。

何故ならもし、常々から五井先生の意向に忠実であろうとしているならば、先ず五井先生復活の真偽を確認しようとするはずですからね。これを無視するとは、五井先生の意向よりも、自己保身と組織維持を優先したと言うことです。これは無知がなせる、恐ろしい本末転倒ですよ。

この程度が世の中の宗教組織の実態であり、現実にはそれ以上のことを期待するのは無理だと言うことなのでしょうね。私が思うに、昌美先生は特別の霊能力の持ち主ですから、五井先生の復活は分かっているはずです。私とも何度も面識がありますから、私との関係において、[五井先生伝言80]が成されたことは十分に理解されていると思います。そして、[五井先生伝言72]の事も忘れていたはずはありません。

しかしこう書いていて、何もそこまでして昌美先生を問い詰める必要は無いのではないかと、昌美先生がどうしようと私の知ったことではないし、今、私が被害を受けているわけでもないし、私の活動が制約を受けているわけでもないのだから、放置してもよいのではないかと、という気持ちにも時々なってしまうのです。

しかし、書いてみると、どうしてもあの復活時の五井先生の思いを大事にしたいという所に行き着き、真実を整理しておきたいと考えてしまい、このような表現になってしまいます。

まあ、組織活動にはこのようなことがつきものだと言うことも、後世の人に伝えることは、同じ轍を踏まないためにも必要なこととして、敢えて書いておきます。

●白光はもっと知性的であってほしい

そこで34年ぶりに、私がいくつかの真実を公表したことで、五井先生の意向が明らかになったのですから、この事実を受け入れるのか、否定するのか、態度を明らかにして欲しいと思います。そして、願わくば白光の関係者はもう一度、白光の組織の後継者は誰なのか、白光はどうあるべきなのかを、五井先生の意向を中心にして考え、調査してみたら良いと思うのです。

ここに私が公表した五井先生の発言を総合して判断して、五井先生の発言に合致するためには、白光が今後どうあるべきかを白光関係者自身で、よく考えてみて欲しいと思います。

このように調査をするのが、知性的な態度だと思いますよ。このような知性的な態度こそ真実に近づけるのですよ。五井先生の気持ちを一番大切にすれば、そのようにするのが当然と思うのです。

折角ですから、知性の無い人の例を示しましょう。

さらにそこから数年後になりますが、私の著書で五井先生復活に触れた部分を捉えて、私の前に現れた復活の五井先生を「幽界の生物」だ、と決めつけた人も居ましたね。そこは2チャンネルという品の悪いサイトの中でした。

そこには、岩根は五井先生復活と、その伝言の跡継ぎ依頼をでっち上げ、さらにその跡継ぎの依頼を断ることで、自分を偉く見せているのだというのです。すごいストーリーを考えつくモノです。そこで私は、この「幽界の生物」と言った張本人に対して、私は直接サイトに書き込んで、その理由を尋ね、その後メールで五井先生の復活の状況を詳しく書いて、直接問いただしたのですよ。そしたら、「霊的なことは一旦「消えてゆく姿」とするのが正しい」、との肩すかしの回答でしたね。「消えてゆく姿」と「幽界の生物」を混同するとは、その無知ぶりにも驚きです。そして何よりも、五井先生に対して失礼にも程がある。

どうも「幽界の生物」説は避けているので、取り下げたようでも有りますが、これでは質問の回答に成っていないので、私は確認のために、再度メールをしました。

そこで、私は「一旦「消えてゆく姿」とすることと、「幽界の生物」と決めつけることとは、全く意味が違うだろう」と論理のすり替えと、その矛盾を突きました。そしてさらに私は、「それならイエスキリストの復活は「消えてゆく姿」なのか、それとも「幽界の生物」なのか」、と再質問して、再度メールをしました。以後連絡は来なくなりましたね。

その人達は元白光の信者の人で、独立して活動していて、自分達こそ五井先生の唯一の後継者と名乗る人であり、私が後継者では、この人達も困るのでしょうかね。

この人達のように、私は成りたくて後継者になっているのではないという点が重要ですね。敢えて、私の大切にしている普遍性を一部犠牲にしてまでも、私はそれを受け入れたのですからね。

私としては、私の説いた普遍性を強調するためには、私はどことの関係もなく、私がたった1人で開拓した道であるとするの方が、ずっと効果的なのであり、誰かの後継者であることは、私の独自性を一部失うことであり、しかしそれが事実だから受け入れられているのです。

この人達に比較して、この私は、決して勝手なストーリーを作らず、どこまでも知性的に考え、奇跡そのものの五井先生の復活とその時の伝言があっても、後継者との立場を、如何に慎重に扱い、これだけの時間をかけて、すべての条件が揃って、はじめて受け入れようとしているのです。この違いをよくよく比較してみてください。どちらが本物で、どちらが偽物かは火を見るより明らかでしょう。

宗教の世界の中では、いつも不思議な論理がまかり通っていて、多くの方は、このように非論理的で、自分に都合の良い勝手なストーリーを作り、真理に対しては実に不誠実です。「不都合な真実」を拒否するために、いろいろと物語を作ってまで、否定のための理由を考えだすのです。このように宗教の世界というのは、何でも想像でものを言える世界ですから気をつけてくださいね。都合の悪いことは、勝手な物語を作ってまで、

拒否することができる、そういう世界なのです。

自分の想像で作りに上げた、独善の世界を守るための自己防衛なのでしょうね。本当にもう知性の無い人間って、いつも自分に都合の良い物語を作っていて、それで神様神様言いながら、自分に都合が悪い事実は無視すると言う、とんでもない特技を持っている人達なのですから。ですから、知性のある人にとっては、とても近づきたくない世界なのです。

もしも、私が逆の立場だったら、復活をそのまま直ぐには信じられないとしても、五井先生の真意を大切にしたいからこそ、先ずその真偽を確認しようと思うのです。それをしなければ、いつまでも重大疑問と、不安が付いて回ると思うのです。信じたくないから拒否するというのは、全く知性的ではありません。

知性的な思考をする人であれば、このような行動パターンは絶対に有り得ないのです。本当に宗教の世界って、勝手にどうとでも思える世界で、全くもって知性を麻痺させる世界なのです。いつときも早くこのような世界からは逃げ出すべきですね。

●そろそろ客観的に真実が明らかになってくる

五井先生を知らない人は、直接岩根先生につながって、救世の大霊団の働きの中に導かれるのが自然ですが、私は五井先生を知っている人をも救世の大霊団の働きの中に導きたいと思っています。それが〔五井先生伝言80〕に隠された意味であると思っていますからです。

さて、五井先生復活から既に34年も経つので、現実をよく見てみれば、そろそろ客観的にも、何が真実かを判断できる状況にあると思います。

宗教というルールの無い、混沌の世界に住んでいる、知性を麻痺させた人達のいやらしさは、ああ思う、こう思う、という、まるで実体の無い世界を自分の都合で組み立てて、そこに住んでいるんだ。そういう世界を見せられる度に、何度もうんざりさせられてきました。このような人達と何を話しても、無駄であり、何の進展もないのです。よく覚えておいて下さい。だから、ハッキリ言って、私は宗教は大嫌いです。そこは反吐が出るような世界です。

白光の数人に五井先生復活の話をしてみて、確かにショックを示すのですが、顔が引きつって「聴かなきゃ良かった」というような体制維持的な反応しか示さないのも、ああ、これは言っても駄目だ、という風に思って、その後はあまり言っていない。

でも、これはとても重要なことであり、決して隠すことではないから、皆さんも言うべき時には言っているんですよ。

〔五井先生伝言72〕の重大発言は、幹部の多くの人達は知っているはずなのに、誰もがそれを無視していることになりませんか。これは霊的な出来事ではなく、実際の出来事ですからね。録音テープだって残っているかも知れませんよ。もちろん当の昌美先生だって、その場にいたのだから、知らないはずは無いのです。こんな重大発言を忘れる

はずがないのです。

真実が何かではなく、五井先生の真意は何かでも無く、自己保身と組織維持に都合の良いことは何か、で動く世界なのですね。

ここで示した、今の白光関係者にとっての「不都合な真実」は、もちろん救世の大霊団の五井先生の許可の下に、34年ぶりに明らかにする真実です。

私は五井先生の気持ちを忖度して、こうして真実を公表しているのです。私自身にとっては、今更どうでも良いことです。

誤解の無いように、ここではっきり書いておきたいことがあります。法的に、宗教法人を昌美先生が継がれることは問題ないと思います。白光という法人組織そのものを昌美先生が受け継ぐことは、全く問題ありません。それは法律の問題です。その組織で宗教活動をする 것도 全く問題は無いと思います。五井先生もそれを否定することは無いと思います。

そこで、ここで最重要に扱うべきことは、どこまでも五井先生のご意向であるはずで
す。もし、[五井先生伝言80]が存在しないというならば、それなら[五井先生伝言72]はどのように、理解されているのか、それを是非昌美先生に確認していただきたい
と思います。

ですから、ここまで来てしまった今としての問題は、そこに五井先生の意向が反映されて
いるのかどうかであり、理由はいろいろ付けられるでしょうが、私という救世の大
霊団のこの世での受け皿としての後継者がいた上で、五井先生から継続する思想的一貫
性が、何処にあるのかどうか、という点です。五井先生から見て、それを喜ばれるのか、
否かです。

五井先生の復活の[五井先生伝言80]とそれ以前の五井先生の「昌美は私の跡継ぎ
ではありません」発言の、[五井先生伝言72]を無視して、つまり五井先生の意向を無
視して、機関誌「白光」の見返しに五井先生の写真と昌美先生の写真を組み合わせて、
表裏の関係で掲載していることに象徴されるような、如何にも昌美先生が五井先生の思
想的継承者であると暗黙に主張をしていることが問題なのだと思います。

そうすることが、本当に五井先生の意向に沿っているのですか？と問いたいわけ
です。そうすることが、五井先生をこの世界に輩出した、「救世の大霊団」つまり白光で言う「救
世の大光明」の主旨に沿っているのですか？・・・と問いたいわけ
です。これは昌美先生が決めることではないはず
です。組織の都合で決めることではないはず
です。信者の希望で決めることでもないはず
です。どんなに不都合に見えようと、それは五井先生の意向のみを大切に
して決めるべきことです。

さて、それから白光関係者以外でも、先ほどの「幽界の生物」と言った人達のグル
ープは、この教団の混乱した姿に反発した人達なのだと思います。しかし、この人達のグル
ープは独善だけを引き継いでいて、周囲を否定し、悪意の誹謗を続けていて、全くも

って知性が無い。この姿をととも五井先生が喜ぶはずはありません。よくもまあ、「自分たちが五井先生の跡継ぎだ」なんて言えたものだと思います。頭の構造がどうなっているのだろうと思います。自分たちの希望的観測が、いつの間にか事実置き換わるという、実に都合の良い頭の構造を持っている人達なのでしょう。社長急死の後の、社長のイス争いではないのですからね。

しかも、復活の五井先生を「幽界の生物」と決めつけたということは、私を中傷しただけではなく、五井先生をも中傷したことになりますから、これは致命的です。私の存在と五井先生の復活は、自分たちにとって都合が悪いから、「幽界の生物」を持ち出して、そもそも復活なんて、無いことにしてしまうのですからね。どんなストーリーでも考え出して、自己正当化できてしまうという、実に卑怯な人達です。この人達は自分たちが創り出したストーリーをそのまま事実として信じる事が出来るという、特殊能力の持ち主ですね。別の言葉で言えば知性が無いということです。この件は、後世の人達のために、問題提起をするに、止めておきましょう。

何とか強引に、自己申告で五井先生の後継ぎに成ろうとする人達が居る一方で、この私はといえば、五井先生の復活の時には既に、形の上では五井先生から離れ、完全に独立したつもりで居ました。私には後継ぎという意識はさらさら無かったですからね。むしろ反旗を翻すやっかいものというレッテルを貼られることを覚悟のうえでの独立ですからね。ですから、五井先生の訃報を最初に聞いたときは、「これでもう、和解の機会はなくなるのか」と、とても寂しい気持ちになりました。でも、直ぐに復活の五井先生によって、一切のわだかまりは解けて、完全和解ができたのです。

私にとっては、一切何処の誰とも関係なく、一人で切り開いた新しい道を前面に出して活動してきたのですから、「五井先生の跡継ぎ」を受け入れることは、私にとっては自らの経緯の純粋性を失うことであり、この世的には損することなのです。しかし、それであっても、五井先生のご意向であれば、そしてそれが事実であって、「救世の大霊団」のご意向であれば、それに従おうとしているのです。

白光を離れ、独立してからの私は白光とは一切関係ないし、今さら私が五井先生の後継者だなんて、ほんとにもう、これは青天の霹靂ですからね。白光を辞めてからこのときまで、そんなことは、一瞬たりとも考えたことは無いのですからね。ただし、五井先生のためにお役に立つことがあれば、それはそうしたいとは常に思っていましたね。

復活された五井先生がそう仰るから、その言葉を尊重し、慎重にも慎重を重ね、34年間封印した後に、それを今公開し、一部受け入れ、3人目の**使徒**と成った新しい立場から、2人目の**使徒**である五井先生のメッセージを伝えるために、行動しているのです。それだけ慎重な行動をとっているのです。

しかし、私が今、封印を解いたと言うことは、パンドラの箱を開けてしまったと言うことでしょう。これは行き着くところまで行かないと、収まらないでしょうね。

● 3人目の使徒が動く

敢えて一般論で示しますが。こうしてみると、独善を垂れ流しにしていれば、その中では、自分たちはいつも世界の中心にいて、そこが天国と錯覚して生きてこれたのに、その時が来て、3人目の**使徒**が動き出すと、それに応じて救世の大霊団が地上に向かっての働きかけの活動をはじめます。3人目の開拓した普遍性を追求する働きが始まります。そこでは、独善は徹底排除されますから、独善の組織はかなり厳しい場面にも遭遇するということになりますね。つまり、実力の所に強い力で戻されてしまいます。

しかし安心して下さい。自ら独善を排除しようとさえ思えば、普遍性を回復しようとさえすれば、救世の大霊団が背後から大きな力を貸して下さいます。

天命啓示を受け入れると言うことは、このように、受け入れてみて、はじめて次の展開が見えてくると言うことがあるのですね。全く予想していないことでした。私にとってもこれは大きな驚きです。

修行に励んでいた頃の私は、天命の啓示が有ろうと無かろうと、それを受け入れようと受け入れまいと、「私はするべき事をするだけだ」と半ば開き直っていた面もありましたが、天命の啓示を受け入れてみると、見えてくる視界がまるで違うのでした。そこに見えてくる世界はこれまでとはまったく違う世界です。

3人目の**使徒**を自覚した私の最初の仕事は、これまで封印してきた五井先生の伝言を公表することです。五井先生を知る人に、そして五井先生を知らない人にも、五井先生の真意を正しく伝えたいと思うばかりです。

私としては、五井先生復活というこの重大な事実をこれ以上無視しておくわけにはいかなないと判断したのでした。

そして実は、これは私にとっても、私の創り上げてきた枠組みの根幹を揺るがすことなのです。宇宙の中での位置づけに関して、大きな変更が余儀なくされるのです。これまで私は、どこにも属さずに、どこの宗教にも係わらずに、単独で修行を続けてきたという姿勢を貫いてきましたが、五井先生の復活を前面に出せば、そうは言えなくなるのです。私はどこまでも普遍性を貫いてきたと言い続けてきましたが、その点で一部マイナス面も出てきます。今後は、私と五井先生との関係で、位置づけなければならなくなります。その位置づけの大変更に関しては、後ほど詳しく述べることにします。

● 今封印を解くことに意味がある

その時は不可能と思ったことも、今になってその隠された意味が分かるということのも、導きであり、救世の大霊団の計画なのです。

だからこそ、今まで私はそれを放置しておいたことにも必然性があるのです。放置しておいて、それで良かったのですよ。

その間に私はやるべきことをやったからね。そしてそのやることの形が明確になってきて、「これは確かに後継者としての仕事だな」と思われるところまで来て、その結果があって、そこではじめて天命啓示を受け入れるのであって、今ならば、それを堂々と受け入れられる状況なのだ、ということですね。

そういうことなのです。44年かかりましたが、これでよかったですよ。成る

ほどと思われます。全肯定です。

せっかくの機会ですから、私は今日話したことを記録に残しておきます。そしてここに公表したことになります。最終的には出版することになるかもしれません。

今日の話には、宇宙的な意味があります。私の仕事は、救世の大霊団の係わりで、世界に対して、宗教に対して、文化に対して、民族に対して、宇宙的に正しい位置づけをすることです。その位置づけによって、救世の大霊団の方針が決まり、未来の人類の時代を構築していくこととなります。

救世の大霊団といえども、人間を無視して勝手に動くことは無いのです。人類の努力があって、その努力を応援する形で世界の恒久平和を創り上げるのです。

●救世の大霊団はここまで来るのに実に三世代を費やした

救世の大霊団の3人目の使徒である岩根先生が開拓した絶対普遍の価値体系とその実践論は、実に3世代を費やしてここに成就したのです。それほどのことなのですよ。

これほど重大なことなのに、私はこれまで、天命啓示を封印して、ある意味では無視してきましたから、皆さんも何となく、そのように軽く感じていて、有っても無くても良いような扱いに成ってしまっていると思いますね。そうではないですか？。もちろん、そうなっているのは、他ならぬ、私の責任ですが・・・。

確かに、これまでは天命啓示の内容を前面に出して道を説いたことは一切ありませんでしたからね。それでも何の支障も無く、説けたと思っていますが、私はこの場面で、天命啓示を受け入れてみて、全く違った世界が見えてくることが体験できました。

そこで、皆さんも、私が受けた天命啓示を受け入れて、それを前提に私の説いた話を見直してみたいと思います。きっと、これまでとは違った意味合いで、歴史的必然性と、一貫した強い骨格のような、不動の真理を感じる事が出来ると思いますよ。

私が封印していた四十年余りの空白をここに急いで埋めますから、これから岩根先生と一緒に先に進むためには、皆さん自身でも必ず埋めてください。

天命啓示を受け入れたこの体験を通して、私から皆さんに伝えたいことがあります。道とは決して一人の悟りで説かれるものではない、と言うことです。形の上で一人で努力し、一人で悟ったように見えても、そのようなことはあり得ないと言うことです。救世の大霊団はここに到達するまでに、三人を費やしたのですからね。

それはつまり、五井先生の説いた消えて行く姿の教えを、岩根先生がそれを更新する形で、説き直していると言えますよね。その五井先生も、1人目の使徒の教えを更新しているのですからね。

つまり、三代かけて完成したと言うこととなります。

ところで、この理解に立つと、般若心経の成り立ちが良く見えてくるのです。般若心経は大乗仏教の神髄を纏めたものですが、これは仏陀の説いたと言われる初期仏教を否定する形で成立しています。しかしそれは、形の上のことだけの話なのですよ。

私の体験からも、般若心経の解説に当たって、この私は千四百年前の玄奘三蔵や、さ

らに五百年も前の般若心経の編纂者との密な交流が出来ていて、解説しているのですからね。そのことから、仏陀入滅から四百年程度の空白時間しかない、仏陀と般若心経の編纂者との間に、密な交流が無かったはずはないと考えるのは決して無理な考えでは無いと言えるのです。

ここで私の場合は、私が五井先生の教えを更新する形で、しかも霊的には五井先生と岩根先生は、復活という事実を挟んで、密な関係でつながって説いているのです。

そして一方、般若心経の構成は、初期仏教の代表格の舍利子が数百年後の大乘仏教の代表格の観音様に質問して、指導して頂くという構成になっています。

その内容では、観音様は初期仏教を全否定しつつ、しかも同時に、仏教という継続性を保ったまま、最終的には仏陀が承認を与えるという形式をとって、形の上では独立した教えでも、二者を貫く精神性は一貫して密な関係を持って成り立っているのですよ。

ですから、般若心経の成立と岩根先生が到達した絶対普遍の真理の成立との両者には、相似形の関係があり、フラクタルの関係にあることがわかりますね。

そしてこの私はこのフラクタルの関係にある両者のどちらにも密に係わっていることになりますね。歴史の不思議さと、共時性を感じるどころです。

そしてさらに、般若心経の解説は、第二の天命啓示にも係わっていると気づきます。三人目の私が解説したという事実は、まさにフラクタルの関係にあると見えます。三人目の私が解説してしまえば、4人目の出番は必要ないわけです。4人目については、次の章で話します。

第六章 プロジェクトの始動

3人目の私は、徹底して悟りを深め、実践論として纏めることに専念し、その結果、宇宙の深淵にまで達し、その理解を深め、行として纏めました。しかしながら、世界の恒久平和のためには、この理解と実践論を一般化し、横に広げる作業が残っているのですよ。あらゆる宗教や文化に対して、この「理解」と「実践」を咀嚼し、万人の物にしななければ成りませんね。

宇宙の普遍性によって、多様性に満ちた世界を調和に保ちながら、人類の恒久平和を実現する事は、たった独りでこなすというのは到底不可能と思いますね。

そこには3人目の**使徒**の理念の下で活動する強力なメンバーとしての、多くの人達の結束した力が必要なのです。そこで、この強力なメンバー達をプロジェクトのメンバーとして育てるのが、急務と思います。以後、このプロジェクトをプロジェクトと呼称します。

プロジェクトは3人目の**使徒**の私が始めることになるのでした。そして、これから横に展開するために、プロジェクトの準備をしなければなりません。

そこには、修行を積んだ複数の賢者が係わってくることになります。この複数の賢者は救世の大霊団から遣わされた神の使いですが、その働きから、それらの人達は4人目の**使徒**ではなく、3人目の**使徒**の業績をより具体化して、横に展開してくれる働きの賢者です。

そこで、語句の定義をしておきます。私が3人目の**使徒**と言うときには、1人目、2人目、3人目と時間軸上で縦につながる**使徒**であります。これはアルファベットでは大文字で表現すべき**使徒**です。そして、3人目の展開を具体化して横に広げる役目を持つ賢者達を私は「賢人」と呼ぶことにします。そして私が生存中は、私が直接係わって、こここのところは、こういう意味だよ、とかね、徹底的に指導したいと思います。本当にそう出来る事を望んでいます。

私は、プロジェクトに参加する賢人候補の人選をして、その人達を賢人に導き、組織的に育てることになると思います。そして、そこでは賢人達の単独の力ではなく、チームワークの力が必要です。

●第二の天命啓示の描写を吟味してみる

第二の天命啓示は既に説明しましたが、もう少し詳しく描写し、その意味を吟味してみましよう。

それは当時から見ての未来・・・、つまり今のことを描写したんだけど、今になって、よく分かるように見事に描かれていましたね。

中空に浮かぶ「的」とは、それは「絶対普遍の真理と、その実践に基づく悟りと救われの方程式・・・」という意味の比喻です。そして「矢」を射るとは、修行の結果として、「絶対普遍の真理と、その実践に基づく悟りと救われの方程式を解く」という比喻です。その「的」の中心を貫通すれば、「絶対普遍の価値体系を確立し、同時にそれを実践論的に示すことに成功した」という意味を象徴することになるのです。そのような意味が戯画化された場面であることは、当時からある程度は予想が付いていましたが、今になって、さらに明らかになりましたね。

私の前の1人目と2人目の**使徒**は、私の目の前で、順番に矢を放ちますが、どちらも「的」からは大きく外れていましたね。「的」を外したという意味は、個人の失敗というのではなく、この段階では未だ救世の大霊団の目的は達していないという意味でしょう。

次に私は、3番目に矢を放つ準備をしながら、1人目と2人目の動作を良く見ていたのですが、私は一瞬で「的」を外した原因を見抜きました。そこで私はその原因を解決して、「自然の論理」に徹して、絶妙のタイミングで矢を放ち、その「的」の中心を正確に打ち抜いたのでした。私だけが完璧でしたね。

3人目の私が「的」の中心を貫いたことで、私の次に控えていた4人目は「これで自分の出番は無くなった」と言って、矢を射ることはしませんでした。

第二の天命啓示では、このように私が救世の大霊団の目標を達成したという事を戯画化して、比喩的に見せられたのです。私には、今になってはじめて、あの時の戯画化された啓示の意味がより深く理解出来るのです。

3人目の私は既に絶対普遍の価値体系を示しましたし、自明行を根底にして、実践的にも、その基本線をきっちり示したと思っています。

私は、1人目と2人目の実績をよく研究し、その体験から多くを学び、自分に生かしたのです。そのことは既に述べた通りです。

● 1人目の使徒は誰か

さてここまで来て、やはり1人目の**使徒**とは誰なのかが気がかりですね。天命啓示は啓示された時点では謎が多く、予想や想像にしか過ぎないのですが、成就された時点で、結果的にそれは理解されるというのが、私の考えです。

今の時点で考えてみれば、2人目を五井先生としたことから、解釈が始まっていますが、必ずしもそればかりでは無いと思えてきます。

一つに限定してはいけないのです。

それを考えるために、私の業績を振り返ってみると、「人間やりなおし」に示した絶対普遍の価値体系という「宇宙の大原理」を示したことと、その大原理に基づいて、自明行を取り入れた実践論を示したことです。そうして、この宇宙の大原理は3人目の私が般若心経を解説したことで、さらにその立場を不動なものにしたということが出来ます。

そうすると、救世の大霊団の活動は、般若心経と密に係わっているのが明らかになり、

決してそれと無関係では有り得ないと思えてくるのです。

般若心経から学んだこととして、このような連携はフラクタル構造をしているという真実です。いろいろな、1人目、2人目、が居るということを想定しなければなりません。その最もわかりやすいのは、谷口先生・五井先生・岩根先生の流れです。

次にそこに般若心経が入ってきて、般若心経ではこれまで「実体が無い空」として伝えられてきましたが、3人目の**使徒**がそれを「超実体・超人格の空」として、大きく訂正したことになるのです。宇宙にはフラクタル構造が複雑に存在して、フラクタル共鳴しています。このことを念頭に置けば、いろいろ考えられますね。

岩根先生がそれを解読したという真実からは、1人目とは宇宙の大原理に係わる**使徒**であり、2人目とは、実践論に係わる**使徒**であり、3人目はその実践者であると思えてくるのです。1人目は般若心経の編纂者であり、2人目はそれを伝えた玄奘三蔵であり、3人目は、それを現代に適応した空不動で、そこにフラクタル共鳴があります。

さらに、人類の歴史的には、1人目として、仏陀であり、2人目としては般若心経の編纂者であり、3人目は現代への適応を説いた空不動であります。

さらには、1人目としての玄奘三蔵、2人目としての空海、3人目の空不動と、フラクタル共鳴が存在します。さらには、第一の啓示のように、1人目の仏陀、2人目のイエス、3人目の空不動のフラクタル共鳴も存在します。ここは第三の啓示まで含めて考え見れば、さらに範囲は広がって、イエスは旧約聖書のユダヤ教、イスラム教徒とも間違いなくフラクタル共鳴していて、そこにいづれ空不動に係わってくるのかも知れません。

注目すべきは、日本に於ける真言宗の開祖で、般若心経に最初に関心を示し、その後も般若心経と深い関係を保つ弘法大師「空海」の存在が、今もフラクタル共鳴にあると思えてきますね。

一方、修行名から推測すると、私が「空不動」、五井先生が「空独尊」、これに対応する「空」が頭に付く名前の方を探せば、確かに弘法大師「空海」が居られます。

私が般若心経を解読したことを考えると、般若心経にいち早く取り組んだ弘法大師との縁は否定できませんからね。

般若心経を通じての私との縁という点では、直接霊的に係わった玄奘三蔵なのですが、空海は直接係わっていませんが、フラクタル共鳴の中に有ります。「空海」は私自身も特に関心がある方です。現在の真言宗では「空」は「実体が無い空」ですからね。これはどんなことがあっても、「超実体・超人格の空」に訂正する必要がありますよね。そして私が般若心経を解読して、「実体の無い空」の定説を覆して、「超実体・超人格の空」に訂正したことは皆さんご存じの通りです。般若心経の解読は既に詳しく本を書いているので、今回はこの内容について深くは触れません。

多少の説明を加えれば、空海は私の中では全く一体であり、空海は空そのもののものです。もちろん「超実体・超人格の空」です。ところが真言宗で説かれる空は「実体の無い空」であり、そのギャップに驚かされます。

実はそれには理由があるのです。真言宗の八祖の1人、龍樹菩薩（ナガールジュナ／

インド／150～250年頃)は実に難解な「空」を説いていて、龍樹こそが「実体が無い空」の元祖と言える僧なのです。

五井先生と白光真宏会の今の教えとの間に、看過できない大きなギャップがあるように、弘法大師と龍樹の説く「実体が無い空」を抱えた真言宗の今の教えとの間にも、看過できない大きなギャップがあるのです。

真言宗が「実体が無い空」を破棄して、「超実体・超人格の空」を受け入れて、教えが変われば、日本の仏教は生まれ変わります。このときに仏教再生が成就します。

フラクタル共鳴は様々な共鳴を起こしていますから、一つの流れに限定する必要はありません。

ここで、第二の天命啓示は第一の天命啓示ともつながってきて、「的」の中心を射貫くとは、これまでの混乱した宗教界を根底から作り替えるほどのことを示しているとも、考えられます。どちらが正しいかではなく、フラクタル共鳴は複数の意味の共鳴でもありますから、どちらも正しいのです。的の意味は、確かに「釈迦やイエスにも出来なかったことをやり遂げる」ことであり、今その最中にあるといえるのだと思います。

●この戯画化された4人目の使徒の登場の意味を解説する

そして次に、4人目が「これで自分の出番は無くなった」として、矢を射ることはしなかったという、この戯画化された意味はとても重大です。ここではこのことについて詳しく述べておこうと思います。

そこでですが、4人目は何故矢を放たなかったのか、その意味を説明しましょう。これは啓示があった1970年の時点では全く意味不明であり、40年以上経った最近になって、はじめて明らかになったことです。

それは私が「的」の中心を見事に射貫いた瞬間に、3人目の立場は確立し、プロジェクトは始動したことになるのです。第二の天命啓示の中ではプロジェクトのリーダーの人選は3人目で終了したことを明示するために、敢えて矢を射らない4人目が登場したのだと解釈できます。

ですから、私と同じ目的で矢を射るための、4人目の**使徒**は出現しないことを示すことに意味があるのです。つまり、このことは3人目の**使徒**でプロジェクトは始動することを、わざわざこの霊視のストーリーの中に組み込まれていることが、今になってわかることなのです。つまり、現実には4人目の**使徒**の出現は無い事を意味しているのです。

このように私の修行の過程を振り返ると、時間軸方向のフラクタル共鳴が存在していて、まさにその中で修行し、そして導かれていることが良く理解できます。

さて、宇宙のフラクタル構造から判断すると、このようなフラクタル共鳴の中に生まれてくる1人目、2人目、3人目、そして生まれてこない4人目という関係は、そのままフラクタル共鳴として、地球以外の世界を含めて発生すると考えられます。

そして地球では、少なくとも数百年単位の周期性の中で、フラクタル共鳴が発生して

いて、再び1人目、2人目、3人目、そして生まれてこない4人目という関係が表れます。その時は、宇宙物理学も物質と精神をバランス良く扱うところまで発展し、宇宙観はさらに理論化されて、しかも単純化されて補強されるでしょう。

地球と地球以外の人類との交流が進展し、そして、私の残した普遍性と自明行のフラクタル共鳴が、過去と現在と未来を貫いて共鳴するときこそ、過去の地球の宗教や哲学・思想が共鳴して調和するときです。そしてさらに宇宙人を含めた宇宙思想が、今度こそ対立ではなく、フラクタル共鳴によって結合されることになり、真の意味の人類の恒久平和が実現される時です。

このようにして、宇宙規模の生命活動が大きく展開していくのだと考えられます。

さて、現実を目を落とせば、いよいよこの地球のプロジェクトは三人目の**使徒**で始動することになりました。

ですから、4人目の**使徒**は生まれません。4人目は出現しないことに意味があるのです。その事を明確に示すために、第二の天命啓示の中では、わざわざ4人目を登場させ、矢を射らないとの姿勢を示したのです。このことは第二の天命啓示の重大なメッセージなのです。

3人目の**使徒**の後に、さらに新たな絶対普遍の真理を示す**使徒**は出現しない。3人目によって説かれた絶対普遍の真理以外に、3人目の示した世界恒久平和への道筋以外に、それとは異なる絶対普遍の真理は存在しない。ということをも意味していますね。

この天命啓示では、3人目以降に、「自分は4人目だ」と言って、偽者が出てこないように、出てきたとしても直ぐに偽者と分かるように、キッチリと手を打っているのです。驚きです。

●今後の方針

この第二の天命啓示には、その後の展開については描かれていませんが、ここに私の希望を示しておきます。

私は3人目の**使徒**ですから、私の希望は単なる希望ではなくて、救世の大霊団の今後の方針として採用され、一部修正され、一部追加され、実行に移されていくのです。

3人目の私は黒子として活動します。だからといって何も黒装束で隠れて暮らす、必要はありません。普通に暮らします。

ここで、岩根先生の公での発言を振り返ってみると、春のセミナーで「私は弥勒菩薩にこの書を渡したい」と言っていましたよね。ここで「この書」とは【暗号は解読された般若心経・改訂版／岩根和郎／献文舎・仏教再生としての般若心経／ YOUTUBE】のことであり、「それを弥勒菩薩に渡したい」との公式発言があったことから、弥勒菩薩は仏教に於ける救世主の役割なのだと考えられます。ただし、その後この原稿を更新した【未完成だった般若心経／岩根和郎／献文舎】を出版した時点（2018年2月以降）では、仏教再生を果たしたことになる般若心経の編纂者こそが、弥勒菩薩であるとの見解を示しています。

そして更に、このことから、仏教に弥勒菩薩がいるように、他の宗教にもその宗教と

信者を救う救世主が出現して、その救世主によって、普遍性を回復する役割の賢人が既に決められているのだと思います。その救世主の登場は、宗教によっては預言されていることもありますね。

3人目の**使徒**は救世の大霊団の理念の下に、各宗教から出現する賢人を集めて育て、各宗教に賢人を戻して、その賢人達の働きで、各宗教の普遍性を回復させることにより、世界の恒久平和を実現することが役割となります。

各宗教や文化・民族には、それぞれ救世主となる役割の賢人が出現するのだと思います。

十分な時間をかけて、時代を重ね、各宗教と各文化から、それぞれ賢人が出現することに成り、その影響の及ぶ範囲で救済が為され、誰もが納得する形で、世界の恒久平和が実現されるのだと思いますね。

もちろん、ここで「・・・思います」とは、私が思うことは救世の大霊団の思うこととフラクタル共鳴にあるとの前提があります。私は救世の大霊団とフラクタル共鳴状態にあることから、単に考えることとは異なり、救世の大霊団と一緒に考えているという意味になります。ですから今後は、3人目の**使徒**となった私の現行や思考については、この視点を大切にするように。常にこの視点で捉え、理解するように。

●具体的な活動の展開

これまでの説明を具体化して示しましょう。

それはズバリ、3人目の**使徒**であるこの私の指導の下で直接学んだ絶対普遍の真理と自明行を学んだ賢人達が、幾つかの宗教から出現した「選ばれし賢人」を大構想推進会議の中に導き、そこに受け入れます。

その「選ばれし賢人」はその出身の宗教に普遍性を回復させる役となり、独善的で排他的な宗教に手を入れて、その宗教の絶対性を確保したまま、個性を尊重しつつ普遍性を回復させ、同時に自明行によって歴史の中で蓄積してしまった垢を落として、その宗教を再生することにありますね。

そして、この「選ばれし賢人」達は、その宗教の「救世主」となるのです。

ところで、救世主という呼称は、啓示と同じで、結果が出てからそう呼称するのがふさわしいと思います。これは私の一貫した考え方です。

そこで私としては、プロジェクトを遂行するために、3人目の業績を横に展開する沢山の賢人達に活動してもらうことを求めます。もちろんこの賢人達こそ、新たに救世の大霊団が遣わした**使徒**達なのです。

そして賢人達は世代を超えて、3人目の**使徒**の業績を直接受け取って、それを具体化して、横に展開するための働きをすることになるのだと考えます。

プロジェクトでは、常に3人目の**使徒**の周りには直接集まった賢人達が居ます。そしてそれ以外に各宗教や文化の中からも、その代表として、複数の賢人候補が現れます。

ですから3人目の**使徒**の周囲には、3人目の周りに直接集まった賢人達と、各宗教から派遣された2種類の賢人がいることとなります。

●世界賢人会議を立ち上げる

そこでプロジェクトを立ち上げた時に、私がやらなければならないことは、世界賢人会議の組織化だね。これを作りたいと思っているんです。このぐらいは私が生きている間にある程度形はつくりたい。大構想推進会議のところに作りたいと思っています。

岩根先生の理念を共有出来る人達を育てて、救世の大霊団の理念を共有しつつ、世界のあらゆる出来事に対して、位置づけをしていく。そしてそれを基に、人類の恒久平和実現の計画を作ることになるのですよ。

第二の天命啓示を確認すると「救世の大霊団は・・・今、この人類の危機を救うために活動していて・・・」とありますから、これは特に人類の近未来から遠い未来への係わりなのだと思います。この動きは、日本を中心とした、世界の主流に成っていくと考えられますね。そこでは、ここに示した幾つかの天命啓示がますます意味を持つてくるように思いますね。

五井先生は復活されて私の所に来られて、「後継ぎ」を伝えたいけれども、私は生きている内に次の世代を育てたいと思うんだよ。少なくとも、指導方針と、その期待する姿と資格は明確に示しておきたいと思うんだ。

その賢人候補達を大構想推進会議の中で教育して、育て上げます。そしてその中からリーダー格の賢人が現れ、各宗教や文化に戻って、世代を越えて継承して行くことになると思いますね。彼らは各宗教や文化に戻って表に出て活躍し、その影響の及ぶ範囲の救世主の役割となるのだと思います。

世界の数々の宗教や文化や民族に働きかけ、そこから複数の人達を賢人候補として選抜し、絶対普遍の道を教育し、賢人の資格を取り、この賢人達の中から複数のリーダー格が出現するようにする必要がありますと私は思っています。プロジェクトを成就するには、各宗教から受け入れた賢人達が必要で有り、3人目の使徒側からの人達だけでは、不可能だと思いますね。

私の直接の後継者としての賢人は独りで良いと思いますが、その下で働く賢人は世代を超えて複数現れてくれなければ、世界の恒久平和は実現しません。各宗教の中に複数の賢人候補を探して、教育し、導くというのも皆さんの役割だね。

ここにいる皆さん自身はどうかと言うと、皆さんは私の意志を直接継ぐ人達として、是非賢人を育て、教育する側に回って欲しいと思います。プロジェクトのための人選と教育と人事を担当して欲しいと思います。

宗教から派遣される賢人は生まれたときから決まっているのだから、未だどこに居るか分からないとの前提で良いのです。

今、ここに私の考えとして、いろいろ話していますが、これは私の考えであって、同時に救世の大霊団の考えなのです。

賢人候補の資格はある程度低く押さえて良いと思いますが、そうすると中には良く事態を飲み込めていない賢人候補がいて、「自分が4人目の**使徒**だ・・・」と勝手に思えるお目出たい人も沢山出てきますからね。第二の天命啓示では、そのようなことを阻止するために、人々を混乱させないために、救世の大霊団はわざわざ4人目を一度登場させて、その上で「4人目の出番は無い」と言っているのです。もし出てきたらその人は偽者ということになるのです。見事なまでに計算し尽くされた啓示なのですね。

そこで、救世の大霊団がプロジェクトのために各宗教に遣わした賢人達の中から、その宗教の中で、最終的に各宗教での救世主と呼ばれる**使徒**が現れることを期待します。そこで、ここに賢人の条件を示しておきましょう。

各宗教から集まった賢人は元の宗教に帰れば、いずれ救世主とも呼ばれる人達ですから、大構想推進会議が選ぶ形を取りますが、これは既にそのような使命を持って生まれてきているのを知っていて下さい。既に決まっている人を探すと言うことになります。

ここで、賢人候補と賢人の資格を以下に述べておきます。

- ・自明行を成就していること。(自明行については「人間やりなおし」を三章のこと) 少なくとも自明行を積極的に実践していること。
 - ・自明行によって、「正しい苦しみ^の自覚」を検出できるようになっていること。
 - ・守護神から、何らかの天命啓示が成されている。(これは絶対条件ではないが、私がそうであったように、最終場面で、啓示は大きくものを言います。)
 - ・救われを体得しつつある。救われの近くまで到達している。
 - ・学ぶ姿勢を正しく整えていること。
 - ・3人目の**使徒**の岩根先生にこころから感謝できるように成っている。蹴っ飛ばされても感謝できるようになっている。
 - ・岩根先生に正しく帰依して、自分の運命を岩根先生に委ね切っている。
 - ・全体の幸せが大事で、自分の個人の幸せは捨てきっていて、二の次である。
 - ・偉いという錯覚と、偉い自分の自己正当化、及び被害者意識は既に解消している。
 - ・自分の心の動きを、そして自分の発する想念を完璧に見ることが出来る内観力を持つ。この能力は自明行のためにも、指導の立場に立つためにも必要である。
-
- ・超越思考、じねんの論理、じねんの行動原理を体得しつつある。(【人間やりなおし】を参照のこと。)
 - ・私が説く、全肯定の教えを自明行と共に深く理解して、実践している。
 - ・空が実在であり、超実体・超人格であることを前提に生きている。
 - ・口だけではなく、実際に行動による実績を積んでいる。口だけで、実績が無いのは空手形ですからね。これは大事です。
 - ・いつも真理に素直に向かい、傲慢に流されること無く、空を体験しつつあり、空を深めている。

- ・独善を嫌い、普遍的な考えに強い意識があること。
- ・誰にも負けない、強い人類愛の心を持ちつづけている。
- ・何ができて、自分の好き嫌いでしか動けない人は失格。

このように条件を書き並べてみると、これは結局、30代の私が、天命を自覚しつつある時の事を書いているようなものですね。賢人候補、賢人として、これらをクリアしているか否か、自分で分からないときには、道を学んでいる周囲の人に判断してもらうことも必要ですね。客観的な周囲の人の評価も大事です。推薦も有りと言うことです。賢人として、この条件を全てを完璧に満たす人はなかなか居ないかも知れませんが、ある程度満たすことで、良いのだと思います。

●世界賢人会議での議論の進め方

世界賢人会議では、賢人候補生達にはある期間、徹底して修行してもらうこととなります。修行と言っても、真理を理解することは「行」のたった半分です。後の半分は人間の「負の側面」を正しく理解し、それを如何に取り扱うかという、重要な「修行」なのです。そのためには、先ず己を徹底的に知り尽くさなければなりません。それが自明行です。それほど自明行は大切なのです。

この中から多くの賢人が生まれてくることを期待します。ここで育った賢人達によって様々な提案が成されて、議論され、実施計画が作られていきます。

さらに、一般の人であっても、今の世の中、批判を頭から封じることはしたくありませんので、批判や提案を受け付ける窓口は作っておきましょう。私の体験からも提案を受け付ける窓口はあって欲しいと思います。提案は、自らの所属と立場を明確にして、この書の出版社（献文舎）にメール等で送って下さい。これを大構想推進会議で評価して、救世の大霊団の理念の下にあるのか否かを評価し、判断します。それが理念の下にあればそれを救世の大霊団の下で、提案者の責任の下に実践することを許可します。理念の下に無いと判断されれば、救世の大霊団の下で実践することは禁止します。当然、救世の大霊団の外側で、自らの責任の下に動くことは自由です。

しかし、経験上、意味不明のものや、悟ったつもりからの強引なものや、はじめからとてもかみ合わない提案も有り、まともとは思えない意見も多く有るものなので、意味不明のものや、悟ったつもりの人意見や、批判のための批判は受け付けないことにします。同じ提案をするなら、威張ってするのではなく、分かりやすく、丁寧なことをお薦めします。

●厳重注意

ここで前もって、厳重に注意しておきます。

自明行が無いために、何でも自分に都合良く解釈する人が出てきます。これには、十分気をつけて下さい。

岩根先生の道を学べば、直ぐに知識としては分かったつもりになれますからね。誰でも悟った人と同じ事を言うことが出来るようになれます。岩根先生と同じ事が言えるよ

うになりますから、「自分は悟った」と勘違いできるのです。

注意すべきは、知識があつて、同じ事を言えたとしても、それだけで理念を共有していることにはならない、と言うことなのです。言葉だけは覚えて、同じような事が言えて、言葉が共有されたときが、本人も悟った気になり、周りも安心してしまふのですが、実は、この状況は理念がまだまだ共有されていない危険な状態にあり、この状況が最も危険で不安定で、どこに転ぶか分からない期間と言えます。

このような状況は、出来るだけ早く解消しなければ成りません。自明行があれば自分で気づくことが出来ますが、自明行が無ければ、その気になってしまつて戻らぬ人となり、沈没してしまうことも十分あり得ます。

その落とし穴に落ちないように、岩根先生の道を学ぶ人は、岩根先生に帰依し、岩根先生に感謝し、岩根先生にへりくだり、自明行を深めるということに徹底しなければならぬのです。

それが無くなった途端に、自分は悟ったと錯覚し、賢人と錯覚してしまいます。そのような犠牲者は、必ず出ることを覚悟しておくことです。

世界賢人会議では、いつもいつも共に祈り、感謝し、理念を共有していることを確認する事が必要になります。

この道の危険性を知り、十分に慎重に、今自分は錯覚の中にあるのではないか、いつもいつも、自分の心の姿勢を確認しているように。

この道では、岩根先生への感謝と、自明行がいかにか重要かが分かります。自らの想念と、それを発する心の姿勢を徹底的に見極める慎重さを学ばなければ成りません。

知識だけで悟ったつもりになる人は必ず出てきます。賢人氣取りで、岩根先生の教えを批判しようとしたり、改良しようとしたり、自分を認めさせようとして、偉くなる人が出てくるものです。私は五井先生との「差異」を明確にして、五井先生を肯定しつつ3人目としての立場を確立しましたが、その「差異」を否定的な批判と捉えて「岩根先生が五井先生に言ったように、自分も岩根先生に言っても良いはずだ・・・」と簡単に思う人が出てきます。それは、実際に出てきたのです。この道とは、全肯定の道ですから、自明行の出来ない人は危険なのです。ここは慎重に歩まねば成りません。額面では同じ事を言っている、自明行の出来ていない人の意見は、自明行を成就した人に比較して、百倍軽いのです。或いは額面が合っているだけに、ベクトルで見れば却って危険なのです。

いいですか、私はこれまでに様々な場面での行動の見本を示してきているのですよ。私は宗教の対立を何とか避けようとして、共通点を積極的に探して、「差異」を普遍性の中で統合しようとしているのですからね。

何事においても、今さら岩根先生の教えとの「差異」を強調して出そうとするなら、それは敢えて対立点を作ろうとすることに成り、救世の大霊団の理念と逆行するのです。

そして、「差異」は肯定しつつ主張して下さい。そのためには、自分の思考を一旦捨てきった判断放棄の自明行の後にしてください。自明行を極めてからにしてください。

この私だって、五井先生にもの申すには、徹底的な自明行の後に、周到な準備と祈りの蓄積と、丁寧な説明と、蹴っ飛ばされても揺るがない帰一があつてのことですからね。

さらには五井先生の伝言を受け入れて、天命を自覚し、実行に移すには、44年もかけているのですからね。それだけの、吟味と謙虚さと慎重さが必要なのですよ。

本気で意見を言うなら、口だけではなく、実績と行動で示すために、私のように34年の時間と手間暇をかけて、自らの全人生を通してものを言うべきなのです。34年は結果から言っているのであり、その時点では一生かかるかも知れないし、生きているうちには成就しないかも知れないのですからね。

「命がけ」というのはこういうことであり、一時の生死をかけた冒険的行動のことではないのです。一瞬の生死をかけた「命がけ」よりも、人生を通して行動する「命がけ」の方が、百倍も困難なことなのです。この「命がけ」は、自分の本気度も自分でよく分かりますからね。

勘違いの人を出さないためにも、ここに示した賢人候補と賢人の資格は役に立ちますね。

●理念の批判は有り得ないが、方針については議論を積み上げよ

そこで確認ですが、私は理念についても、そこから生まれる方針についても、そして実践を通しての実施計画についても、かなり幅広い範囲について話をしています。ですから、批判するにしても、その批判の対象が理念に関してなのか、方針に関してなのか、実施状況に関してなのか、そこをよくよく吟味して下さい。

そこでですが、理念についての批判はこれは有り得ないことです。有り得ないことをすれば、宇宙の法則にはじき飛ばされてしまいますからね。

次に方針に関してですが、世界賢人会議がこれから係わろうとする世の中の好みや、傾向については常に情報収集の対象となると思います。

しかし、人類に直接影響を及ぼすような方針の策定、実施計画の作成に関して、私と対等に話すには、世界賢人会議の中で行います。世界賢人会議に参加するには、既に示した**使徒**の資格に準じるほどの人でなければなりません。しかし間口は広くして、賢人候補の資格はある程度低くしておきましょう。そして、賢人の資格は、いらぬ混乱を避けるために、高く設定します。天命を持った賢人は、その中にいれば自ずと分かると思います。

ここで策定される方針とは、実施状況からのフィードバックを得て、どんどん変更されていく性質のものです。

ですから、ここで示される方針を批判するとすれば、先の資格の条件を満たして下さい。ここでは、徹底した議論が成される必要があります。

そして各自が提出する様々な案は、自分と他者との「差異」を肯定して、共に受け入れようと努力して下さい。ここで議論されるためには、最初に理念を共有していなければなりません。理念が共有されていることを十分に確認しなければなりません。

同じような意見でも、その寄って立つ、立ち位置が重要になります。

理念が共有されていない場合の「差異」は、これは次元の異なるものを持ち込むことに成り、これは危険です。これはしばしば、理念の異なる別世界からの攻撃とか拒否とか否定とか戦いとか呼びます。

これは絶対に避けなければなりません。別世界からの干渉は慎重に扱って下さい。

理念が異なる時には、直接関わらずに、互いに十分な距離を置くことが必要なのです。そして、般若心経で説かれる程の、絶対の世界観から、もう一度理念を吟味してどちらかが修正しなければなりません。それでも理念の一致が得られないときには、距離を置く以外にありません。これは、例えば西洋医学の先生と東洋医学の先生の議論のようなものです。この両者の違いは、小手先のことでなく、人体に対する共通の理解まで進まなければ、真の議論はできないはずです。この場合は、批判の前に相手の世界観、人間観を学ぶとか、沢山のすべきことがあると言うことは理解出来ますよね。不用意に批判してしまうと、これは否定とか、攻撃になってしまうことも理解出来ますよね。

これは後に議論しますが、この世界賢人会議での討論は、理念を共有した上での話です。ですから、理念を共有していない場合の議論の中での批判とは、これは批判に似て批判では無く、別次元の問題に還元されますので、切り離して別に論じましょう。

理念を共有していても、方針の違いは生じます。方針は大いに議論されるべき事柄です。方針は理念を共有していることを確認しつつ議論されるべきです。

方針の違いは、方針の「差異」は、理念が共有されてさえいれば、これは議論の対象ですが、批判の対象では無く、どちらが正しいというものでは無く、どちらがより適切かと言う問題です。どちらを先にすべきかという、順番の問題です。

どこからはじめるかという、好みの問題です。これは個人の美学の問題です。その時の時代背景や、周囲の事情で変化する程度の問題です。これは程度の問題であり、ここに意見の違いがあっても、これは本質的な対立ではありません。これを本質的な対立のように持って行くことは危険です。係わる人の利害や勝ち負けの問題にしてしまうことはもっと危険です。私の理念に反します。

これは体験から来る判断の違いであり、普遍性の中で「差異」として共に肯定できません。理念さえ共有されていれば、それを確かめ合えば、方針の違いが深刻な対立になるとは考え難いですからね。

個人の利害を排して、理念に沿って議論すれば、自ずと方向は出てくると思います。これは本質の問題では無いとして、事務方の議論に任せます。事態の急変をとまなう方針の変更は、人を不安にさせますから、緊急事態を除き、計画的に時間を掛けて変更するのが良いと思います。

ここでの話は、理念が共有されている場合に限定しましょう。ですから、理念が共有されていることを徹底して確認しましょう。ですから、批判があったとしても、互いに全肯定の理論を共有するうえでの批判なのです。わざわざ枝葉の「差異」を見つけ出して批判するとすれば、これは間違った否定です。否定のための否定は受け付けません。

批判の前に、普遍性の中で、役割分担の中で、そこにある差異を宇宙の中に位置づけなおして、多様性の中に肯定しようとする作業が先に必要になります。それであっても、肯定することは不可能というものは私の理論の中には無い筈です。程度の問題や、好み
の問題や、誤字や、勘違いや、言い間違いなど、それは枝葉の問題です。これについては、事務方の中で議論すべき事です。しかしながら、それぞれの案や意見には軽重があります。それが互いに一致すれば、決議は早いのですが、自らの意見が重いと思うのが常ですからね。議長としてはその判断をしなければ成りません。そして、例外的には、軽重に反して、周囲の納得性を重視して決定しなければならないときも有るでしょうね。

私は、世界賢人会議のメンバーとなる賢人候補と、賢人のために、上記のように整理して、議論しやすい環境を整えておきたいと思っています。そして、3人目の**使徒**の影響下で議事は進行します。そしてさらに代々、各宗教に係わらない3人目の集団を經由した賢人達によって議事は進行されます。各宗教出身の賢人達は自らの出身の宗教に如何に普遍性を回復させるかを議事の中で煮詰めて整理し、時代に対応させていくこととなります。

●私はここまで慎重にやってきた

それから、これからのことだけど、3人目の**使徒**としての私は、ここまでで結構な仕事をこなし、絶対普遍の価値大系を構築し、それを実践的に示して、大体のことはやってしまったんだよ。私がどこまでできるかは、自分では最初はわからなかったのですけれど、第二の天命啓示の、戯画化された中での「4人目の出番が無くなってしまった」というのも、なるほどと頷けるのです。私が達成した、絶対普遍の価値体系と、自明行を取り入れた実践論により、現実から空に至り、空から現実に展開する方程式を示したことになり、もう4人目の出番は無いということになりますね。わざわざ戯画化してまで、その事を示すことの重大さを感じますね。

ところで、私の示した理論を具体的に展開し、世界に働きかけることと、そのための組織を大きく広げるっていうのは、また別な能力が必要です。これはプロジェクトとして、新たな賢人達の出現を大いに期待したいですね。3人目の**使徒**がその出現を期待しているのですから、それは救世の大霊団の方針と一致していると思いますから、私は賢人達は必ず出現すると信じています。賢人はもちろん救世の大霊団からの**使徒**です。ただし、啓示に示されたことから、それらの横に展開する役目の賢人を4人目の**使徒**と呼ぶのはふさわしくありません。たとえこれらの人達が救世の大霊団が使わした**使徒**であっても、賢人と呼ぶことにします。

●私たちが計画を作る

先ず3人目の**使徒**に与えられている権限により、私が、或いは私が教育した人達のグループが、全ての宗教を、文化を、民族を、宇宙の中で位置付けするための作業をします。原則として発表はしません。それを各宗教が自らの力で、その私の中の位置づけに近づいてくる作業をしなければ成りません。その選択は自由ですが、私が位置づけたよ

うに、自らが宇宙の中で位置づけられなければ、それは歴史の中で消滅し、或いは陳腐な形に姿を変えてしまいます。

普遍性といえど、全肯定といえど、現状がそのまま固定されることはなく、常に進歩と調和の中に有り、宇宙の理念に反する存在は消滅せざるを得ないのです。

この権限こそ、3人目の**使徒**に与えられている、重要な権限なのであることを知らされました。「なるほど」と思いますね。世界一、普遍的で、世界一、寛容な、岩根先生だからこそ出来る作業なのでしょうね。

私はここまでかなり慎重に事を運んできましたね。ここまで宗教から離れて、普遍性の追求をきっちりやってきて、ついに般若心経ともつながったという事は、これは大きいですよ。般若心経にはその最終の姿が見事に表現されていますから、それを読み取って下さいね。

それと、人間の「負の側面」の現実対応としての自明行というものをキッチリ纏めて、基本的には、全ては「神の愛の導き」の中でのベクトル昇華という位置づけをキッチリしましたので、理論的にはもうこれ以上はないでしょう。

自明行は奥が深いのですよ。[嘘発見の自明行]はさらに[判断放棄の自明行]へと展開します。それについては『人間やりなおし』を読んで下さい。

第七章 般若心経との関係を深める

一昨年、突然般若心経との深い関係が出来て、私の説く絶対普遍の真理と般若心経が一体化しました。それで会のベクトルまですごく進化しましたね。変わりました。般若心経とドッキングして、瞑想すると今までの流れと違うことが分かりますね。目には見えない会員がものすごく増えたという気がする。

これは予想外のことで、私にとっても驚きであり、一気に先が見えてきましたね。こんな事まで予定されていたとは、私の修行というのは本当に大きな計画の中で導かれているとつくづく感じます。

そこで、私の修行の中で登場した般若心経との深い関係にも触れておきます。

●般若心経に繋がることで一気に展開する

ここで般若心経がものすごくプラスになって、私はもう般若心経と常に一緒です。般若心経の編纂って、あれはこの私が直接関わっているんじゃないのかな、と時々思うんです。だってあまりにも私の悟りと合致するんです。空は絶対性と普遍性そのもので在り、「照見五蘊皆空、度一切苦厄」は全肯定であり、「全ては神の愛の導き」に一致することは既に話しました。262文字のあれだけの情報で、どうしてこれだけのものを引き出せるのか。私はそれを自分の修行体験として理解した。だから、これは書いた本人じゃなければわからないんじゃないか、と思うぐらいの内容です。そしてものすごく論理的でしょ。あれほど論理的で、それで理解できて解析できる人は、完全に真理を体得している人でしょうね。

完全に体得していないと、般若心経は理解できないですよ。だから私は般若心経の編纂に密接に関係していたのだろうと、本気で思いますね。

私なら確かにあれを書けますからね。もちろん、私が係わったという、証拠は何もないですけど。

現代に生きるこの私そのものではないとしても、ものすごく縁の深い人だと思いますね。「暗号は解読された般若心経／献文舎」を執筆していた時の、最後の部分に登場する「もう一つの意志」が、その人ですよ。

あの時、あの「もう一つの意志」と密に係わったとき、これは過去の自分ではないのか、と思ったことも事実です。

私が般若心経の編纂に深く関わったのではないかと思うもう一つの理由をいいます。般若心経を普遍的に説けたというのは重要な事実です。道の普遍性というのを、私はものすごく大事にしているのは皆さんもご承知でしょう？

般若心経が今の私の悟りそのままであるということは、私とその関係者は二千年前に、般若心経を書いておいて、その結論を前もって用意して置いたんじゃないかと思うんだ

よ。

現代において、私はここまで道の普遍性を徹底的に説いてきましたが、この道の普遍性の重要性を今から普及するのは大変だなと思っていました。

普遍性は特に現代において重要な意味を持ちますから、現代において普及させることが必要なのです。

そして実は、二千年前に、普遍性の結論を暗号化して般若心経として用意して、世界に普及しておいて、そしてそこに今たどり着いた。

そうだとすると、後は暗号を解読して、それを普及すればいいだけなんだ。

般若心経が既に普及されてるところに、後は暗号を解読したものを普及すれば事足りるでしょう。

もしこれが計画だとしたら、「これはすごいな」と思いますよ。だから、これは計画なんです。偶然というものはないのでからね。私がこの時代に般若心経との出会いがあり、それからその暗号を解いたことも、これは偶然であるわけではないんだからね。

最終結論はもう二千年前に作って置いて、謎のまま形だけは普及していた。みんなが「ここに書かれた意味は何だ、何だ」という風に疑問をもって、「これってどういう意味なんだ」という状況にしておくって、これが計画だとしたら、すごいね。

そこでここで画竜点睛として、私が暗号を解読することになる。皆は、「般若心経とはそういうことだったのか」って驚く。うまくできすぎてるよ。

もし、そうではなくて、私がやっとならば普遍性にたどり着いて、普遍的な理論を作って、これを今から世に出そうと思うと、あと何百年かかるのか、という話じゃないですか。けどもう二千年前に結論を暗号として、既にみんなに配ってあるんだから、これはすごいことだと思いますよ。

何かすごくうまくいったな、という感じです。ちょっと出来過ぎだな、という感じさえしますね。

まあ、私が般若心経の編纂者だったかどうか、それは証明できませんが、般若心経の編纂と私の構築した絶対普遍の価値体系と、それを基にした暗号解読は、時代を越えて、密接に関連して動いているということだけは真実だと言えますね。

●科学者としての訓練を受けたことが、私の根底にある

私は理系の人間で、学者というか、そういう所で基礎的な訓練を受けたということが論理的に矛盾したことはどうしても書けないという点で、ものすごくプラスになっています。さらに生まれつきの体質として、できる限り事実を事実として、記録し、発言し、書きとどめようとするのが習性となっているんですね。ほんの些細なことでも、事実と反することは絶対に書けないと思ってしまうのですよ。私には、それがたとえ嘘で無くても、作為的に書くことも出来ませんね。

それでも、これを読み返してみて、二カ所ほど気になるところはあるのですよ。それ

は、前身の組織と対立を深めたくない事から来る、ぼかした表現と、私の師としての五井先生を低めたくないとの気持ちがはたらいて、直接的な表現を避け、間接的な表現としていると感じるころはありますね。とても気になるころです。

それであっても、私は、五井先生を尊敬しているからこそ、師の教えの不完全な点は、改善しようとするのです。つまり、普遍性を回復しようとするのです。

現実には、私が会を出た後であっても、私が五井先生に、拒否された形になっていても、私は五井先生が世界平和の中心者であることを疑いはしなかったのです。

今から考えても、ここは我ながら大したものだと思いますね。蹴っ飛ばされても、否定されても、絶対に帰一を失うことは無かったのですからね。

ですから、私も帰一したまま、私の悟りを伝えようとしたのです。そして亡くなった後は、古い関係を多少残したまま、両者は新しい関係に移行していくこととなります。

形の上では完全に独立したまま、霊的には繋がっているという理想の状況が作り出されたと思っています。

ここで帰一とは、理念を共有することを意味します。理念とは個別に有るものではないので、共通の理念に帰一するという表現が正確ですかね。

地上に天上界の理念を表現することが生命活動ですから、天上界の理念に帰一して、地上が主役と成り、天上界は補佐役として地上を導き、地上を支えてくれます。そして今私は地上にいて、五井先生の教えに普遍性を回復して、そして実際に、岩根先生の教えが生まれたと言うことですね。つまり、それが3人目の**使徒**の仕事なのです。

私は、30年以上掛けて、普遍性を回復することで、師を否定せずに、肯定すべきを肯定して、評価すべきを評価し、その実績を宇宙の中で肯定し、その実績の上で間違いを正し、その部分を修正し、改良し、そして、自らとの「差異」を明確にし、そして自らをも肯定するという困難な道を開拓しているのです。これは簡単なことではないのですよ。

過去の業績の上に積み上げる形で学問は進展します。そして真理の道も同じで、単独のように見えて、実は過去の業績の積み重ねの上に進展していきます。それは科学技術と全く同じなのです。

般若心経の編纂者も、自分の名前を残していないというところが、私には普遍性を強く求めたからだと思えてくるのです。

一方で、私は科学者としての鋭い観察力を持っていますから、五井先生の復活の時に体験したことはとても有意義で有難かったですね。霊体と魂魄の関係について、復活という直接的な実体験を通して深く理解出来ました。この復活の成され方というものは、生前、五井先生が仰っていたことと、全く同じだと思えましたね。それを強く再確認したことになります。これは私の般若心経の解釈に大きく反映しています。

●岩根先生は論理性で無謬性を越えた

平和を語る人が、平和を祈る集団が、自らの無謬性の呪縛を越えられないために、巨大な「不調和」が発生しているのです。まさに「平和」が脅かされているのです。これは大きな矛盾ですね。

無謬性を信じるから、宗教は他との調和が出来ないのです。だから、無謬性を固持する限り、宗教という形態そのものが、もう時代にはまったく合わないと言えますね。

一度歪んだ組織を修正するのは大変なことなのです。ですから、本当は独善の宗教を修正するよりも、一から作り替えた方がずっと早いのです。私たちは今、ゆっくりと組織を構築していますよね。これがいいのですね。皆さん、そのことに自信を持って下さい。

人類の歴史の積み重ねの上に自分が居ることに気づき、それにふさわしい行動をしなければ成りません。谷口先生は出口先生の、五井先生は谷口先生の、岩根先生は五井先生の蓄積の上に教えを説いているのです。

このような考え方は、学術研究者の常識です。学問の世界では、もし自分一人で全てを開発したようなことを論文に書いたら、学会から排斥されますよ。著作権や特許権で過去の業績は厳密に守られています。

確かに、悟りの世界もそうあるべきですね。独りで悟ったような顔をしてはいけないのだと思います。ですから、過去の業績と蓄積には十分な敬意を払うべきなのだと思います。

このことは私の説く世界を理解するには重要なことなのです。これは第一の天命啓示に関係しますが、私が「釈迦やイエスが到達していない世界に到達する」のは、さらには「五井先生が到達していない世界に到達する」のは、ある意味では当然のことであると言えるでしょう。私が到達した世界は、釈迦やイエスの実績のうえに、五井先生の実績のうえに、私の修行が蓄積して、新たに到達した世界なのですからね。

学問の世界とは、まさにそのようにして、蓄積した世界なのです。

ここでの私の話は、このようなコンセプトから成り立っているのが、十分にご理解いただけるものと思います。

さて、谷口先生のことは私はよく知らないのですが、母がよく谷口先生の話をしていましたので、私は母を通して、親しみを持っていますし、もちろん尊敬しています。

私は母から五井先生の教えに導かれたのですが、その母からは、「谷口先生は、世界中のあらゆる思想を勉強しておられた。」「谷口先生は、一回読んだことは決して忘れない。」と聞いています。そうであれば、世界の思想は一旦、谷口先生に集約されたと理解出来ますよね。

つまり、谷口先生は世界の思想を統合することで光明思想を生み出したのであり、この業績は人類史的に偉大なことと、私は理解しています。ですから、私から見れば、谷口先生と五井先生は一体ですね。そして、そこから、3人目の岩根先生へと理念は継承されていくと言うことになりますね。

このように、救世の大霊団の**使徒**達の連携によって、フラクタル共鳴を伴って、絶対普遍の価値体系が地上に降ろされたのですよ。そう考えるのが、普遍性を大切にする岩根先生の教えです。そこでいよいよプロジェクトが始動して、ここに集まった賢人達によって、さらに宗教別に、文化別に、分かりやすく説きなおして、世界に展開するということを期待せざるを得ませんね。

私は、五井先生の下で学び、その後、五井先生の教えを改良しようとして断られ、否定され、「不調和」とされ、そこで五井先生から独立して、34年間一人で修行を積んできましたからね。この間は本当に一人だけで、人跡未踏の地を開拓したのですよ。

ですから、形の上では、誰の力も借りずに、全てを自分一人でやったとも言えるのですが、ここで天命啓示に従い、3人目の**使徒**であること受け入れることで、2人目の五井先生の蓄積を肯定して受け入れて、その上に自分が居るという立場を、身をもって実践しているのです。

このように、岩根先生だけが、誰も出来なかった、普遍性に基板を置いた「真の調和」を実践しているのです。

私は、科学者としての訓練を受けていたので、このような行動原理をとれたのだと言えますね。そして、これこそが人類待望の世界平和の理論なのです。

今こそ宗教者は、無謬性を制限し、自らの独自性にのみ依らずに、普遍性の観点に立ち、そこまでの蓄積を認めて行動すべきと思います。そうすれば、般若心経の説く、絶対普遍の「空」の世界に達することができるのです。

ところで私は、そのとおりしていますよね。師を越えていくことは科学技術の世界では当然のことなのです。師はそれを発展として歓迎するのです。それを宗教者は自らの無謬性に呪縛されているために、できないのです。今こそそれから解き放たれて、心を大きく開いて、真の普遍性を学んで欲しいと思います。

私は、復活の五井先生に出会ってから、いずれの日にか行動を起こさなければ、ならない時が来るだろう、とは予想していましたが、その時までは、天命啓示を無視し、[五井先生伝言80]を堅く封印して、これまで修行をしてきました。

しかし、いずれ来るであろう、その時のために、私は、五井先生と一つ奥でキッチリ帰一してきたのです。一つ奥という意味は、今言えば、それは救世の大霊団の理念という意味になるでしょうね。

ですから、2人目の**使徒**と3人目の**使徒**とでは、完全に共通の理念の下に帰一し、世代を超えてつながっている、そういう真の人間関係を築いてきたのです。

解釈の違いが明確になって、そこは3人目の**使徒**の岩根先生の天命に直接関係するところであり、救世の大霊団の理念に関するところですから、ここは譲れない場面です。

それ故に、その私の主旨を五井先生は死後に完全に理解して下さり、そして認めて下

さったこととなります。私との関係に置いては、これまでの自らの無謬性の主張を破棄して、それを伝えるために、わざわざ復活して、[五井先生伝言80]として私に「後継者」であることを伝えて下さったのです。

ここまでの私の話を振り返ってみると、私は自分の無謬性を強調していないことに気づきますね。私は自分を権威付けようとする無謬性ではなく、科学技術を学んだことに起因する論理性を大切に、実践的に、そして知性的に語っているように思えます。

そしてさらに、「空」に由来する思想に対しては、一部を改良しつつ、その普遍性を大切に、絶対性を確保しつつ、全てを肯定しつつ、次のステージに進もうとする、岩根先生の教えの特徴が強く出ていることに気づきます。

私は五井先生の根本を肯定して、救世の大霊団に帰一したまま、そこに係わる全ての人々を次のステージに導こうとしています。ここには、やはり3人目の**使徒**の特徴が色濃く出ていると思いますね。

この点、五井先生は、普遍性を犠牲にしたために、谷口先生を積極的に肯定はされなかったように感じています。しかし、岩根先生は五井先生の存在を積極的に肯定し続けたと言えますよね。ここが岩根先生のすごいところですね。これが絶対普遍の宇宙の真理を実践していることになるのですよ。

それが口だけでは無く、それを実証して示すためには、30年以上の実践が必要だった、と言うことなのですね。その意味で、昨日、平成26年9月6日は記念すべき日だった、と言えるのです。

私が天命啓示として、霊的に見せられた、3人目の**使徒**の業績とは、なるほど、岩根先生は宇宙の大真理を言葉で語るだけでは無く、振り返ってみれば、宇宙の真理を見事に実践を通して表現しているなー、と見えてきますね。この私も、岩根先生のすごさがじわりじわりと理解出来てくるのです。

振り返ってみて、「私」と言ったり、「岩根先生」と言ったり、これはきっと生かされる側と生かす側の立場を無意識に使い分けているのでしょうかね。今の私は、実際は殆ど色と受想行識が一体で、色の立場が主なのですが、そこで話すと話がどうしても上から目線になり、断定の命令調に成ってしまい、教祖さまのようになってしまい、私の今の主旨には合わないの、敢えてそれぞれの立場を使い分けることで、意味を分かりやすくしているのだと思いますよ。

●般若心経は普遍性の追求の象徴

般若心経では、般若波羅密多の行が中心ですね。現代的に言えば、祈りが中心です。岩根先生で言えば「人類愛の祈り」が中心となります。

それから、人間の「負の側面」に関しての修行の部分の記述は、それが必要で有るとのみ述べていても、そしてそれが無ければ悟れないとは述べていても、その具体的手法については書いてありません。つまり、自明行については明確には書いてありません。

しかし、現代人には、ここから自明行を学び取るまでを期待したいところです。確かに、自明行は岩根先生に特有な行ですが、時期が来た人は、般若心経からそこまでを学び取ってくれるでしょう。

何と云うのだろうね、私でも予想できない展開というのはあるんだと思うんです。このタイミングで、般若心経に直結するというのは、私にとっても、すごい予想外の展開です。これからエネルギーを費やして、これから普及活動をやっていかなければならないことが、既にある般若心経を生き返らせることで、一気に普及されることになるのです。

だから新しく来た人も、直接『人間やりなおし』はチョット、ハードルが高いから、直ぐにここに来ないで、『暗号は解読された般若心経／仏教再生としての般若心経』、(その後出版の、前よりも分かりやすい『未完成だった般若心経』)の本に導かれるだけでも、それはそれでいいと思うんです。般若心経だけでやりたいと思う人は、それでいいと思います。そっちの方がこれから人は増えるかもね。それで私は十分だと思います。

瞑想を15分して敢えて区切りを入れたんだけど、今回の第16回で、私は天命啓示を受け入れた、と言ったでしょ。これをもし受け入れないと、どういうことになるかということを考えてみて下さい。・・・ということはね、すべては私が、自分が、自分の力だけでやりましたという意味になっちゃうのです。五井先生は私の主張を無視したのだから関係ありません。谷口先生も直接係わっていないから関係ありません。と、過去のことは関係なく、全部が私、一人の手柄ですという意味になる。受け入れないとそういう意味になるんですね。

しかし、今それを受け入れるということは、全てこれは過去から受け継がれてきた業績の集大成ですよ、という意味になるのです。後継者であることも受け入れるということは、後継者としてこれを、今までの般若心経にしる、すべてその流れの中で達した業績ですという、宇宙の中で謙虚な姿勢を示すという意味になるんでしょうね。

そういうことなんです。とても大事な事です。

もしこれをそうでないと、いや、過去の人とは関係ない、全部が私の力だ、という意味になる。そういうことなんです。だからタイミングとしては、今この時が、非常にいいのだろうな、という風に思いますね。私も結果的にそういうことがわかるんですよ。そういうことなんだとね。だからこそ、これを受け入れるんだということになる。

だから、その業績というのは、歴史の積み重ねの結果ですよ、ということなんです。全て繋がっているんです。全肯定と普遍性の原理からそのような真実が導かれるのです。その辺は本当に岩根先生らしいよね。そういうことなんだと、自分でも後で振り返ってわかるんです。

はいそういうことです。じゃあ、二日目の午前の講演を終わります。

第八章 苦の開放と自明行

般若心経には五蘊皆空度一切苦厄とあるように、この世界は全肯定されているのであるから、この観音様の世界観に立ち、この視点から人間の一切の苦厄を開放する事が出来るのです。

その最終の手段は自明行ですが、そこに至るまでには日常生活の中の善悪の問題から一つ一つ解決していかなければ成りません。そこで、それについて、示しましょう。

●全肯定の世界観の下で自明行の準備をする

私は自らの修行の中で、全肯定の世界観を体得しましたが、ここが悟りではないのですよ。ここままで丁度、修行の半分なのです。

全肯定の世界観の体得と、自明行の実践と、この両者が揃ってはじめて車の両輪となり、修行はバランスが取れて真っ直ぐに進むのです。この二つを切り離すことは出来ないのです。

自明行の詳細に関しては拙著「人間やりなおし」に詳しく書きましたので、それを読んで戴くことにして、ここでは自明行の概略と、そこに至るまでの苦の処理のしかたを述べましょう。

私は二十年ほど前に「人間やりなおし」で自明行を説きましたが、最近はそのための準備の段階をも追加しておこうと思うようになりました。つまり、自明行は善悪を越えた世界での修行となりますが、多くの人を指導してみて、善悪の世界での反省をおろそかにしているために、バランスを大きく欠いている人が見受けられることを知りました。

救われを求めていながら、反省をおろそかにしたり、無視したりする人達が多いことを知り、それから、反省をしなくても良いと言っている宗教が有ったり、宗教指導者が居ることを知り、私はここで、反省の大切さを強調しておきたいと思うようになりました。

修行としての自明行を詳しく説く前に、もう少し一般の常識の世界で、通常の言葉で、善悪の世界で当たり前の反省が出来てから、自明行に進むのが良いと考えるようになりました。

先ず、一般的な反省によって苦がある程度は解消されることを体験してから、自明行を本格的に実践するほうが、より適切では無いかと考えています。そして反省が適切に出来るようになってから、その後にそれと並行して、自明行を実践すべきであると考えています。

●苦の分類と原因追及の是非

【肉体の苦】：病気や怪我という肉体の苦は確かに何らかの原因があって起こることです。しかし、この原因をいたずらに追及することは良くありません。初期仏教的には因縁というものが説かれていて、その原因が回り回って人間を苦しめていることになるの

ですが、そのような解釈は般若心経の「空」の理論からは明らかに間違いです。何の救われにもなりません。私の修行の体験からも、確かに様々な想念や人間の過去に蓄積した悪癖等がベクトル昇華されるときに、病気を発症したり、肉体のある特定の部分が痛んだり、苦しかったりすることがあります。

それを全肯定の世界から見ると、人間は一人で生きているのではなく、周囲の人達や関係深い人達と共に生きているので、互いに協力して、肉体を通してベクトル昇華しつつ、何らかの不都合な出来事を未然に防いでいることもありますから、その時に肉体は苦しんだり、怪我をしたりすることはあります。しかし、その原因を追及しても何にもなりません。知らなくて良いのです。

もし、ここに法則性を見いだそうとして、「この病気は何々が原因だ」と言うような心の問題を絡ませて解釈をすると、人生が後ろ向きに成り、折角ベクトル昇華したものを引き戻すこととなります。これはやってはいけないことなのです。

五井先生はその生涯を通して、今現れた病気や怪我は過去の想念行為に原因があったとしても、それを追及して、現在を苦しめたくないとの立場で、現れた病気や怪我は「消えてゆく姿」であると、一貫して仰っているのですよ。五井先生のこの一貫した姿勢を大切にしたいと思えます。

岩根先生はその五井先生の業績の上に立って、次の様に纏めておきます。

病気や怪我は、過去に原因が有るかも知れないが、その原因を今追及する必要はない。追及しては成らない。病気や怪我は病院に行って処置してもらいましょう。病院とは人間の苦を解決するために存在している事は間違いない事実ですからね。

いずれ、般若心経の「空」の存在が明らかになり、それが常識的になれば、心の問題と病気や怪我の関係は将来の精神医学で明らかになるでしょう。そうなることを期待して、今は後ろ向きに成っては成らないのです。

本来、苦はフィードバックですから、腐ったものを食べて腹痛を起こせば、二度と腐ったものは食べなくなります。この単純なフィードバックが本来の苦なのです。この時の腹痛を前世の因縁にその原因を求める必要は無いと言うことです。それは考えても分からないことですから、分からないことに屁理屈を付けて追及してはいけないのです。ましてや、相手があって、相手にそれを言ってしまっただけでは新たな苦と罪を作ります。

ただし、例外というものは常に有るのですね。何度も同じ怪我や現象を繰り返し、しかも、そのメッセージの内容が直ぐに分かるようなことであれば、それを受け取って良いと思えます。そこには緊急事態としてのメッセージがあると考える良いと思えます。考えても分からない場合は、メッセージ性は無いとして、いじり回すことは禁止です。忘れましょう。

ここに示した病気や怪我の【肉体の苦】以外には、心の問題としての苦があります。それはつまり【運命的な苦】や【想念としての苦】や【対人関係の苦】や【フィードバックの苦】や【苦ではない苦】や【自分と世界を知り得ないことからくる、悟りの欲求からくる苦】等が考えられます。これらは独立した苦ではなく、互いに関係し合っていますが、先ずは常識の世界で、善悪の世界で扱えるところまでは扱ってみましょう。

先ず、自明行の世界に到達する前に、常識の世界で一般の人と同じ言葉で、苦を扱い、それを解決する道を行けるところまで言ってみましょう。そしてその後に自明行ですからね。

●正しい苦しみの自覚を取り戻す

そもそも、苦とは与えられたものですよね。それを苦と感ずるように人間は作られているのです。そこに何か意味があると考えなければ成りません。現実を生きる人間にとって、必要な苦と不必要な苦が有るとも言えます。

そこで、苦に対して、人間は正しく反応しなければ成りません。習慣性の中で苦に対して正しく反応できなくなっていると言うことが、ここで大きな問題となります。

そこで、苦に対して正しく反応するように、感性を磨かなければならないのです。

例えば、本来、自分の体を傷つけることは苦でなければ成りませんが、それが快感となるとこれは慣性が狂ってきていることを意味します。焼けた火箸を掴んだらやけどしますよね。しかし一度やけどすれば、二度と焼けた火箸は掴みません。これがフィードバックです。焼けた火箸が心地よいと感じてしまえば、体中やけどだらけとなりますからね。

ですから、何か苦しみを感ずても、それを正しく感ずているのか、それが本来、本当に「苦しみ」なのかどうかから、疑ってかからなければ成りません。友人に忠告されたことで大きな間違いを犯さずに済んだとすれば、その忠告は感謝で無ければなりません。もしそれが、不快と感ずたとすれば、これもやはり感性が汚れていることになるのです。

人間は本来、フィードバックの意味で苦の感ずや認識があるのですから、苦を正しく感ず取ることができれば、運命は常に修正されながら真っ直ぐに進むはずなのです。つまり、苦を正しく感ず取る感性こそが必要とされているのです。

あの復活時の五井先生の胸の痛みは、正にこの「正しい苦しみの自覚」による「痛み」なのでありました。

修行によって、苦を正しく感ず取る感性を呼び戻せば良いのです。修行とはこの感性を取り戻すことでもあるのですね。苦を開放する、苦を解決すると言いますが、その前に、苦を正しく感ず取ることが必要であると言えるのです。それを私は「正しい苦しみの自覚」と言いました。人間は感性が汚れてしまったために、「正しい苦しみの自覚」が出来なくなり、正しいフィードバックが出来なくなっているのです。つまり、運命に正しく修正がかからなくなってしまうということなのです。

「正しい苦しみの自覚」を持てるようになると、今自分の運命がどちらに向かって修正されているかが直感的に理解出来るようになります。

「正しい苦しみの自覚」による苦は必要な苦なのです。そして、感性が汚れてしまった苦は必要がない苦なのです。この苦は無駄な苦ですから、いつとも早くベクトル昇華しなければならぬ苦なのです。「正しい苦しみの自覚」を持てるようになれば、自明行の準備がととのったこととなります。「正しい苦しみの自覚」を持てるようになれば、小さな苦を捉えて、自らの心の姿勢を整えることが出来るようになるのです。

詳細は拙著「人間やりなおし」を読んで下さい。

●自明行を説く

多くの人の反省というものは、言葉の上っ面の善し悪しや、言葉の分析や、精神分析になりがちですから、上手な反省の仕方を学ぶべきです。ここで言う反省とはそういうことではありません。

そこで私は精神分析や、言葉遣いや、言葉の分析に陥らないように、反省を改良して、その時自分が発した言葉を思い出し、それを一旦捉え、次にその言葉を発した「想い」にまで内観を深め、そしてさらにその「想い」の一つ奥の「心の姿勢」にまで達する訓練をして、そこで自明行をするように、行を進化させたのです。

ここで想念とまともに戦ってはいけません。消そうとしても消えないのが、想念です。ですから、大事なことは、想念と戦ったり、消そうとするのではなく、切り離すのです。切り離すことで、それが自分ではないことが自覚できてきます。先ずこの訓練をすること。

それと同時に、想念の一つ奥の「心の姿勢」にまで達する訓練をして下さい。これが自明行には必要なことなのです。

訓練すれば一瞬で「心の姿勢」を捉えて、自明行が完了するまでになります。そして常に自明行を積み重ねれば、事が起きてからではなく、何かの出来事に直面したときに、そこではもう、今さら反省は必要ないと言う所にまで達することが出来ます。

こうしてみると自明行を説く、岩根先生の教えは、本当に素晴らしいですね。

●自明行は自分で考えることが基本である

基本的にはこれで、何千年も何万年も通用する世界観とその実践の道が確立したのです。しかしただ一つ、自明行だけはもっと改良してほしいね。それはいつも思っています。自明行の手法の枝葉のことはいくらでも改良してもらってもいいんだけど、、、でもわざわざ変えることではありませんよ。本にまとめた自明行は、私が体験したことを中心に、周りの人の体験を見ながら、こんなことで人間は失敗するんだな、とか、こんな正当化をするんだな、とか、私がいろんな指導した体験を参考にして、その解決策を心の姿勢にまで戻って、キッチリとまとめあげたものです。

しかしながら、自明行の手法はまだまだ不完全だと思いますね。もうちょっと自分で考えさせるプロセスを作ってほしいと思っています。どうしても、見るに見かねて、こちらから教えて、教えて、教えて、というふうになってしまって、教える量の方が多いので、学ぶ姿勢がない人には不向きとなってしまいます。自明なのだから、自分でもうちょっと出来るようなプロセスを作り上げてほしいなあと思っています。それから、今はまだ学ぶ姿勢が無くて、自明行に不向きな人でも導けるように、自明行にまで至る導入のプロセスを作ってほしいのです。私が次の代にお願いするとしたら、そういうことですね。

それは自明行の導入部を確立して、自明行をもうちょっと一般化することでもあります。そういうところでは是非改良して行ってほしいと思います。今は、それに適した人

だけが歩める道です。しかし、導入部を作ることで、より一般化していったら、欲しいと思います。それには、皆さんの体験が必要なのです。皆さんの体験をまとめることで、自明行の幅は広がります。

皆さんにはそれをして欲しいと思います。

●自明行はこれから、さらに進化させなければならない

私ね、自明行については、まだ完成されてなくて、まだまだ改良の余地があるなと思ってますからね。これは覚えておいてください。

これは大きな声で言えないけれど、自明行を強化し、ベクトル昇華する機構を「諸法」の世界に作る必要がある。向こうの世界にこれが出来ると、修行はかなり楽になるね。つまり、心素直な人は、もっと生きることが楽になるのです。

自明行は、これは百年かけ二百年かけ千年かけてもいいから、いろいろなタイプに分けて、完全にカルテとして、整理して、記録できるようにして、このタイプはこうだ、そしたらこの人はこういうふうにしてやっていかなければだめだとね。

言葉だけでどンドン口先だけで逃げる人も山ほどいる。そんなやつを捕まえてたんではこっちが疲れるからね。もう、そういうやつは別のルートです。そういうふうにして、同じ自明行でも複数に分けていったらいいと思う。そういうことをまだまだ基本線をやっただけで、私と私に係わっている人、私のことをよく理解する人向けに自明行は出来ていると思うんですよ。世の中の人にはまだまだ無理だと思います、一般には。だからいろんなタイプが人間っているんだから、いろんな負のエネルギーを持っているんだから、それにどう対処するかということ完成して欲しいと思うんですね。それはもう私から後継ぎの方には伝えてあるから。ここでもいろいろ工夫して欲しいと思いますね。

精神科学が空を認めるとこまで発展し、色即是空空即是色が常識となる時代が来れば、自明行と一体化すると思いますよ。それまでは、適正による分類や、場合分けは必要だけれど、分析は複雑にならないように、単純化を心がけて、自明行を進化させて下さい。

●私の立場を明らかにし、世界観を明確にする

それから、私の立場を公表すると言っても、この精神世界というのは、何と云っていいんだろう、全く混沌の世界だよ。何と云うんだろうな、何言ってもいい世界って言うか、私はあまりこういう世界に、宗教の世界とは直接関わりたくないんだよ。

はっきり言って宗教の世界というのは、もうグッチャグチャで、世界一偉い人ばかりで、そこでは独善のためには何言ってもいい世界だからね。ミソもクソも一緒というのはまさにこのことだよ。ミソもクソも一緒の世界で独善の議論をされているでしょ。もうあれはたまらんね。そんなところに自分はいっていきたくないと思います。皆さんも敢えて入っていく必要はないと思います。

だから発表するという事は、「宇宙に対して公式に宣言する」ということになります

ね。ですから、これは一方的でいいのです。宗教の世界とは、まともに付き合える状況じゃ、まだないですから、「敢えて隠しはしない」という態度で十分と思います。むしろ自然科学者やそのような世界の人が、このような精神世界を相手にする時代が来ることを期待しています。

私は学者の世界に居て、科学技術の世界に長く住んでいたことから、そこで思考の基礎を徹底的に教育されました。とにかくそこは、論理性が無いものは存在する価値無し、という世界だからね。もちろん論理が全てとは思わないけれども、宗教の、ああ思う、こう思うだけの世界は、もううんざりですよ。

論理性を越える存在はあるのですが、それは超越的な存在に対しての話ですからね。論理性は人間の思考の基礎として、とても重要なのです。

そしてもちろん、論理は単独で存在しているのではなく、しかも「空」由来の論理でなければ成りません。その論理を展開させる背景には、間違いなく情緒が隠されているのです。どんなに論理性を主張しても、背景にある「空」由来の情緒性は無視できません。それはそうなのです。

しかしながら、論理のしっかりした骨格があってこそ、その情緒も意味のあるものとして生きてくるのですからね。

論理を越えることは、決して論理的に矛盾することではない、ということも重要です。論理を越えるには、しっかりと論理の骨格を組み立ててからのことなのですからね。はじめから論理性を無視して、情緒だけで、論理を越えることは不可能なのです。

一方で私は、人類共通の世界観を構築し、そこに標準的な解釈、共通の言語、そういうものを作っていくことは必要だと思いますけれどね。これは時間を掛けてやっていかなければならないと思いますね。

精神世界の現状は、まだまだ味噌もクソも区別が付かない、混沌の状態だものね。今はまだ、共通の言語もない状況です。だから、今はここで少人数でこうやってやっていて、少しずつ体系だっていく事はとても大事なことだと思いますね。体系を作っていく事ですね。

そうやって一つの形を作っておけば、次の世代の人が大きく世界展開ができると思うんですよ。そういうことをやりたいと思います。それと私は現実の世界で、経営も研究開発もやっているのだから、それもキッチリやりたいと思っています。忙しいよ、ほんとうに。

それと、皆さんもそうだと思うんだけど、この道に入ると、ここに専任したくなるんだけど、それってよくないと思うよ。現実から遊離していると、「反省は五井先生に代わってやってもらう」とか、非現実的なことを言うてしまう。それが大きな過失だと気づかない。やっぱり現実世界に係わって、キッチリ生きないとダメだと思いますよ。現実世界をキッチリ生きることと両方できないとダメです。現実世界をキッチリ生きる、それからこの道のこともキッチリ学べるということですね。これこそ二刀流ですね。

そして、現実を生きながら、地に足を付けていきながら、時々、基本線に立ち返ってみる事です。

般若心経に書いてあるような世界観にもう一回立ち戻ってみる。つまり人間の本質というのは、空そのものである。光そのものである。全肯定である。超実体・超人格である。人間の本質はそういうものであると。そういう存在が現実で生きているんだよと。じゃその通りに、光一元の方に行けるかという、現実はそのようではない。そのギャップたるやものすごいですよね。だからそのギャップで苦しんでいるわけですよ。そのところで、如何に格闘して、生きていくかという現実こそ、大事にしなければならないんです。

●自明行によって、人間の「負の側面」を処理する

そこで自分の負のものを如何に処理していくか。だから負のものをポンと捨てられればいいんだけど、そう簡単にいかないで、ベクトル昇華として、小出しにしながら昇華していかなければならないんだ。そこが人間にとって苦痛なんです。人間から見ると苦痛なんだよ。ところが指導している側から見ると、指導している方から見ると、必要な体験なんです。その体験を通して学んでいくわけだから。だから学びも最初の体験で学べればいいんだよね。だから効率よく生きるということです。それが先生の言っていることです。ここにいたらものすごく効率がいいんだよ、本当はね。先生の言うとおりにすると、苦勞が全くないなんてことはないですよ。だけど最低の苦痛で、効率よく生きていけますよということです。

精神が老化すると、自明行が嫌いになります。若くして既に精神が老化している人がとても多いのが実態ですね。

私はものすごく効率いいよね。最初にやることをやっちゃったから。私は人生は楽しくて楽しくてしょうがないですよ。それは死ぬ間際にそうなってもいいんだけど、せっかく生きているんだから、出来るだけ若い時からそうなった方がいいじゃないですか。だから、全ては必要があって与えられてるんだと。だから積極的に生きると、受け入れる、修行だと、そう思うことですよ。

それから、何かそこに引っ張り込まれない。何かあってもね。そこに引っ張り込まれるとますます苦しくなるからね。知らなくていい秘密を追いかけて、かえって苦しむということもあるしね。そういう意味で、まだ悟っていないのに、知らなくてもいいことを知ろうとして、かえって苦しむということがありますよ。知らない方がいいんだということもあるから、上手にそこはコントロールして下さい。敢えて手を突っ込んで、ウワァーッとやってやると、ますます抜けられなくなってしまうことがあるから。そういうことは山ほどですよ。

●瞑想によって、想念から抜ける

自分でわかるでしょう、これ以上入っちゃうと自分がもう抜けられなくなるのは。抜ける方法も覚えてらいいですよ。それでも入ってしまうから。それはもう瞑想ですよ。そして拍手も打ってもいいですよ、皆さん自分でね。入ってしまったら、目をつぶって、

一気に瞑想してそこから抜ける。これを覚えてくれるといいですね。私なんかもこれは徹底して訓練しましたよ。

これは絶対覚えるべきです。私も昔は職場に行きながら瞑想やってたんだからね。職場から帰宅すると、体中泥まみれになって帰ってくるわけです。本当にクソまみれという感じです。そうしてへトへトになって、這うようにして帰ってきて、そこで30分くらい柏手を打ってね、そうして、やっと楽になるとかね。そういう事を繰り返していました。

職場というのはそういうところですよ。良いか悪いか、じゃない。グチャグチャいろんなことがある場所なんだ。そういうところから家に戻ったら、如何にそれを抜くか、それを切り離すか、ということをお前さんも勉強したらいいよ。自分なりに覚えたらいいよ。柏手を打ってもいい、講演のテープを聞くでもいい。朗読を聴くでもいい。ともかく目をつぶってそこから抜けること。何とかして抜け出ることを覚えて下さい。ここを覚えると、ものすごく楽だね。

想念と戦ってもだめですよ。想念を切り離しつつ、瞑想で色即是空で、空に至り、そこで、ベクトル昇華してもらうことが必要です。

いつときも早く、この処理方法を体得して下さい。これで、想念の世界から抜け出せます。想念があっても、それが切り離れた状態で、瞑想には入れます。

これを覚えられないとなかなか大変ですよ。仕事場に行って帰ってきたり、それから接待でどこかあちこち行って、歓楽街に行って帰ってきたら、もうウワーッと叫びたくなるくらいだよ。こんなに、お化けみたいになっているんだよね。それはもう一所懸命そこで清めて、1時間かけても2時間かけてもやるといいですよ。そのまま寝たら、かえっておかしくなっちゃうから。入り込まれてしまっただね。もう2時間かけてでもそれは清めた方がいいと思う。自分なりの方法を覚えて下さい。

一つは講演のテープを聞くということね、これでもいいですよ。私の講演には強い統一ベクトルが発生しているからね。つまり般若波羅密多ですよ。目をつぶって聞く。そうすると自分が瞑想しているのと一緒に、色即是空になりますから。色即是空ってしょっちゅうできますよ。色即是空、空即是色と。今ここで瞑想してても色即是空、空即是色ですよ。皆さん気づいているかどうかかわらんけども、みんなと色即是空に行っているんだよ。それでまた空即是色として戻ってきてるんだよ。

これを繰り返すんです。般若波羅密多のベクトルを持つ音声を聴いていけば、それが防御になって、眠ってしまっても良いのです。これを繰り返せるようになると、ものすごく楽ですから。

私は、いつもそれをしているから体がもっているんですよ。これで体をもたしているんですよ。いってかえって、いってかえって、あっち行ってまた戻ってとね。

そうすると瞑想しているのに、電話がかかってくるんだよね。どうしようかと思って、片目だけ開いてこうやって。もう半分はこっちで半分は向こうとかね、そんな時ありますよ。それはイルカからヒントを得たのですよ。イルカってね、片目つぶって眠るとか

いうでしょ。あ、そんなこと出来るんだ、俺もやってみようと思ってね。

出来ているのかどうかわからんけど、これは新しい瞑想法を生み出す挑戦のつもりですけどね。

般若心経を書いている時なんか、いつも昼間から瞑想しているでしょ。すると経営者だから、電話かかってくると、出ないわけにいかないのです。身内とか社員だといひ加減な返事で「ああ、わかった、わかった、それじゃあとで。」くらいで済むんだけど、お客さんだと「はい、わかりました、」とちゃんと対応しなければね。そこは使い分けて、片目で瞑想というのもやっている。本当に出来ているかどうかわからないけれどもね。本当にそうなっているかどうかわからないけれども、半分は現実において半分は空とかね。こんなことをやりながらね。

ここ洞爺湖の研修施設に来て一人でやっているんなら、何時間も瞑想しながらできるけど、現実社会というのはそうじゃないでしょ。グチャグチャで、ウワーッとやってる中で、宣伝車が走ってたり、大きな車が走ると揺れたりね、そういう中で瞑想しながら仕事している。これをやっている人はあまりいないんじゃないかと思うね。

静かな環境はそれはそれでいいんだけど、そういう日常の中でそういうことをやることも大事ですよ。覚えて下さい。私も何か少しはできている気がしますよ。そういう中で瞑想しながらあっち行って降りてきて、また書いたり、何なりしてやっているわけです。皆さんもそういう工夫をすることがいいですね。

●一年に一回、集まりましょう

皆さんが、洞爺研修会に年に一回来ると、みんな、たのしそうだなああと、見えていますよ。みんな何か警戒感がなくてここにいられるんだよね。何か警戒感がないって、ああいいなあと思って見てますよ。だからここにいる時は、すごくリラックスしていると思いますよ。だから、一年に一回ここに来るということはものすごくいいことだと思います。そこが基準になるからね。ところで、361日は娑婆で、残り4日は洞爺に来て、これで十分にリフレッシュできますね。この場が有ると無いとは、大違いですよ。こうやって少しずつ体験を積み重ねていくと、とてもいい人間性が育っていくんじゃないか。切り替えが出来るからね。

それではまた来年ここで会いましょう。

はい、それでは一般向け講演会はこれで終わります。

第九章 指導者として知るべきこと

第16回 第3日目後半の講演は幹部候補生向けの最終講演となりますが、この書の主旨に合致しているし、重要と思われるので、ここに纏めておきます。

●救われがたい人間を相手にする

確かに般若心経は面白いですよ。見事に世界観が説かれています。ただ人間はそれだけでは現実をちゃんと生きてはいけないんですよ。人間の持っているどうしようもない「負の側面」てのがあって、それをどう扱うかというところが一番問題ですね。だから今日ここにいる人は指導的な立場に立つ人だから、「負の側面」を扱っているんだという自覚を持って下さい。単に欠点をなおすというだけではなくて、どうしようもない人間の持っている「負の側面」に直面して、それをどう扱うかということを、古今東西、歴史的に多くの人がいろいろ工夫してるんですよ。人間の「負の側面」って、扱ってみるとどうしようもないところがあるよね。自分に対してもそう思うでしょ？。

もし、そう思わないという人が居たとしたら、それは全く自分が見えていない人ですね。ですから、自分では無い相手となると、これはもう、さらにどうしようもないところがあるんですよ。

それで、全ての宗教はみなとても苦労しているわけですよ。人間というものは救われ難いものだという事ですね。要するに自分一人でも大変なのに、人を導いて、そうするなんてのはもっと大変だ。これはもう、神様無しには絶対に無理ですね。

宗教とは何かと問えば、それは救われることです。そこで、そうであるならば、「救われ」とは何か、と問わざるを得ないのです。「救われ」とはその前提に苦しみというものが有るから成り立つ言葉です。

人間には常に生きる苦しみというものが有って、その苦しみから救われるために宗教があるのです。しかし、その苦しみというものを正しく捉えていないと、いたずらに苦しみを増加させることにもなりかねないのです。「正しい苦しみの自覚」こそ救われのための出発点であり、そのためには自明行が必要なのです。

現実の人間というのはどうしようもないくらい、「負の側面」を抱えていて苦労しているわけですよ。それと格闘しているわけですよ。指導的な立場に立つ時は、それをどう扱うか、そこのところをやっているんだという自覚が必要だと思います。悪いものは、叩けばいいというのなら、これはすごく楽なんだけれど、それだけでは解決しない。それが悪さをして、場を汚せば、とりあえずはそこを拭き掃除するけれどね、根本的にど

うするか、というのは非常に大切な事です。

上手にそのエネルギーを逃がしてやりながら、こっちでそれを何とかするとかね。もし問題が明らかになって、その人が、直接関わる人であれば、ふさわしい場所に移行してもらうことも有効だと思います。そういう工夫をしないといかんでしょな。

今日の会合は幹部候補生以上ということで、必ず人の上に立って指導的な立場に立つ人達なんだから、そういうものに直面した時には、取り敢えずは、悪を叩いてもいいけれど、ただでそれで解決じゃない。そこのところは、どうしようもない負のエネルギーを持っている者をどういうふうに解消して、導いていくか。だからベクトル昇華と言って、如何に昇華させるかということのを大事にしたいと思いますね。

どうしようもないくらい、手の付けようが無い人間という意味で、錯覚の極みの「偉い人間」が時々いますよね。私はさんざん言っているから、皆さんがこの錯覚に取り込まれることは滅多に無いと思うけれども、日頃から注意していなければなりません。

修行する立場を忘れ、教える立場に立ってしまうと、気づかないうちにこの「偉い人間」のベクトルに占領されていることがあります。相手を見下していたり、自分が神のように思えたり・・・まあ、それと気づいてから、ベクトル昇華、でも遅くはありませんが、常に、如何なる時でも自明行の姿勢を忘れてはいけません。

皆さんは岩根先生の教えを知識では知っているから、その知識を切り出せば、どんなに正しいことでも言えるのですよ。でもその事は、岩根先生に感謝こそすれ、自分がその通り出来る事とは違うのであり、一線を画す必要があるのです。自分がどんなに正しいことを言えたとしても、それがそのまま自分の姿だと錯覚してはいけません。人の上に立つ人は、常にそのことを肝に銘じて、謙虚さを失わないように注意している必要があるのです。

ところで、いつ如何なる場面においても、一つ安心なのは、そのどうしようもない「負の側面」を含めても五蘊皆空なんだということです。全ては神の愛の導きなのです。ということです。この1点に於いて、既に人間は救われているのですよ。

統一ベクトルの祈りを唱えるだけで、後は一切何もしない。「全ては神の愛の導きなのです」の祈り言葉は統一ベクトルを持っていますから、間違いがあっても、いずれは、軌道は修正されるときが来ると言っても確かに間違いではありません。

この1点に於いて、「全ては神の愛の導きなのです」だけで人間は救われるはずなのです。

確かに、そのような形の信仰も確かにあります。しかしそれを実際にやってみると、人間はそれで救われるほど、単純には出来てはいないという事実と直面し、それを嫌というほど知らされることとなります。ここで信仰は大きな壁にぶつかるのです。

しかし、大きな目で見れば全部肯定されているということは安心ですよ。そこが大事ですね。『全ては《超越人格》の愛の導き』という中で、肯定されている中での出来事なんだということも忘れないようにしなければならぬですね。

「負の側面」と戦っていると、そこに深く入り込んでしまうと、時々忘れるからね。そこで対峙しちゃうからね。それはしょうがないですよ。私だって対峙しますよ。戦いになりますよね。そういうものと直面するときはそうなのです。

●「正しい苦しみの自覚」さえ持てば救われる

宗教にはいろいろな信仰のタイプがあります。仏教では自力と他力という分類があります。他の宗教であってもこの分類は共通しています。でもこれは、私に言わせれば本質的に同じものです。生かされている肉の身の立場に徹して、そこに身を置いて、生かしている側を見上げて行をするのが他力で、生かしている側の主旨を受け取って、自らをコントロールしようとするのが、自力でしょうね。

どちらにも長所があると同時に、短所もありますね。ですから、両方を知って、同時にやるのが良いと私は思います。

般若心経的に言えば、空中の外側の「色・受想行識」と空中の『色・受想行識』との両方の立場を知って、同時に行をすることを私は推薦します。

私は「正しい苦しみの自覚」と言いました。そしてそのためには「自明行」が必要であると何度も言いました。

世界中の如何なる宗教に於いても、例外なく「正しい苦しみの自覚」が必要なのです。浄土教のような他力の論理を間違っただけで解釈すると「正しい苦しみの自覚」さえ、ましてやそのための「自明行」すら必要が無いように解釈出来てしまいますが、他力とは「正しい苦しみの自覚」に至った人が行じて初めて十分な意味があり、本当の救われを得るのですよ。

法然も親鸞も一遍上人も、自らの持つ人間の「負の側面」に直面し、そこに「正しい苦しみの自覚」を持ったからこそ、それを解決しようとして、絶対他力に至ったのですからね。その事を決して忘れないように、特に重要視しなければなりません。

法然も親鸞も一遍上人も一切自らの持つ人間の「負の側面」に気づかずに、そこに「苦しみの自覚」を持たずに、念仏を唱えたのではないのです。

しかしてすよ、もし、これを「正しい苦しみの自覚」を持たない人が行じると、反省しなくても、たとえ泥棒をしても、念仏を唱えていれば救われるというような方向に流れてしまい、社会秩序を一気に混乱させますね。

一遍上人は最後は弾圧されますが、それは間違っただけで行じる人が増えたために、周りから見て、その振る舞いに恐怖を感じ、社会不安が広がってしまったのですよ。それは現代でも原理主義を唱える人達は、そのような傾向がありますね。

そして、「正しい苦しみの自覚」が出来れば、後はフィードバックが自然にかかりますから、どのような信仰の形でも、その人はもう既に救われているといえますね。

ですから、「正しい苦しみの自覚」を持たないことが常に迷いなのです。救われていない状態なのです。

●自明行が出来るようになるまでは善悪の価値観の中で指導する

自ら内観して、自明行として自らの心の姿勢の歪みに気づき、それを正そうとするの

であれば何も言うことはありませんよ。それが本当の自明行ですから、他からは殆ど導くことはありません。

そこで、自明行として正面から説くことが出来て、本人も自明行を正面から行を実践しようとするところまで導くまでは、現実の常識的な善悪の中で説いて、その人の抱える「負の側面」を分かるように示してあげることが必要です。

ですから、一般には、物事を善悪の中で捉えて、問題点を指摘して、それを正すように指導すれば良いと思います。それが的を射た指摘であれば裁きになっても良いと思います。的をそれた状態で裁きになるのは、新しい罪を作ることになるので避けなければなりません。指導者は根底に愛があれば、裁くことが目的で無ければ、形の上では裁きになることを恐れてはいけません。又指導される方も、裁きになっていることを否定してはいけません。組織の中であれば常に問題は発生していますから、それを捉えて注意忠告する機会は沢山あります。

実際にそれを改善してもらわなければ、組織は動きませんからね。忠告する方もされる方も、問題解決には、お互いに責任があるのですよ。このような関係は指導には適していますね。

私がいつも言っているのは、相手を治す、正すというよりは、その出来事を自覚してもらうことが現実的でしょうね。今の自分が今表われている負のエネルギーというのは何なのかを見せてあげること。教えてあげること。こっちから見えているものを本人にも自覚させるということがまず大事だと思いますね。

あとは時間をかけてなおさないとうとうしようもないよ。だからまずは立場を位置付ける、つまり位置づけさえできればいいとします。治すのではないということです。位置づけだけであればまずはいいいんだということを、指導する立場にある人は常にそこに戻ってほしいと思いますね。本人には、「治せ」と言っていないんじゃないですか。

しかしですよ、組織の中では、治さなくても良いと、分かればいいんだと悠長なことは言われていませんからね。この時は無理にでも治してもらいましょう。

しかし「治せ」と言っても治らないからね。「治せ」というのはいいけれど、治らないということ承知で言うということ。その上でそういう言葉も使いながら、「治せ」と、、、。まあ、もう少し丁寧に「治してくださいね！」とか「治したらいいよ」とか、そこは丁寧にいうとしても、第一の目的は今すぐここで治すことではなくて、本人に自覚してもらうことで、その問題を正しく位置付けすることです。少なくともあなたは被害者ではないんだよということね。本人は多くの場合、被害者だと思っているからね。皆、どこかで被害者になっているんだよね。お前は被害者じゃないよ、加害者だぞと、その区別さえキッチリ本人に自覚させれば、後はそれ以上はなかなか無理と思うことです。そこまでやるということが大事です。位置づけをキッチリしてあげること、これは大事なことだと思います。

こちらが、この人は直ぐには治らないと判断すれば、組織の中では配置替えしかないでしょう。

だから一般には、第一の目的としては、位置づけをすること。言葉は「治せ」という

言葉を使ったっていいんですよ。だけど治るはずはないとわかって言ってもそれはいいんですよ。そこは人間にとっては永遠の課題で、如何にその人間の「負の側面」を上手に扱うかということです。

如何にして、その「負の側面」を扱うかというのは、これはとても大事なことです。忠告が出来て、修正が成り立つ関係がフィードバックがかかる良い関係です。

中には、フィードバックのための指導をすることを否定し、毛嫌いする人も居ますが、これは偽善者ですね。

これは明らかに間違った生き方ですけど、中には、そういう人もいるわけですよ。そうするとフィードバックがかからない組織になる。つまり無責任な人の組織になる。フィードバックのかからない不安定な系になっちゃうんですね。しかもそれが自分の責任とは思わない。自分は他人のいやがることを決して口にしない、根っからの善人のつもりでいる。これは形だけの善にとらわれた姿と言うことです。時には、責任上、人のいやがることをも言わなければならないのが、人の生きる道なのです。つまり真理なのです。

フィードバックのかからない系というのは非常に不安定ですよ。一番わかりやすいのは、私がどこかで話したことあるけど、車のブレーキというのはある意味フィードバックなんだけど、そういうふうに位置づけてみると、じゃあ、ブレーキなしでここから札幌まで行ってみろというようなものです。原理的には行けるよね。だって前進する力はあるんだから。スピードコントロールはできるんだし。ハンドルは使えるのだから。しかしそれは現実問題として無理ですよ。ブレーキというのは絶対必要なんですよ。フィードバックという意味でね。

学問として見たとき、ブレーキが本当にフィードバックかということ、ちょっと違うかもしれないよ。フィードバックというのは、ちょっとそういう概念とは違うんだよね。

だけどわかりやすく言うと、そういうことです。だから絶対に「負の側面」に触れないという人もいますよ。でもこれはおかしくなります。結局誰かがそれをしなければならぬから、周りの人にしわ寄せが行くことに成る。本人はそれでうまく行ってると思う。非常に変なおいの人になりますね。自分の問題も触れない、人の問題にも触れない、全然負には触らないという生き方を選択してしまう人も中には、いるんですよ。これをやるとまた不安定なおかしな人間が出来上がってしまうんですよ。

やはり上手にフィードバックを掛けながら生きていく、その人なりの上手な道を発見しなければならぬですね。持っているものが生まれながらに違うからね。だから自分に通用することが人にも通用するとは言えないですよ。

●様々な問題を自明行に結びつけて処理する

そこでですが、般若心経的に言うと、「心無罣礙」の「罣礙」というのは、何なんだということ。罣礙をどう扱うかね。「罣礙」というのは心に引っかかっているものをいうけれど、これって、ものすごく深いですよ。

普通は自覚が無いって思うことが山ほどある。強烈に引っかかっていることはすぐわ

かるから、これは簡単なんです。なかなか自覚できないもの、それが重要な「罣礙」なんだよ。みんなが気が付いていない「罣礙」が山ほどあるんですよ。

だから「心無罣礙」で済ましちゃっているけれど、「心無罣礙」ってものすごく深いことですよね。「罣礙」をなくすということは最終的に自明行に通じます。その対象は修行の段階でそれぞれ異なるのです。だから「心無罣礙 無罣礙故」というけれど、そう簡単なことではないんだよ。ですから、あの一行のうちのたった数文字を自明行にまでつないで欲しいですね。

どれだけの人が、自明行にまでつないでくれるかな。般若心経はそういう意味では、世界観から自明行まで凝縮されているといえますね。

悟りの方法は、先ずは「依般若波羅蜜多」というところかな。フラクタル共鳴をする行を日頃から積み上げていく、これは大事ですよ。

ここでは【人類愛の祈り】というものを基本とする。祈りの行ということを経験的な行とする。祈りだけではなくて、フィードバックの位置づけとしては、「罣礙」を取ることに対応する。それが苦しみの自覚に対応する。心の姿勢は「罣礙」を知ることによって分かる。それが自明行に通じる。正しく「罣礙」に気づく必要がある。それが正しい苦しみの自覚なのです。そういうふうな位置づけになりますね。

宗教家が苦勞したところを、皆さんも一緒に疑似体験してほしいということですね。そうすると、どうすればいいか見えてきますよ。ということです。

瞬間的には裁いたって一向にかまいませんからね。いけないのは自分を、自分たちを裁き続けること。自分の中でずっと引きずって、いつまでも同じ事を繰り返している。そういうことがよくないです。裁くことも時々には必要です、自分も、あるいは相手であっても。わからせるための瞬間のパワーとしては、裁きというのもあっていいです。でも、ずーっとそれを引きずって自分を裁きつづけて、何年経っても同じ問題で自分を裁き続けているのはよくないです。だから自分のことと言えば、自分のことというのは自分を裁かないのではなく、逆に言ったらいったん明らかにすること、いったんキッチリ裁けばいいんです。一回裁いてしまえば、二回裁く必要はないということです。もうそれで終わりです。

これを中途半端にしてるとグッと押し込んでおくと、またフニャフニャと出てくるからね。中途半端にやると何回でも繰り返し出てくるからね。そういうのはだめですよ。それならば逃げないで、のどに手を突っ込んで、はき出して、白日の下にさらして、そして正直に見て、自分で正直に裁いた方がスッキリします。そしてあとはもう終わりとする。あとにそれから出てくるものは、単なる記憶がよみがえったにすぎない。もうこれは無視して良いということです。その辺はみなさんも自分のこととして、いろいろ経験しているだろうから、わかると思うんだよ。人間の心というものは扱いにくいものだというのね。自分について正しく処理が出来れば、そのまま相手に出来るのです。自分に正しく出来ない人は、指導者になってはいけません。

自分の自明行を深めている人は、それが必要なときには、裁いてもいいのですよ。それは断言します。裁く方向に深入りするなという意味に理解して下さい。そういうことはあまりビクビクすることはないんだよ。これは人に対してだって、おなじです。

基本的に裁くことが目的ではないんだよということですよ。そして、如何にベクトル昇華をさせるかです。実態を明らかにして、位置づけない限り、何も消えませんからね。嘘があっては消えません。嘘のまんま、自分が正しい、自分達が間違っているのに正しいと思っているものをどうやって消すんですか？ これは消えませんよ。間違いは間違いだという事まではハッキリさせない限り消えないんだからね。求められれば、そこまでは手伝ってあげなければならない。その後消えていく姿に、自明行をしてそこに光をあてる。あとはベクトル昇華として位置付けるということです。

そしてもちろん、本質的ではないことなら、どちらでも良いと言うことは山ほど有りますからね。どちらでも良いことに、自己主張して一方を言い張るのは、心の狭さの現れですから、そちらの方を問題にすべきです。このような相対的なことは善悪の問題ではなく、多様性の中で位置づけて、肯定すれば良いのです。

●全ての宗教を段階として位置づける作業

そういう意味で、皆さんにこれからやってもらわなければならないこととして、私は後継者であると一昨日受け取ったから、これからやらなければならないことを急いで纏めなければならない。

先ず最初に、いろんな宗教を、私が白光真宏会を評価したように、全てそういう目で見、ここではこういうふうにする、ここではこうやっているというふうに、リストを作っておきたいんですよ。そうすると、評価できますから。

五井先生は人間の負の側面を「消えてゆく姿」として捉えた。岩根先生は負の側面を含めて、「全ては神の愛の導き」と捉え、その中でのベクトル昇華と捉えた。これが重要です。全ての宗教には独自のとらえ方があるのです。それを取り出して評価する必要があります。善と悪の対立や、神と悪魔の対立として捉えるものも有るでしょう。因縁として捉えるものも有るでしょう。

私は「全ては神の愛の導き」と捉えましたが、これは最終局面なのであり、そこに至るまでには、因縁因果も、神と悪魔の対立も必要だったのであり、段階として肯定することになります。そこに悪魔が居ると考えれば、そのように見えます。そこに因縁が有ると考えれば、そのように見えます。それが、そこに有ると認めれば、そこには、或る種の法則性があるようにも見えてしまうのです。意識の世界とはそのような世界です。

そこで、それらをも段階的に認めつつ、最終局面として「消えてゆく姿」を経由して、「全ては神の愛の導き」にまで至ることになります。そうすることで、全ての宗教は位置づけられます。

宗教の中には、当時の時代背景によって、歴史の中で歪んでしまって、おかしい方向

にしているのもありますよね。仏教は般若心経によって生まれ変わっています。しかし、その後の大きな混乱によって、本質を失いかけています。一方、キリスト教は聖書編纂時にローマのコンスタンチヌス帝の意向を受けて、大きく歪んでいます。

たいていの歴史のある宗教は、そういう負のエネルギーをいっぱい蓄えてしまってますね。

仏教でもキリスト教でもね。歴史の中ではいろんなことがあって……。今は個人でなくて宗教として言った場合ね。さっきは個人の話でしょ。

今度は宗教として見た場合に、宗教の中にいろんな負のエネルギーをため込んでいるものがあります。そういうものが何であるかというのが、こっちは客観的に全部評価できるようにしておいてほしいなと思います。論争することはないんだけど、こちらとして、それはわかっていた方がいいですね。只相手が望まないのに、自明行は手伝ってあげられませんからね。

相手が望むまで待たなければ成りません。それは100年でも待たなければ成りません。

常に気を付けなければならないのは、裁くことが目的にならないことです。否定するのではなく、肯定することが目的です。私は白光真宏会に対して、そうしていますよね。何とかして、一部手を加えて普遍性を回復し、宇宙の中に肯定する道を探してあげるのです。

でもそういう時には、その今の問題が正当化されているのでは消えていかない。だからまず正しい光を当てて問題を浮き上がらせて、位置付けし、それを相手が自覚したときから、初めて消えていく姿だよ。ハッキリしないまんま、自分が加害者なのに被害者だと思っている事を肯定することは出来ないのです。

だからやはり事実を明らかにしなくてはならない。事実を明らかにした後、それを消えていくものとして赦しましょうということだね。だから事実を明らかにするということは大事なので、そこに嘘があったのでは消えていかないんですよ。

ただし、何でもかんでも事実を明らかにする必要はありません。フライデーみたいなことを言っているではありません。人の秘密を暴いて、正義面するくらい嫌らしいことはありませんよね。

それが本質的で、そこに真理に大きく反する事実が隠されている場合は、或いは反対に、そこに本質的に、真理が隠されている場合は、それを明らかにする必要があるのです。

今話しているのは、個人の自明行からの発展としての、宗教の自明行ですよ。

相手が望めば、相手自身で位置づけをしてもらいます。こちらはあまり口出ししないことが良いですね。その宗教出身の賢人候補が世界賢人会議に参加して、賢人の資格を取り、何十年も掛けてその宗教の自明行をするつもりで当たれば良いと思います。

こちらが評価した自明行評価リストが先にあって、それは相手にそのまま伝えるのでは無く、相手に考えさせて、こちらと合致した、分を自明行成就として、こちらだけが

評価しておけば良いと思います。

もちろん、聞き取りの中で、こちらの表が途中で変更されることもあるでしょう。相手が望めば、最終結果は合格か不合格だけの通達になります。ただし、ここにも無謬性の限界を当てはめて、本質的で無いことでは、こちらの考えを修正する余裕を持っておくべきです。地上の**使徒**が出来るのはそこまでであって、最終判断は救世の大霊団に委ねておけば良いのです。

通達は原則必要はありません。ただ、3人目の**使徒**としてはこちらは黒子に徹して、こちらの評価に応じた対応をすることになりますね。絶対価値体系の中で評価されて、位置づけられます。

もちろん、歴史の中での貢献度も評価されます。評価は救世の大霊団に伝えることになります。ここで報告する意味とは、形式を整えるという意味です。確認作業と言う意味です。そこで固定するという意味です。儀式とも言えるでしょう。

それから先は救世の大霊団が人類の運命の中で大修正をしていくことになります。

●全肯定の世界

全肯定の話ですが、以前に話したけれど、自分から出てくるものは最後は全部肯定できるまでになるのですよ。怒りであれ、何であれ、全肯定できるのです。人間はそこまで行けるんですよ。「五蘊皆空」の世界までね。観音様のところまで行けるんだ。それは私ぐらい徹底して自明行をしたらそうなれるんだよ。

では一生自明行をするのかということそうではないんだね。自分が空の中に入ってしまって、空の中からは自分は行動できないとわかった途端に、全ては肯定できる。空から出られなくなるんだよ。いいね。

どこにどう行こうと自分は空の中なんだ。そうになると、もう自分を裁く必要はもうないし、表向き常識で間違っている、もう反省もしません。ただ周りの価値観に合わせてようとはしますがね。そこまでいけるんだ。そこに早くみんな来てほしいな。

私の私たるところでは、全くそうなのですね。空の中からは行動できるのです。そこには、もはや反省は必要ないのです。

しかしそれであっても、無謬性の限界はあるのです。それは押さえておきましょう。

例えば、私は水泳が苦手なので、ここは「空」の中から・・・とはなかなか行かないんだな。「力を抜いて」、とか「水に体を任せて」、とか、何度言われても、難しくてそれが出来ない。そんな私の、だらしない姿を見て、家内は大喜びしていますよ。岩根先生にも、こんな苦手なところが有るんだ、とね。ですから、無謬性とか、その限界というのは、本質的なことに対してであって、字を間違えないとか、計算を間違えないとか、そういうことではありませんからね。

さて、それでは本質の所ではどうかですが、私の無謬性が崩れる時があるとするれば、それは守護神の世界で、宇宙と人間の設計思想に係わるところでしょうかね。肉体にまつわる想念と霊体との結合の度合いについては、いろいろ参考意見として言いたいことはあります。しかし、そこまでの高度な場面では、私の考えは一つの考えに過ぎないと

いう場面はあると思いますね。しかし、それであっても、人間を体験している側の、私の意見というものは重いのです。

さて話を戻して、皆さんも時々、「空」に行っているんだと思うことですね。時々はそのところに行っているんだと分かってくると、人生が本当に楽しくなってくるし、生きてることが本当に感謝だし、未来を明るく生きることができる。

自分は予言者じゃないし、霊能力者ではなくても、ちゃんと未来を知って生きてることがわかるんだよね。未来との関係でいま一番いい所、一番ポテンシャルの低い所にいるということなのです。これ、どういう意味かわかる？ 一番安定したところにいるということなのです。過去も未来も含めて、いま一番安定した位置に今があるということが自分で分かっているんだよ。だから何があってもあわてないんだよ。外から見てどう見えようと、そこが一番いいところだとわかっているということですね。本当に怖いものがないというかね、本当に安心して生きていけるという事。そういう世界があるんですよという、そこをやはり見せてあげないとね。

人間の「負の側面」ばかり扱っていてもきつからね。人間はそうなれるんですよということも知って下さい。

●全肯定を説きながら、人間の「負の側面」を扱う

だって人間だもの。いいですか、人間は「空」なんだよ。空なんだから本来はそうなんだよ。だからどんなに遠回りしてもいいんだったら、何があっても今このままで全肯定出来るんだよ。さっきまで、「負の側面」を扱ったけど、全肯定と言っておきながら、「負の側面」を説くのは「それは矛盾ではないか、」という人が居るかも知れませんね。これはとても根本的な重要な質問ですよ。このことを、キッチリ説明しておきましょう。

これは一見矛盾に見えるけれど、決して矛盾では無いのです。このまま人間を全肯定しようと思ったら、今その「負の側面」も含めて、それでいいと言ってもいいんだよ。でもね、それでもいいと言っちゃうと、ものすごい修羅場がここにできてしまうのです。でもそれでもいいと言うのなら、それでもいいんです。そこに修羅場が発生しても、それでもいいと言おうとするならば、そのまま全肯定は出来るのです。

だから、原理的にはこのままでいいのです。「反省しなくたっていい」と言うことだって、原理的には成り立つのです。しかし、そこに引っかけるとは、人間は道を踏み外すことになるのです。道を踏み外しても肯定しようとするならば、それは出来るのです。

言い換えれば、負の側面を正面から扱うこと無しに、つまり自明行無しに、人間を完全として扱うことは大変危険なのです。もし、人間を神の位置に置いて説くとするならば、徹底した自明行が必要なのです。必要と言うだけではなく、自明行を成就していなければ、とてもとても、人間は神であるとは言えないのです。自明行を成就することなしに、人間の完全性を説くことは身を滅ぼすことを意味します。つまり、「反省しなくてもいい」と「人間は神である」とは両立しません。

五井先生もその事は十分にご存じであったことを、私は知っています。これは、道を説く人が心底から理解して、注意深く実践しなければならないことなのです。

大切なことなので、詳しく説明しましょう。

悟りの道を登山道にたとえて、頂上を悟りとしましょう。そこで、登山するとき、登山道を外れても良いのか、と聞かれれば、どこをどう歩いて行っただって、頂上には出られるよ。とはいえますからね。生悟りの人は、ひとにそれを進めますよ。登山道にとらわれなくて良いのだよ。登山道を外れたって、大丈夫ですよ。どこからだって頂上には行けますよ。と言う人は道に外れた人なのです。登山道から外れないように歩くことを薦めるのが、愛のある人なのです。しかし、そのためには、登山道を外れていく人を厳しく注意して、登山道に引き戻さなければならないのです。

しかし、いいですか、登山道を外れたって、どこを通っただって、頂上に行けますよ、というのは、原理的には正しいのです。でもこの原理に惑わされてはいけないのです。

ここのところが、生悟りと悟りの違いなのです。これは般若心経の、悟り A と悟り B の違いですね。

しかし、人生の重大場面では、この原理が役に立つときがあるのです。だって全肯定なんだから。だってもともと空なんだから。

それは誤って登山道を踏み外し、道に迷ったときです。反省したくない人が、道を踏み外したときです。厳しい運命に直面したときです。道に迷って、先が全く見えなくなることは、人生に一度や二度はありますからね。その時はこの原理に戻り、道無き道をかき分けて、上を目指すのです。そうすれば、登山道に戻ることが出来るのです。自分が遭難したという自覚があれば、必死で神様を呼びますから、助けてもらえますよ。しかし、遭難した自覚が無ければ、間違いなく遭難しますね。

登山道を外れて登山をするなんて、それって普通は遭難しますよね。つまり、「反省しなくたっていい」と言った途端に、人間が生きていくうえでものすごい苦痛になるからね。「反省しなくてもいい」というのは、それは遭難してもいいという意味なんです。ですから、この原理は、たとえ死んでも、また次の世があるんだから、遭難したっていいという意味でもあるのですね。ですから、一応それを「いい」とは言わないことにしてんだよ。登山道を歩くことにしているんだよ。

言っている意味わかる？ もっとうまく表現できるかな。全部肯定できますよというのは、空からはみ出ることはないということですよね。

はみ出るというのは、登山道以外をいいます。ここに登山道という印を一応作ってここからはみ出るという意味になるけど、登山道以外も実はずっと連続なんだよ。ここも空だけここも実は登山道以外も空なんだよ。だけど登山道を外れたところを空というと、事故が発生するし、遭難するかも知れないでしょ。このまま全肯定というのは、修羅場が発生してもいいと言うことなのです。本当にこのままで、いいというなら、原理的にはこのまま肯定できるのです。でもそれは、現実を生きる普通の人間にとって、いいはずはないとわかっているわけだから、それは肯定しないことにしているのですよ。

でも、ここまでくれば、もうすべてが空と言えらるんです。本当はここから空だという

境界はないんだよ。

そういう意味で、あるところまで近づいてしまえば、そこからはもう空から離れることはないということなのです。

これは「五蘊皆空」の観音様の視点を説明しているのです。例えば子供が転んでけがをしているのを短い目で見れば、ダメっというけれど、ちょっと引いてみたら子供も一回転んでけががぐらいしないと、痛みも何もわからないよね。じゃそれはいいのか悪いのかと言ったって、言いようがないよね。目先の目で見れば子供はころんだら、ああ大変だと思うけど、本当に大変かという大変じゃないでしょ。子供も転ばないと成長しないでしょ。だから本当は良い悪いというのは、厳密に言えば、ないんですよ。

そういう意味では、転ぶことも必要な事なんです。だから観音様から見れば子供がそこで怪我しても、こっちから見ればそれでもいいんです。

でも目の前にいる人は、それは困るというように言うけれど。だからそういう意味では、良いと悪いの境界はありません。だけど実質的にはあります。その実質的な空の中に入ってしまえば、自分も空の中にいるという自覚が出来るし、そうすると全部肯定して物事が見える。そこまで行きましょう。だから肯定して見えない人も、それだってこっちから見ればいいんだよ。だから人間的尺度から見ても肯定できるところまで行きましょうということですよ。

例えば、ベートーベンは、苦勞して、耳が聞こえなくなって大変じゃないですか。だけど人間的に言えば、耳が聞こえないからこそ大きな仕事をしたんだよな。ヘレン・ケラーなんか大変な目にあっているけれども、そういう人というのは人類に貢献してるじゃないですか。それだからこそ。だからそれでいいと言えればそれでいいんだけど、それをいいと言わない世界、もっと現実を生きる人間的な価値で見てるんですよ。もっともっと肉の身を持つ人間的な価値で見て、もっと安心出来る所までそういう世界を作りましょうと言っているんです。

動物の世界とかは、弱肉強食の本当にそういう世界なんだものね。あれ良いとか悪いとかって言っても始まらないですよ。かわいそうだと言ったところで。だけど人間の目から見れば、相手を殺してまで食べるというのは、なるべくしたくないと思うじゃないですか。そういう人間的な目で見て、もうちょっと安心して住める世界まで行きましょうということですよ。

●全肯定と自明行はセットでなければならない

いいですか、ですから人間は既に「空」だと言って間違いは無いのです。言い換えれば、誰かが「私は既に神そのものだ」と言ったとしても、それは原理原則としては、間違いでは無いのです。

このことについて、もう少し説明しなければ成りません。

靈修行の中では、いつ時、この境地を体験させられます。皆さんもチョットくらいは、やっでご覧なさい。これは修行だから意味があるのであって、それを現実世界の中で長く続けることは不可能なのです。変な人間になってしまいますよ。

私でも、この境地は、自明行を極めた後に、最終的に到達したのですからね。これを実効性有るものにするためには、自明行を極めることが絶対条件なのですよ。

「私は既に空に到達していて、完全である」という境地から動くことは、それは靈修行の体験として、早い時期にいつ時体験させられ、「この原理原則では、とても現実社会を生きてはいけない」と知ることが修行なのです。これをそのまま、現実社会に持ってきてはいけない、と悟るべきなのです。

そんなことをこの現実の世界で、そのまま実行してしまうと、とんでもないことになってしまいますよ。しかもですよ、自明行が完全に欠落していたら、これはもう最悪ですね。

さらにですよ、もしも誰かが「私は既に神そのものだ」と言いつつ、「反省はしなくてよい。反省は岩根先生が代わってしてくれる」などと言い出したとしたら、その時はもう、私は全力で、命をかけて組織を破壊しますよ。

岩根先生をよく見て下さい。私は「全ては神の愛の導き」として、全肯定の立場に立っていて、しかも、徹底して自明行を説いています。もし、私が自明行を説かずに、全肯定だけ説いてしまうと、これはもう、フィードバックが掛からない、とんでもない迷いの世界に入ってしまうのです。

つまり、「登山道を外れても、いつかは頂上にたどり着けますよ」、という世界に迷い込むことになるのです。ここを、よくよく理解して、もし登山道を踏み外している人が居たら、いつ時も早く、登山道に戻って欲しいと思いますね。

●さあ、現実に戻って下さい

今日は余計な事をあまりブレーキかけないで思いつくまま言っているから、ちょっと混乱させたかもしれないけれどね。

さあ、明日から現実に戻りましょう。現実の世界で、地に足を付けて生きるのです。だからみなさんも家庭のこととか職場のことで苦勞しているけれど、ちょっと長い目で見ればそれでも別にいいんだよ。どこも悪くないんだよ。

それでいろんな体験してるんだから。それでいいんだよと言ったら、逆に冷たい人だと思われるじゃないですか。だからそうじゃなくて、もっと人間的な目で、もっと毎日を、こんなケンカなんかしないで生きていきたいと思うでしょ。そういう世界まで、しっかり登山道を歩いて行きましょう、ということだからね。

登山道を外れていれば、その事に気づいて、いつときも早く登山道に戻れば良いのです。そして、そのように指導すれば良いのです。

それから、これから私たちは、人類の歴史に残っている宗教や文化に対して、独善を排除して、普遍性を回復する活動をしていくこととなります。それはその宗教の体験者、その文化の体験者に直接係わってもらする必要がありますね。

それに般若心経は大いに役立ってくれるはずです。

これからは、般若心経というすごいものがドッキングしちゃったから、これはこれで徹底してやりましょう。般若波羅密多グループというのは、徹底して般若心経でいいと思う。無理して自明行を中心とした活動に参加しなくてもいいよ。

もちろん、こっちの方に来たいというなら、それはその方がいいですよ。時期が来て、自明行を極めたいと思う人は、そのようにすべきです。心から受け入れます。

そして、その方が良いに決まっています。

今回の洞爺研修会は、とても重要な研修会でしたね。

これまでの活動の経過を整理し、これからの方向性を示すことが出来ました。

それでは、今回はここまでにしておきましょう。

終わり

【むすび】

私の人生の中で、長い間放置し、いつかは受諾しなければならなかったと思っていたこと。それがある日突然、道が開けたことにより、私としては、大きな肩の荷が一つ降りた気持ちでいます。しかしながら、私が受諾しようとしまいと、私の運命はその上で動いているのです。ただ、受諾したことで、私自身の気持ちに変わりがあることは確かです。受諾したことで、使命という重荷がかわりにのしかかった気はしますが、こちらは方向性が見えているので、日々の努力の中で果たしていきたいと思っています。

これまでに、私には幾つかの著書がありますが、この書は、これまで封印してきた、私の空白部分を埋めてくれるはずです。

つまり、これまで私と五井先生との関係については、一切触れてきませんでしたが、ここに、[五井先生伝言80]を契機に、44年間の沈黙を破り、やっと第二の天命啓示を受諾するに至り、堂々と語れることに成りました。

私の修行の中で、位置づけが出来ていない部分がこれで無くなりました。私の本を読んで戴いている方にも、大きな理解の助けとなるはずです。

これまでは、一切を私独りの修行で、絶対普遍の価値体系を体得して、最高の悟りを得たという立場で道を説いてきましたが、救世の大霊団の3人目の**使徒**であることを宣言した限りには、私は次の段階の新たな立場に立つこととなります。これからは、「この私の背後には、2人目の**使徒**の五井先生の悟りが有って、その蓄積のうえに私の悟りと、私の説く道がある」という立場に変更されます。これは重要な進展です。

天命啓示を授かったとき、正直それをそのまま信じるというのは、科学的な、そして論理的な思考回路を持つ私には、到底無理なことでした。この私に、この内容を信じさせるなんて、絶対に不可能なことではないか、とっていました。

しかしながら、ここに示したような44年間のプロセスがあればこそ、私はそれを素直に納得して受け入れることが出来たのです。

結果を知らなくても、成るものは成るという私の信念は見事に証明されました。天命啓示はこのように受け取るのが正しいのだと思います。

科学を学んだ人間として、霊的なことを如何に位置づけるか、には大変苦慮しましたが、このように事実が有って、それを補強することには十分に役立ちましたね。

未来を示されただけでは、未だ可能性の段階であり、未来に振り回されることは避けなければなりません。結果が出て、そこで天命啓示を受け取るのが最も適切なのだと振り返って思いますね。

私の修行の特徴は、誰もが到達していない領域に、たった一人で踏み込んだことにあります。私の切り開いた道は、これまでどれだけ真剣に熱っぽく語っても、誰もが関心を示さない普遍性の回復でした。それは孤独な旅でしたが、ここには人類究極の世界が

ありました。確かに、これは第一の天命啓示で示されたように、釈迦もイエスも到達していない世界です。しかも、それを理論だけでは無く、実践的に示すことが出来たことは、何にもまして、満足しています。

私は現時点で、第一の天命啓示と、第二の天命啓示と、第四の天命啓示の一部を、ここに成就したのだ、と考えています。

これは結果の一部が既に出ている今だからそう言えるのであって、出ていない段階でこれを言うのは無理でしょうね。だからこそ、これが啓示の役割なのでしょうね。啓示というのは重要であると、ここに来て思いますね。

私が遂に切り開いた道は、こうして目に見えるまでになれば、理解者はどんどん出てくるのです。

これまでは、世界平和を語っても、世界平和を祈っていても、私以外の人達は皆普遍性を拒否して、独善を主張していて、それが世界の平和に矛盾することさえ気づかずにいたのです。

それ故に、世界は混沌としていて、平和を祈りながら、どの方向に平和が有るのかさえ分からない時が続きました。

しかし、今は違います。世界平和のために努力すべき方向が明らかになったのです。

私は、生涯をかけて、人類の恒久平和を達成する方法論を実践的に示し、その方向性を示す事が出来たと確信しています。ここに、人類の歴史上の思想や宗教の、集大成が完成したのです。

普遍性をこれほどまでに追求し、実践的に示した教えは他に存在しません。だから、岩根先生の悟りは歴史上最も深いのです。時代がそれを求めたのですね。

混沌の時代の祈りが無駄だったのではありません。普遍性を追求する私の足を引っ張りながらも、祈っていたから、宇宙を貫くその祈りのベクトルに乗って、私はこの道を開拓できたのです。

私は間違いなく、この人跡未踏の世界を切り開くことが出来たのです。そしてもちろん、背後には救世の大霊団の強力な働きかけがあり、さらに人類の歴史の蓄積と、その重みがあるのです。

岩根先生の教えは論理的で難しいという人が居ます。そうなのかも知れません。しかしそれは、私から言えば、生きている内に、そこまでの理解を深めて欲しいと思います。この論理性は生きるためには最低限必要な論理性です。それから、論理性は翻訳しても変わらないので、世界展開には必要なことなのです。

そして最も本質を詳しく説いた岩根先生の理論があつて、その下に情緒性を多用した易しい教えに説きなおすべきなのです。そこに多少の強調や選択があつても、さらには善悪の次元に投影した現実論で説いたとしても、普遍性に徹した岩根先生の教えの下にさえあれば、それらは許されます。宇宙の最も根本に、絶対普遍の岩根先生の教えは位置づけられるのです。

谷口先生や五井先生の教えの素地があれば、岩根先生の教えはとても分かりやすいと

思いますよ。そして、あなたのこれまでの宗教遍歴に画竜点睛を与えることになります。これは人類究極の完成した教えです。宇宙の絶対普遍の真理そのものです。ですから、岩根先生の教えはもはや宗教ではないのです。宇宙そのものなのです。

人類恒久平和のためには、この絶対普遍の真理を情緒性を多用した易しい教えに説きなおす作業が必要なのです。もっともっとかみ砕いて、各分野、各方面に解釈して、説明してくれる人が、沢山出てくるのだと思いますね。皆さんもそのような人になって下さい。是非、あなたにそれをして頂きたいと思います。

最後になりますが、二千年の歴史の中で捉えると、私は守護の神霊に導かれ、たった一人で、絶対普遍の真理を求めて、独善を排し、排他性を嫌い、どこまでも普遍性を追求しつつ、人跡未踏の地を切り進み、最終的に絶対普遍の処女峰に単独登頂したと言えるのです。そして実は、驚くことに、そこには、光り輝く般若心経が置いてあったと比喻できるのです。

般若心経は、仏教再生の論理です。これは他のそれぞれの宗教再生の論理にそのまま応用できます。そして又、本書は五井先生から岩根先生への展開を示しましたが、これはそのまま、他のそれぞれの宗教再生に応用が出来ます。

私はこの般若心経に私の修行の集大成があると考えています。

そして、私の著書と般若心経の中に、世界の宗教の集大成があるとも考えています。

般若心経の暗号は私だから解読できたのです。絶対普遍の価値体系を体得したこの私にしか解読できないのです。

是非、【暗号は解読された般若心経・改訂版／岩根和郎／献文舎】を読んでみて下さい。この書を世に出したことで、大きな反響があり、それは今も続いています。

そこで、この般若心経に関する講演活動も頻繁に行い、その内容は YouTube にあげています。(<https://www.youtube.com/channel/UClukHTYPthssAdW0SwDBpEQ>) 【仏教再生としての般若心経／ YOUTUBE】。(その後は、分かりやすく纏めた【未完成だった般若心経／岩根和郎／献文舎】が出版されています。)

般若心経の解読では、宇宙のフラクタル構造を示し、そこに「空」の真実の姿を示しました。「空」は決してからっぽではなく、超超超実体・超超超人格で有り、生命の根元であり、宇宙の理念です。絶対性と普遍性を矛盾無く統合するのが「空」なのです。その絶対普遍の世界観の下に、人間を、宇宙を、そして「生きることを学ぶ」ことになります。

私は、ついにここに、世界のあらゆる宗教と思想の統合が成された、と考えています。これが「空不動」として成就した私の修行の集大成です。

平成 26 年 11 月 22 日 初版

期せずして、脱稿の日は五井先生の誕生日でした。

平成 28 年 3 月 31 日 更新 (暗号は解読された／般若心経／改訂版の出版後)

平成29年7月2日	更新
平成30年1月28日	更新
平成30年5月4日	更新（「未完成だった般若心経」の出版後）
平成30年6月22日	更新